ナ2五-31
ナ47R-50
C8
4
1

法令全書

省令

○農商務省令第一號

明治二十九年三月法律第六十號獸疫豫防法施行細則左ノ通相定ム

明治三十年一月七日　　農商務大臣子爵榎本武揚

5.28
書籍部

獸疫豫防法施行細則

第一條　警察官又ハ市町村長（特別市制ヲ施行スル市ニ於テハ區長市町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ區戸長又ハ之ニ準スヘキ者）獸疫發生ノ届出ヲ受ケタルトキハ地方長官ニ其旨ヲ報告シ同時ニ其部内ニ榜示スヘシ

第二條　獸疫ニ罹リタル獸類ノ全癒、斃死若クハ撲殺ハ所有者又ハ管理者ニ於テ獸醫ト連署シ直ニ所轄警察官署又ハ市町村役場ニ届出ヘシ

前項ノ届出ヲ受ケタル警察官又ハ市町村長ハ地方長官ニ報告スヘシ

第三條　第一條及第二條第一項ノ届出ヲ受ケタル警察官及市町村長ハ相互速ニ通報スヘシ

第四條　獸疫發生ノ届出又ハ通知ヲ受ケ若クハ其發生ヲ探知シタル警察官ハ直ニ現場ニ出張シ必要アルトキハ獸醫ヲシテ診斷セシムヘシ

第五條　第一條及第二條第二項ノ報告ヲ受ケタル地方長官ハ直ニ其旨管内ニ告示シ農商務大臣及鄰接府縣ノ地方長官ニ報告スヘシ

外國ノ獸疫侵入スルカ又ハ一地方ニ於テ獸疫蔓延ノ兆アルトキハ地方長官ハ農商務大臣及鄰接地竝ニ航路ノ關係アル道廳府縣ノ地方長官ニ急報スヘシ

第六條　地方長官ハ獸疫流行中其狀況ヲ調査シ毎週別記樣式ニ依リ農商務大臣ニ報告スヘシ但シ鼻疽及皮疽ハ毎月末ニ報告スルモ妨ケナシ

第七條　地方長官ハ獸疫豫防法第十二條及第十三條ニ依リ停止ヲ命シタルトキハ其旨農商務大臣及鄰接地竝ニ航路ノ關係アル道廳府縣ノ地方長官ニ報告スヘシ

第八條　獸疫豫防法第三條ニ依リ獸類ノ鎖錮ヲ要スルトキハ之ヲ一定ノ場所ニ繫キ其逸出ヲ防キ又隔離ヲ要スルトキハ病獸ヲ在來ノ場所ニ留置シ健獸ヲ安全ノ場所ニ移シ相互ノ交通ヲ絶チ病毒傳播ノ媒介ヲ防クヘシ

前項ノ隔離ヲ實行シ難キ場合ニハ特ニ警察官ノ許可ヲ得健獸ヲ留置シ病獸ヲ他ニ移スコトヲ得

第九條　獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ヲ鎖錮シ又ハ隔離シタル場所ニハ警察官ノ許可ヲ得タル者ノ外出入スルヲ許サス

第十條　地方長官ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ヲシテ獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ノ鎖錮若クハ隔離ヲ嚴重ニ監督セシムヘシ但シ必要アルトキハ警察官ヲシテ病獸ヲ看守セシムルコトヲ得

第十一條　地方長官ハ所屬官吏、市町村吏及獸醫ニ檢疫委員ヲ命スルコトヲ得

第十二條　地方長官ハ獸疫豫防法第十四條ニ依リ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ヲシテ健獸ノ檢査ヲ行ハシムルコトヲ得

第十三條　地方長官ハ獸疫流行中屠獸場又ハ獸類化製場ノ監督ヲ嚴重ニスヘシ

第十四條　地方長官ハ必要ト認ムルトキハ豫防區域ノ各要所ニ警察官又ハ相當ノ看守人ヲ配置スヘシ

第十五條　獸類ノ撲殺ハ其所在地ニ於テ行フヘシ但シ特別ノ事由アルトキハ燒棄又ハ埋却スヘキ場所ニ於テスルコトヲ得

第十六條　獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ノ屍體ヲ運搬セントスルトキハ天然孔ヲ塞キ全體ヲ消毒包裹シテ汚物ノ脫漏ヲ防クヘシ其脫漏シタル場合ニハ直ニ之ヲ除去シ其場所ヲ消毒スヘシ

第十七條　獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ノ屍體ヲ埋却セントスルトキハ皮膚ヲ亂截シ消毒藥ヲ散布スヘシ

屍體及病毒汚染ノ物品ヲ埋却スル土坑ハ深サ八尺以上トシ屍體及物品ヲ投入シタル後厚ク石灰ヲ散布シ土ヲ以テ土坑ヲ塡塞スヘシ但シ羊痘、豕虎列刺、豕羅斯疫、狂犬病ノ場合ニ於テハ土坑ノ深サ四尺以上トス

第十八條　獸疫豫防法第九條ノ埋却地ハ人家、飲料水、河流及道路ニ接近セサル適當ノ位置ヲ區畫シ木標ヲ建テ人及獸類ノ往來ヲ禁スヘシ

第十九條　獸疫ノ病毒ニ觸接シタル者又ハ其疑アル者ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ消毒シタル後ニアラサレハ他ノ獸類ニ接近スルコトヲ得ス

第二十條　地方長官ハ獸疫豫防法第十二條及第十三條ノ停止ヲ解キタルトキハ其官管內ニ告示シ農商務大臣及鄰接地竝ニ航路ノ關係アル道廳府縣ノ地方長官ニ報告スヘシ

第二十一條　第五條第七條及第二十條ノ報告ヲ受ケタル地方長官ハ其官管內ニ告示スヘシ

第二十二條　獸類ノ屍體及其病毒汚染ノ物品ヲ運搬スルニハ牛疫、傳染性胸膜肺炎及氣腫疽ノ場合ニ於テハ牛、鼻疽及皮疽ノ場合ニ於テハ馬又炭疽ノ場合ニ於テハ牛馬ヲ用フヘカラス

第二十三條　地方長官ハ狂犬病流行ノ際危險アリト認ムル區域ニ於テハ所有者ナキ犬ヲ撲殺セシメ所有者ノ記名アル犬ハ嚴重ニ繫留セシムヘシ但シ使用上必要ナル飼犬ハ口綱ヲ施シ綱ヲ附シテ牽キ行カシムルコトヲ得

第二十四條　消毒ヲ行ハントスル者ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ獸疫豫防心得ニ掲ケタル消毒法ニ依ルヘシ

別記樣式

獸疫每週調査表　自何年何月何日　至何年何月何日

廳府縣名

獸類	種類 牝牡	年齢	發病 月日	病名	斃死撲殺快復 月日	評價金額	手當郡村	所有主氏名

備考　發病地、病原、病勢其他云々

（備考）表中斃死、撲殺及快復ヲ報告スル場合ニ於テ既ニ其獸類ノ發病報告ヲ爲シタルモノハ朱書スヘシ

○拓殖務省令第一號

北海道ニ於ケル縣社以下神職登用ニツキテハ當分ノ内明治二十八年八月内務省令第十號第二條及第三條中直接國税納額ノ制限竝同第七條ニ依ラサルコトヲ得

明治三十年一月十二日　拓殖務大臣子爵高島鞆之助

〔參照〕

内務省令第十號府社縣社以下神社神職登用規則（明治二十八年八月七日）抄錄

第二條　左項ノ一ニ當ル者ニシテ直接國税年額二圓以上ヲ納ムル者ハ試驗ヲ經スシテ社司ニ補スルコトヲ得

一　明治元年以前ニ於テ五代以上引續キ其神社ニ奉祀シタル者ノ子孫

二　神宮皇學館本科及專科ヲ卒業シタル者

三　皇典講究所六等以上ノ學階證書ヲ有スル者

四　滿二年以上判任待遇以上ノ職ニ在リタル者

第三條　左項ノ一ニ當ル者ニシテ直接國税年額二圓以上ヲ納ムル者ハ試驗ヲ經スシテ社掌ニ補スルコトヲ得

一　明治元年以前ニ於テ五代以上引續キ其神社ニ奉仕シタル者ノ子孫

二　神宮皇學館本科及專科ヲ卒業シタル者

三　皇典講究所八等以上ノ學階證書ヲ有スル者

四　滿二年以上判任待遇以上ノ職ニ在リタル者

第七條　社司及社掌ノ候補者ハ闕員ノ二倍トス

○拓殖務省令第二號

本年勅令第三號臺灣總督府巡査服制ハ本年四月一日ヨリ施行ス

明治三十年一月十三日　拓殖務大臣子爵高島鞆之助

○大藏省令第一號

臺灣ニ在勤スル收入官吏出納官吏現金取扱規則第十六條ニ依リ金庫ニ現金ノ拂込ミヲ爲ス場合ニハ左ノ制限ニ從ヒ金庫ニ拂込ムヘシ

第一　收入金高百圓未滿　毎一箇月

第二　收入金高千圓未滿　毎十日

第三　收入金高千圓以上　毎五日

臺灣ニ在勤スル收入官吏出納官吏現金取扱規則第十七條ニ依リ金庫ニ監守證ヲ送付スル場合ニハ其收入官吏本屬廳所在地ノ出納ヲ所轄スル本支金庫ニ送付スヘシ

明治三十年一月十六日　大藏大臣伯爵松方正義

○司法省令第一號

札幌地方裁判所管内雛内區裁判所宗谷登記所本年二月一日ヨリ相廢ス

明治三十年一月十六日　司法大臣清浦奎吾

○外務省令第一號

明治二十六年外務省令第三號公使館領事館費用條例施行細則第十三條中左ノ通改正ス

明治三十年一月十八日　外務大臣伯爵大隈重信

實費精算ヲ要スル費目

一廳費ノ内

備品費ノ内

（天皇、皇族御顔、門章札、國旗、小旗、章印、鳥車（附品共）、轎子（附品共）、机、椅子ノ類、棚、文書箱、鐵函、高字器械、置時計、時計附屬品、蝋燭、燭臺附屬品、蝋燭子掛、掛附大鏡、掛附釣下大點火器、屏風、掛物、掛額、時計、花瓶、食器、窓飾等ノ費用）

右ノ外ニ屬スル備品ノ費用ニシテ臨時部經費ヲ以テ支辨スルモノ

書籍地圖類費、運搬費、其保險料共、爲替料、火災保險料、道路疏水等諸費、見本品購入代

一修繕費ノ内

何所修繕

各所修繕ノ内（帝國政府ニ於テ所有權又ハ永代借用權ヲ有スル地所建物及其附屬物其他一般ノ費物、據附大旗竿等ニ係ル費用　借地借家及其附屬物ニ係ル費用）ニシテ臨時部經費ヲ以テ支辨スルモノ

一裁判及囚徒費

囚徒賄費、囚徒用食器類、囚徒被服費、囚徒治療費、囚徒埋葬費、囚徒護送費、囚徒就役費、雜費、備人料（押丁ニ限ル）、備人被服費（同上）

一朝鮮國居留地取締費ノ内

巡査徽章及帶具費

一賠償及訴訟費

一地所家屋借料

一雜給及雜費ノ内

賞與、謝金

一電信料

一在外國難民貸與金

一墓地管理費

精算ヲ爲サヽル渡切費目

一廳費ノ内

備品費ノ内　實費精算ヲ要スル費目ノ部ニ掲ケタルモノヽ外ニ屬スル備品ノ費用

新聞紙雜誌類費、製本費、筆紙墨文具費、郵便稅、備人被服費、器具器械其他借料

一修繕費ノ内

各所修繕ノ内　借地借家及其附屬物（敷物ヲ除ク）ニ係ル費用

一朝鮮國居留地取締費ノ内

備人料、警察署用雜器具費、消耗品費

一雜給及雜費ノ内

備人料、廣告料、諸手數料、印紙料

一宴會費

○文部省令第一號

明治二十四年文部省令第十二號學級編制等ニ關スル規則ニ追加スルコト左ノ如シ

明治三十年一月十八日　文部大臣侯爵峰須賀茂韶

第十二條　市町村立小學校ニ於テ第二條第三條ニ依リ學級ヲ編制シ若クハ變更セントスルトキハ第二條第一項第一款及第三條第一項第一款ノ場合ヲ除ク外其市町村ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

○文部省令第二號

市町村立小學校補習科ノ教授時間ヲ通常教授時間内ニ於テ定ムルドキハ明治二十四年文部省令第十二號學級編制等ニ關スル規則ニ準シ地方長官ノ許可ヲ受ケテ學級ヲ編制シ及教員ヲ配置スヘシ

其變更ノ場合ニ於ケルモ亦同シ

地方長官ハ特別ノ事情アリト認ムルトキハ一學級兒童數ノ制限内ニ於テ補習科ノ兒童ヲ正教科ノ

學級ニ合セ教授スルコトヲ許スコトヲ得

明治三十年一月十八日　　文部大臣侯爵蜂須賀茂韶

○司法省令第二號

一前橋地方裁判所管內前橋區裁判所伊勢崎出張所管轄佐波郡上陽村ヲ同區裁判所玉村出張所ノ管轄トス

一和歌山地方裁判所管內和歌山區裁判所宮崎出張所管轄海草郡濱中村ヲ同區裁判所鹽津出張所ノ管轄トス

明治三十年一月十九日　　司法大臣清浦奎吾

○農商務省令第二號

明治二十八年農商務省令第七號中「地方稅」ヲ「直接國稅」ニ「三圓」ヲ「五圓」ニ改ム

明治三十年一月二十三日　　農商務大臣子爵榎本武揚

〔參照〕

明治二十八年七月十九日農商務省令第七號ハ北海道ニ設立スル商業會議所會員選擧權被選擧權ニ關スル財產上ノ資格ハ所得稅ニ代フルニ地方稅ヲ以テシ其納額ヲ三圓以上ト定ムルノ件ナリ

○陸軍省令第一號

陸軍召募規則第四條中左ノ通改正ス

明治三十年一月二十九日　　陸軍大臣子爵高島鞆之助

中央幼年學校生徒ノ下「四尺九寸以上」ノ末ニ「但戰死者ノ孤兒ニ在テハ身長本文ノ定限ニ達セサルモ士官候補生ト爲ル迄ニ該定限ニ達スヘキ見込アル者」ノ四十七字ヲ加フ

地方幼年學校生徒ノ下「四尺七寸以上」ノ末ニ「但戰死者ノ孤兒ニ在テハ身長本文ノ定限ニ達セサルモ中央幼年學校生徒ト爲ル迄ニ該定限ニ達スヘキ見込アル者」ノ五十字ヲ加フ

○司法省令第三號

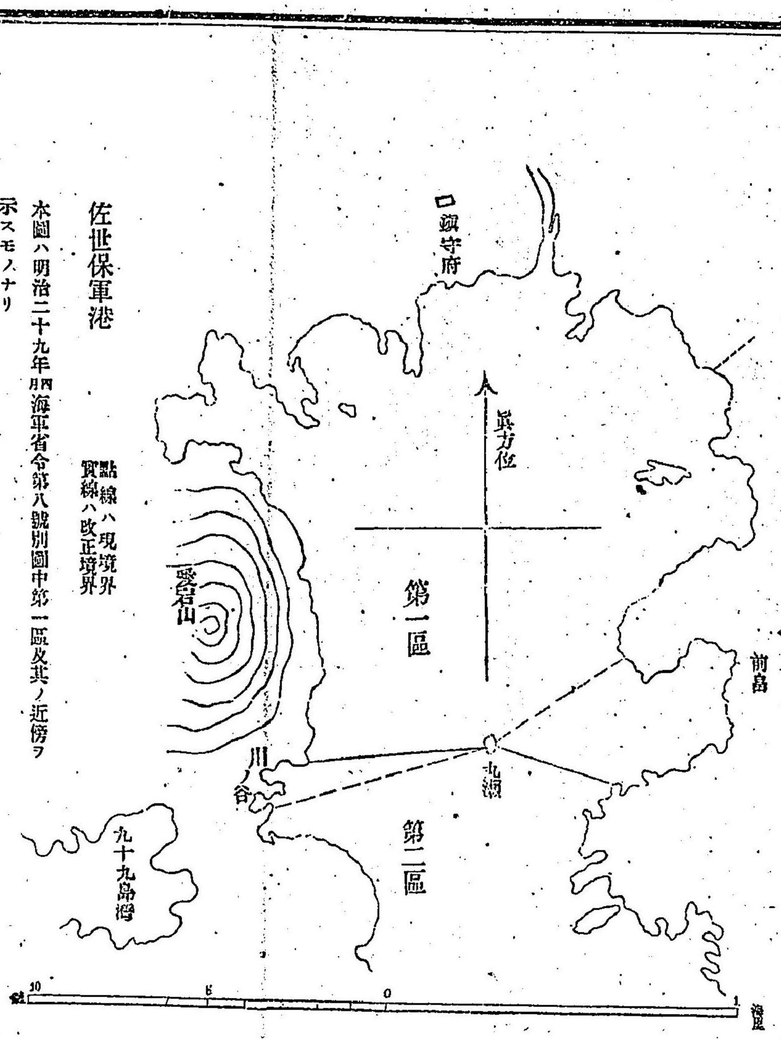
奈良地方裁判所管內五條區裁判所川上出張所ヲ迫出張所ト改稱ス

明治三十年二月六日　　司法大臣清浦奎吾

○海軍省令第一號

佐世保軍港規則中同軍港區域ニ係ル別圖左ノ通改正ス

明治三十年二月九日　　海軍大臣侯爵西鄕從道



○海軍省令第二號

明治二十年海軍省令第十四號ヲ廢ス

明治三十年二月十二日

海軍大臣侯爵西鄕從道

〔參照〕

明治二十年六月海軍省令第十四號ハ海軍演習概則ナリ

○大藏省令第二號

明治二十九年七月勅令第二百六十九號營業稅法施行規則第二十八條ニ依リ稅務管理局長ノ交付スヘキ檢査章樣式左ノ通相定ム

明治三十年二月十三日

大藏大臣伯爵松方正義

樣式、用紙厚質白紙　縱五寸　橫二寸五分

檢査章

稅務管理局印

何稅務署官氏名

何稅務管理局長官氏名

○陸軍省令第二號

明治二十九年陸軍省令第二十四號陸軍召集條例施行細則中左ノ通改正ス

明治三十年二月二十日

陸軍大臣子爵高島鞆之助

第三十七條第八第百三十九條第六ヲ削ル

第百三十三條第百四十三條中「第十七樣式」ヲ「第二十八樣式」ニ改ム

第百三十五條中「國民兵」ノ上ニ「第一」ノ二字ヲ加フ

第百七十四條ヲ削ル

第百八十三條第二項中「人名」ヲ「人員將校ハ人名」ニ改ム

第百八十六條中「演習濟之ヲ」ヲ「召集濟十日以內ニ」ニ改ム

第二百二條中「教育濟」ヲ「召集濟十日以內ニ」ニ改ム

第五樣式欄外ニ左ノ一項ヲ加フ

四　「支給開始迄ノ時間」ハ師團召集發令ヨリ召集令狀ヲ各自ニ交付シ終ル時間ト同數又ハ其ノ以上ニ算スヘシ

第六樣式欄外第二項中「ト召集發令ヨリ召集令狀ヲ各自ニ交付シ終ル迄ノ總時間トヲ比較シ其ノ大ナルモノ」ノ三十七字ヲ削ル

第十四樣式中「何町」ノ下畫中「何日」ノ二字ヲ削ル

第十九樣式欄外第一項中「スヘシ」ノ上ニ「シ其ノ時間ヲ備考ニ記載」ノ十一字ヲ加ヘ第二項中「調査」ノ下ニ「シ旅費支給場ト應召員最遠住宅トノ距離及其ノ行程時間數ヲ備考ニ記載」ノ三十二字ヲ加フ

第二十九樣式ノ一中「(市)」ノ（）ヲ削リ欄外第二項ヲ「木表ノ年齡ハ月數迄ヲ記スルモノトス」ニ改ム

第二十九樣式ノ二中「其ノ他ノ國民兵」ヲ「二十六歲以上」ニ改ム

第三十一樣式欄外記註中「要ス」ヲ「要セス」ニ改ム

第三十八樣式中「召集」及「應」ヲ總テ「參會」ニ改ム

〔參照〕

陸軍省令第二十四號陸軍召集條例施行細則（明治二十九年十二月一日）抄錄

第三十七條　聯隊區司令部ニ於テ充員召集ニ關シ備ヘ置クヘキモノ左ノ如シ

八　召集諸費請求書

第百三十五條　聯隊區司令官ハ翌動員年度初日調ヲ以テ國民兵役ニ轉入スヘキ者ノ人名簿ヲ作リ十月三十一日迄ニ郡市長ニ送付スヘシ

第百三十九條　聯隊區司令部ニ於テ國民兵召集ニ關シ備ヘ置クヘキモノ左ノ如シ

六　召集諸費請求書

第百七十四條　市長ハ豫定ノ期日前ニ條例第五十七條第二項ノ吏員ヲ派遣スヘシ

第百八十三條第二項

師團長條例第六十六條、第六十七條ニ依リ他ノ師管在籍ノ者ヲ召集スルニハ其ノ人名、召集期日、召集日數ヲ定メ少クモ召集期日前二十五日ニ本人所管ノ師團長ニ通知ス該師團長ハ之ヲ聯隊區司令官、地方長官、憲兵隊長ニ通達シ且應召員ノ到著時刻及旅費支給日時ヲ定メテ聯隊區司令官ニ通スヘシ

第百八十六條　召集部隊長ハ應召員到著スルトキハ直ニ身體檢査ヲ行ヒ前條ノ名簿ニ應召不應召其ノ他ノ事故ヲ記入シ流習濟之ヲ聯隊區司令官ニ送付スヘシ傷痍疾病ニ依リ流習ニ堪ヘサル者ハ軍隊手牒ニ其ノ趣ヲ記シ旅費ヲ給シテ歸鄉セシメ其ノ演習召集令狀下士ニ在テハ[illegible]及診斷證書一時服役ニ堪ヘサル者ハ之ヲ要セス聯隊區司令官ニ送付スヘシ

第二百二條　召集部隊長ハ應召員ヲ受領スルトキハ直ニ身體檢査ヲ行ヒ前條ノ名簿ニ合格不合格其ノ他ノ事故ヲ記シ教育濟聯隊區司令官ニ送付スヘシ傷痍疾病ニ依リ教育ヲ爲ス能ハサル者ハ旅費ヲ給シテ歸鄉セシメ其ノ教育召集令狀及診斷證書一時服役ニ堪ヘサル者ハ之ヲ要セス聯隊區司令官ニ送付スヘシ

○陸軍省令第三號

明治二十九年陸軍省令第二十七號陸軍召集諸費支出規程中左ノ通改正ス

陸軍大臣子爵高島鞆之助

明治三十年二月二十日

第十一條第十二條第十三條第一項第二項中「ヲ」ヲ作リノ上ニ「二通」ノ二字ヲ加フ

第十四條中「三月」ノ上ニ「之ニ」第十一條第十二條第十三條ノ諸費概算表一通ヲ添ヘ」ノ二十五字ヲ加フ

第十七條中「二通」ノ二字ヲ削ル

第十八條中「之ニ前條ノ召集諸費概算表一通ヲ添ヘ」ノ十七字ヲ削ル

第二十條中「諸部隊」ノ下ニ「道廳府縣廳警視廳」ノ八字ヲ加フ

〔參照〕

陸軍省令第二十七號陸軍召集諸費支出規程（明治二十九年十二月二十八日）抄錄

第十一條　地方長官警視總監ハ充員召集及國民兵召集ニ際シ道廳、府縣廳、警視廳、警察署、警察分署、巡査駐在所、巡査派出所ニ要スル郵便電信料使丁賃金等竝ニ警察官吏ノ出張旅費ヲ計算シ召集諸費概算表（第四樣式ニ準ス）ヲ作リ二月二十八日迄ニ師團長ニ送付スヘシ

第十二條　聯隊區司令官第八條第九條ノ概算表ヲ受領スルトキハ之ヲ調査シ市ニ於ケル充員召集ニ應スヘキ上長官士官准士官ノ旅費、充員交付官ノ旅費、國民兵身體檢査補助醫ノ旅費及手當、聯隊區國民兵集合場設備費ニ要スル諸費、聯隊區國民兵集合場ヨリ國民兵編成地ニ到ル國民兵引率諸費、聯隊區國民兵集合場ヨリ歸鄉セシムヘキ國民兵見込人員ノ旅費及郵便電信料使丁賃金等ヲ計算シ之ト共ニ一表ニ取纏メ召集諸費概算表（第四樣式）ヲ作リ二月二十八日迄ニ師團長ニ送出スヘシ但第九條第十條ノ金額ハ聯隊區司令部諸費ノ區畫ニ加算スルモノトス

第十三條　諸部隊長ハ必要ニ應シ郵便電信料等ヲ計算シテ召集諸費概算表（第四樣式ニ準ス）ヲ作リ二月二十八日迄ニ師團長ニ差出スヘシ

憲兵隊長ハ充員召集及國民兵召集ニ際シ憲兵隊本部、憲兵分隊首部、憲兵分隊支部、憲兵屯所ニ要スル郵便電信料使丁賃金等竝ニ應兵ノ出張旅費ヲ計算シ召集諸費概算表（第四樣式ニ準ス）ヲ作リ二月二十八日迄ニ師團長ニ送付スヘシ

第十四條　師團長第十一條、第十二條、第十三條ノ概算表ヲ受領スルトキハ之ヲ調査シ充員召集ニ應スヘキ將官同相當官ノ旅費、引率委員ノ集合場ニ到ル旅費、召集事務所ノ諸費、傷痍疾病等ニ依リ諸部隊及集合場ヨリ歸鄉セシムヘキ應召員見込人員ノ旅費、充員召集員集合場ヨリ編入部隊ニ到ル引率諸費及郵便電信料使丁賃金等ヲ計算シ之ト共ニ一表ニ取纏メ召集諸費概算表（第五樣式）三通ヲ作リ三月十日迄ニ陸軍省ニ差出スヘシ

第十七條　聯隊區司令官前條ノ概算表ヲ受領スルトキハ召集諸費概算表（第四樣式）二通ヲ作リ十月三十一日迄ニ師團長ニ差出スヘシ

第十八條　師團長前條ノ概算表ヲ受領スルトキハ召集諸費概算表（第五樣式）三通ヲ作リ之ニ前條ノ召集諸費概算表一通ヲ添ヘ十一月十日迄ニ陸軍省ニ差出スヘシ

第二十條　出納官吏（現金給與ヲ受ケルハ師團司令部聯隊區司令部諸費ヲ諸部隊ノ主任官及島司、郡市長トス但師團長以下同シ）ハ倘ホ島廳、郡記、郡記、市制町村制ヲ施行セサル地方ニ島司、郡長ノ分任出納官吏（分任現金給與ヲ受ケル者ヲ謂フ以下同シ）ヲ置キ之ヲ包含スル以下同シ）ノ職務ヲ執ラシメ若クハ町村長、戸長及之ニ準スヘキ者ニ出納官吏又ハ出納官吏ノ分任出納官吏ノ職務ヲ執ラシムルコトヲ得

○陸軍省令第四號

馬匹調査及檢査施行規則左ノ通定ム

明治三十年二月二十四日

陸軍大臣子爵高島鞆之助

馬匹調査及檢査施行規則

第一條　馬匹ノ所有者ハ毎年十二月一日（北海道ニ在テハ九月一日ノ到達ノ期ヲ指ス以下同シ）ニ現住地ノ市町村長ニ差出スヘシ

第二條　馬匹ノ所有者ハ其ノ馬匹ニ出（町村外ヘ轉シ又ハ譲受ケ、出生シ、疎跡ヲ發見シ若ハ飼養所ヲ現住ノ市内ニ轉シ又ハ徴發免除ノ資格ヲ失ヒタルトキヲ謂フ）生シ、死亡シ、撲殺シ、又ハ徴發免除ノ資格ヲ得タルトキヲ謂フ）ヲ以内（北海道ニ在テハ三十日以内）ニ該馬匹ノ出居書（第三號書式）若ハ入居書（第四號書式）ヲ現住地ノ市町村長ニ差出スヘシ但馬匹ヲ引連レ住所ヲ他ノ市町村ニ轉シタルトキハ舊住地ノ市町村長ニハ該馬匹ノ出居ヲナシ新住地ノ市町村長ニハ該馬匹ノ入居ヲナスモノトス

第三條　市町村長馬匹ノ現在居書ヲ受領シタルトキハ其ノ普通ノ所有者ニ屬スル分ト營業所有者（馬匹ノ賣買ヲ營業ニ屬スル者ヲ謂フ）ニ屬スル分トニ分類シ且左ノ部別ニ依リ綴リ置クヘシ

牡五歳以上乘馬向ノ部
同　輓馬向ノ部
同　馱馬向ノ部
牡四歳以下乘馬向ノ部
同　輓馬向ノ部
同　馱馬向ノ部
同　用役未定ノ部
牝五歳以上乘馬向ノ部
同　輓馬向ノ部
同　馱馬向ノ部
牝四歳以下乘馬向ノ部
同　輓馬向ノ部
同　馱馬向ノ部
同　用役未定ノ部

市町村長馬匹ノ出入居書ヲ受領シタルトキハ其ノ出ニ屬スル分ト入ニ屬スル分トニ區分ヲ立テ且前項ノ分類及部別ニ依リ綴リ置クヘシ

第四條　町村長ハ馬匹ノ現在居書ニ依リ馬匹調査表（第五號書式）ヲ調製シ毎年十二月二十五日（北海道ニ在テハ十一月盡日ス以下同シ）迄ニ郡長ニ差出スヘシ

郡長ハ町村長ヨリ差出シタル馬匹調査表ニ依リ其ノ郡内一般ニ渉ル馬匹調査表（第五號書式）二通ヲ調製シ毎年一月二十日（北海道ニ在テハ十二月盡日）迄ニ徴馬管區（附表ノ管區ヲ謂フ以下同シ）内ノ師團長ニ差出スヘシ

第五條　市長ハ馬匹ノ現在居書ニ依リ馬匹調査表（第五號書式）二通ヲ調製シ毎年一月二十日（北海道ニ在テハ十二月盡日）迄ニ徴馬管區内ノ師團長ニ差出スヘシ

第六條　師團長第四條第二項及第五條ノ馬匹調査表ヲ受領シタルトキハ其ノ一通ヲ軍馬補充部本部長ニ送付スヘシ

第七條　町村長ハ馬匹ノ出入居書ニ依リ毎年三月一日、六月一日及九月一日（北海道ニ在テハ三月一日、六月一日及十二月一日）迄ニ郡長ニ差出スヘシ

郡長ハ町村長ヨリ差出シタル馬匹出入表ニ依リ其ノ郡内一般ニ渉ル馬匹出入表（第六號書式）ヲ調製シ翌月一日（北海道ニ在テハ翌月盡日）迄ニ徴馬管區内ノ師團長ニ差出スヘシ

第八條　市長ハ馬匹ノ出入居書ニ依リ毎年三月一日、六月一日及九月一日（北海道ニ在テハ三月一日、六月一日及十二月一日）迄ニ徴馬管區内ノ師團長ニ差出スヘシ

第九條　市町村長馬匹出入表ノ調製ヲ了ルトキハ其ノ都度第三條第一項ノ届書綴及第二項ノ入届書綴中ヨリ其ノ出ニ屬シタル馬匹ノ届書ヲ訂正若ハ除去シ尚ホ入届書ニ殘餘アルトキハ第一項ノ届書綴ニ編入スヘシ

第十條　馬匹檢査ハ師團長委員ヲ設ケテ其ノ徵馬管區内ニ之レヲ行フ

第十一條　馬匹檢査場ハ檢査ヲ受クヘキ馬匹ノ所在地ヨリ該檢査場ヘ一日間ニ往復シ得ル區域毎ニ一箇所トシ郡市長ノ下調ニ依リ師團長之レヲ定ム但一所ニ多數ノ馬匹ヲ置ク者アルトキハ別ニ其ノ馬匹ノ所在地ヲ以テ檢査場ニ充ツルコトヲ得

第十二條　師團長馬匹ノ檢査ヲ行ハントスルトキハ豫メ其ノ時期馬匹ノ區別一日間ノ檢査馬數其ノ他必要ノ事項ヲ郡市長ニ達スヘシ

第十三條　郡市長第十二條ノ達ヲ受ケタルトキハ二月（北海道ニ在テハ十一月）以前ニ在テハ馬匹調査表三月以後（北海道ニ在テハ十二月以後翌年八月以前）ニ在テハ最近ノ馬匹出入表ニ依リ馬匹檢査下調表（第七號書式）ヲ調製シ師團長ニ差出スヘシ

第十四條　師團長ハ馬匹檢査ノ計畫既ニ成ルトキハ馬匹檢査場ノ位置檢査ヲ行フヘキ馬匹ノ區別馬匹ヲ檢査ニ出場セシムヘキ市町村ノ日割日々檢査ヲ行フヘキ馬匹ノ概數其ノ他必要ノ事項ヲ郡市長ニ達スヘシ

第十五條　郡長第十四條ノ達ヲ受ケタルトキハ馬匹檢査場ノ位置檢査ヲ受クヘキ馬匹ノ區別馬匹ヲ檢査ニ出場セシムヘキ町村ノ日割日々檢査ヲ受クヘキ馬匹ノ概數其ノ他必要ノ事項ヲ町村長ニ達スヘシ

町村長前項ノ達ヲ受ケタルトキハ檢査ヲ受クヘキ馬匹ノ所有者若ハ總代人又ハ管理人ヲ調ヘ其ノ馬匹ヲ檢査ニ出場セシムヘキ日割ヲ定メ馬匹檢査場ノ位置其ノ他必要ノ事項ト共ニ該所有者若ハ總代人又ハ管理人ニ通知スヘシ

町村長前項ノ通知ヲ爲シタル後新ニ檢査ヲ受クヘキ馬匹ノ所有者若ハ總代人又ハ管理人トナリタル者アルトキハ其ノ都度同樣ノ手續ヲ爲スヘシ

第十六條　市長第十四條ノ達ヲ受ケタルトキハ第十五條第二項第三項ト同樣ノ手續ヲ爲スヘシ

第十七條　市長ハ第十四條町村長ハ第十五條第一項ノ達ヲ受ケタル當日調ヲ以テ出場馬匹名簿（第八號書式）ヲ調製シ爾後馬匹檢査當日迄ノ間ニ於テ檢査ヲ受クヘキ馬匹ニ出入アルトキハ其ノ都度該名簿ヲ訂正シ馬匹檢査ノ際馬匹檢査委員ニ差出スヘシ

第十八條　馬匹ノ所有者第十五條第二項第三項若ハ第十六條ノ通知ヲ受ケタルトキハ該通知ニ應シ其ノ馬匹ヲ檢査ニ出場セシムヘシ

第十九條　馬匹ノ所有者ハ馬匹ノ疾病傷痍分娩其ノ他正當ノ理由ニ依テ檢査ニ出場セシムルコト能ハサルトキハ獸醫ノ診斷書若ハ戸主二名ノ證明書ヲ添ヘテ其ノ旨ヲ現住地ノ市町村長ニ届出ヘシ

第二十條　馬匹檢査委員ハ出場馬匹名簿ニ依リ檢査ヲ行フヘシ

第二十一條　郡市町村吏員（北海道ニ在テハ馬匹ノ檢査ニ立會フヘシ

第二十二條　馬匹ノ調査及檢査ニ關スル法律第四條ノ手當及旅費ハ左ノ支給方ニ依ル

一　手當ハ馬匹一頭ニ付拾錢ヲ給ス

一　旅費ハ馬匹一頭ニ付一里毎ニ貳錢五厘ヲ給ス但往復里程ハ通算シ一里未滿ノ端數ハ給セス

第二十三條　馬匹ノ所有者其ノ馬匹ヲ現住市町村外ニ置クトキハ該馬匹所在ノ市町村毎ニ該市町村内ノ現住者中ヨリ該馬匹ノ管理人ヲ設クヘシ但馬匹所在地ニシテ二箇以上ノ市町村ニ跨ルトキハ該馬匹ノ管理人ハ該市町村内ノ現住者一人トシ又馬匹所在地ニシテ該馬匹ノ所有者現住ノ市町村ト他ノ市町村トニ跨ルトキ若ハ本規則未行地ナルトキハ管理人ヲ設クルヲ要セス

馬匹ノ所有者ハ其ノ馬匹ノ管理人ヲ設ケ若ハ變更シ又ハ廢止シタルトキハ其ノ都度十日（北海道ニ在テハ三十日）以内ニ該管理人ノ住所氏名ヲ記シ其ノ旨ヲ該管理人現住地ノ市町村長ニ届出ヘシ

馬匹ノ管理人ハ其ノ管理スル馬匹ニ就テハ該馬匹ノ所有者ニ代リ第一條第二條第十八條第十九條及第二十九條ノ事項ヲ辨スヘシ

第二十四條　馬匹ノ共有者ハ該共有者中ヨリ一人ノ總代人ヲ設ケ該總代人ノ住所氏名ヲ記シ一同連署ノ上十日北海道ニ在テハ三十日以内ニ該總代人現住地ノ市町村長ニ届出ヘシ其ノ總代人ヲ變更シタルトキ亦同シ

前項ノ總代人ハ前項ノ各共有者ニ代リ第一條第二條第十八條第十九條第二十三條第一項第二項及第二十九條ノ事項ヲ辨スヘシ

第二十五條　馬匹ノ所有者第一條第二條第二十三條第二項第二十四條第一項ノ届出ヲ怠リタルトキ第二十四條第一項ノ總代人ヲ設ケサルトキ第十八條第二十三條第一項ニ違犯シタルトキ第十九條ノ届出ヲ怠リ若ハ詐僞ノ届出ヲ爲シタルトキハ一日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

前項ノ罰則ハ馬匹管理人又ハ總代人ニ於テ處辨スヘキ事項ニ在テハ其ノ管理人又ハ總代人ニ適用スルモノトス

附　則

第二十六條　本規則中市トアルハ東京市京都市大阪市及北海道ノ區ニ在テハ區ニ該當ス

第二十七條　本規則中市長トアルハ東京市京都市大阪市及北海道ノ區ニ在テハ區長ニ該當シ町村長トアルハ戸長及之レニ準スヘキ者ヲ包含ス

第二十八條　臺灣沖繩縣北海道所屬ノ島嶼其ノ他町村制ヲ施行セサル島嶼ニハ當分本規則ヲ施行セス但該地方ノ現住者中其ノ所有ノ馬匹ヲ本規則施行地ニ置ク者其ノ馬匹ニ關シテハ此ノ限ニアラス

第二十九條　明治三十年ニ限リ馬匹ノ所有者ハ第一條ノ手續ノ外四月一日調ヲ以テ馬匹ノ現在居書ヲ同日ヨリ十日以内ニ現住地ノ市町村長ニ差出スヘシ

第三十條　明治三十年ニ限リ北海道外ノ郡市町村長ハ第四條及第五條ノ手續ヲ二回施行スヘシ

但第一回ノ馬匹調査表ハ市町村長ニ在テハ第二十九條ノ現在居書ニ依テ調製シ其ノ差出期限ハ町村長ニ在テハ四月二十五日迄郡市長ニ在テハ五月二十日迄トス

第三十一條　明治三十年ニ限リ北海道外ノ郡市町村長ハ第七條第八條及第九條ノ手續ハ九月ヨリ行フヘシ

第三十二條　明治三十年ニ限リ北海道現住ノ馬匹所有者中其ノ馬匹ヲ同道内ニ置ク者ハ同年八月盡日迄ニ第二條第二十三條第二十四條及第二十九條ノ手續ヲ行フニ及ハス

第一號書式（用紙半紙）

馬匹現在居

一性
一年齢
一用役
一體尺
一毛色
有現在候也

年　月　日

現住所
馬匹所有者（總代人）（馬匹管理人）　氏　名　㊞

市町村長宛

注意

一　此ノ届書ハ馬匹一頭毎ニ調製スルモノトス但多數ノ馬匹ヲ所有若ハ管理スル者ノ届書ハ第二號書式ニ據ルコトヲ得

二　性ノ處ニハ「牝」又ハ「牡」ト記載スヘシ

三　用役ノ處ニハ乘馬ニ適スヘキカ輓馬ニ適スヘキカ又ハ駄馬ニ適スヘキカ其ノ見込ヲ定メテ「乘馬向」「輓馬向」又ハ「駄馬向」ト記載スヘシ但四歳以下ノ馬匹中其ノ見込ヲ定メ難キ幼齢ノモノニ限リ「用役未定」ト記載スヘシ

四　體尺ハ肩ノ最モ高キ處ヨリ地面ヘ垂直ニ測リタルモノヲ記載スヘシ

五　馬匹ノ所有者ニシテ馬匹ノ賣買ヲ營業トスルモノヽ届書ニハ氏名ノ上ヲ「營業所有者」ハ「營業所有者總代人」又ハ「營業所有者ノ馬匹管理人」ト記載スヘシ

第二號書式（用紙半紙罫紙）

馬匹現在屆

一性
一五歳以上（四歳以下）
一用役
一毛色
右何頭現在候也

内譯

年齢	體尺	毛色

年　月　日　　現住所
馬匹所有者（總代人）（馬匹管理人）　氏　名　㊞

市町村長宛

注意
一　性、用役、體尺ノ記載方ハ第一號書式ニ同シ
二　多數ノ馬匹ヲ所有若ハ管理スル者ノ屆書ハ此書式ニ據ルコトヲ得但牡馬ノ分ト牝馬ノ分トニ別チ五歳以上ノモノニ在テハ「乘馬向」「輓馬向」「駄馬向」毎ニ各一通宛、四歳以下ノモノニ在テハ「乘馬向」「輓馬向」「駄馬向」「用役未定」毎ニ各一通宛調製スルモノトス
三　馬匹ノ所有者ニシテ馬匹ノ賣買ヲ營業トスル者ノ屆書ニハ氏名ノ上ヲ「營業所有者」若ハ「營業所有者ノ總代人」又ハ「營業所有者ノ馬匹管理人」ト記載スヘシ

第三號書式（用紙半紙）

馬匹出屆

一性
一年齢
一用役
一體尺
一毛色
右何市町村何誰ヨリ讓受（出生）（踪跡發見）（飼養所ヲ現住市町村ヘ轉シ）（徵發免除ノ資格ヲ失ヒ）候也

年　月　日　　現住所
馬匹所有者（總代人）（馬匹管理人）　氏　名　㊞

市町村長宛

注意
一　此ノ屆書ハ馬匹一頭毎ニ調製スルモノトス
二　性ノ欄ニハ「牝」又ハ「牡」ト記載スヘシ
三　年齢、用役及體尺ハ前同樣出シタル現在屆若ハ入屆ニ記載シタルモノヲ記載スヘシ
四　馬匹ノ所有者ニシテ馬匹ノ賣買ヲ營業トスルモノヽ屆書ニハ氏名ノ上ヲ「營業所有者」若ハ「營業所有者總代人」又ハ「營業所有者ノ馬匹管理人」ト記載スヘシ

第四號書式（用紙半紙）

馬匹入屆

一性
一年齢
一用役
一體尺
一毛色
右何市町村何誰ヨリ讓受（出生）（踪跡發見）（飼養所ヲ現住市町村ヘ轉シ）（徵發免除ノ資格ヲ失ヒ）候也

年　月　日　　現住所
馬匹所有者（總代人）（馬匹管理人）　氏　名　㊞

市町村長宛

注意
一　此ノ屆書ハ馬匹一頭毎ニ調製スルモノトス
二　性ノ欄ニハ「牝」又ハ「牡」ト記載スヘシ

三　用役ノ適ニハ乘馬ニ適スヘキカ輓馬ニ適スヘキカ又ハ駄馬ニ適スヘキカ其ノ見込ヲ定メテ「乘馬向」「輓馬向」又ハ「駄馬向」ト記載スヘシ但四歳以下ノ馬匹中其ノ見込ヲ定メ難キ幼齢ノモノニ限リ「用役未定」ト記載スヘシ

四　體尺ハ肩ノ最モ高キ處ヨリ地面ヘ垂直ニ測リタルモノヲ記載スヘシ

五　馬匹ノ所有者ニシテ馬匹ノ賣買ヲ營業トスルモノヲ屆出ニハ氏名ノ上ヲ「營業所有者」若ハ「營業所有者總代人」又ハ「營業所有者ノ馬匹管理人」ト記載スヘシ

第五號書式（用紙美濃紙）

月　調年　馬匹調査表　五歳以上ノ部（四歳以下ノ部）　北海道府縣（郡）郡市町村長　氏名

體尺＼區分	牡馬				牝馬			
	乘馬向	輓馬向	駄馬向	計	乘馬向	輓馬向	駄馬向	計
三尺八寸以下								
三尺九寸								
四尺								
四尺一寸								
四尺二寸								
四尺三寸								
四尺四寸								
四尺五寸								
四尺六寸								
四尺七寸								
四尺八寸								
四尺九寸								
五尺以上								
計								
考備								

注意

一　此ノ表ハ各郡市町村毎ニ調製スルモノトス

二　體尺ヲ記入スルニ方リ寸未滿ハ四捨五入スヘシ

三　四歳以下ノ部ヲ調製スルトキハ「駄馬向」ノ下ニ「用役未定」ノ區劃ヲ增設スヘシ

四　營業所有者ノ馬匹ハ各區畫内ヘ朱ニテ左側ニ記入スヘシ

第六號書式（用紙美濃紙）

月　調年　馬匹出入表　五歳以上ノ部（四歳以下ノ部）　北海道府縣（郡）郡市町村長　氏名

體尺＼區分	牡馬																牝馬											
	乘馬向					輓馬向					駄馬向					乘馬向					輓馬向					駄馬向		
	往現	入	計	出	在現	往現	入	計	出	在現	往現	入	計	出	在現	往現	入	計	出	在現	往現	入	計	出	在現	往現	入	計	出	在現
三尺八寸以下																														
三尺九寸																														
四尺																														
四尺一寸																														
四尺二寸																														
四尺三寸																														
四尺四寸																														
四尺五寸																														
四尺六寸																														
四尺七寸																														
四尺八寸																														
四尺九寸																														
五尺以上																														
計																														
考備																														

注意

一　此ノ表ハ各郡市町村毎ニ調製スルモノトス

二　體尺ヲ記入スルニ方リ寸未滿ハ四捨五入スヘシ

三　既往ノ區畫ニハ三月一日（北海道ニ在テハ三月一日）調ニ在テハ馬匹調査表ノ馬數ヲ記入スヘシ

四　在テハ前回ノ馬匹出入表中ノ現在馬數ヲ記入スヘシ

五　入ノ區畫ニハ既往三箇月間ニ入屆アリタル馬數出ノ區畫ニハ既往三箇月間ニ出屆アリタル馬數ヲ減シタル殘數ヲ記入スヘシ

六　現在ノ區畫ニハ既往ト入ト出ノ合計ヨリ出ノ馬數ヲ減シタル殘數ヲ記入スヘシ

七　四歳以下ノ部ヲ調製スルトキハ「駄馬向」ノ下ニ「用役未定」ノ區畫ヲ增設スヘシ

第七號書式（用紙洋紙）

月　日調　年　馬匹檢査下調表

北海道府縣郡市長　氏　名

檢査場	日次	檢査ヲ受クヘキ町村ノ距離	檢査場ヘ檢査ヲ受クヘキ馬數	檢査ヲ受クヘキ總馬數	檢査場間ノ距離
甲	第一　月　日				
甲	第二　月　日				
乙村	第　何　日				乙村ヘ何里何町 丙町ヘ何里何町 丁村ヘ何里何町
丙町	第　何　日				丙町ヘ何里何町 丁村ヘ何里何町

檢査場	日次	檢査ヲ受クヘキ町村ノ距離	檢査場ヘ檢査ヲ受クヘキ馬數	檢査ヲ受クヘキ總馬數	檢査場間ノ距離
丙町	第　何　日				
丙町	第　何　日				
丁村	第　何　日				丁村ヘ何里何町

備考

注意

一　此ノ表ハ各郡市毎ニ調製スルモノトス

二　營業所有者ノ馬匹ノ數ハ相當區畫内ヘ朱ニテ左側ニ記入スヘシ

第八號書式（用紙半紙）

月　日調　年　出場馬匹名簿

北海道府縣郡市町村長　氏　名

牡（牝）馬五歳以上（四歳以下）ノ部

普通所有者ノ馬匹　何頭

營業所有者ノ馬匹　何頭

計　何頭

内譯

附表

注意

一　此ノ名簿ハ各市町村ニ區別シ牡馬五歳以上ノ部、牝馬五歳以上ノ部、牡馬四歳以下ノ部、牝馬四歳以下ノ部ノ各別ニ

一　調査ノ終ルモノトス

二　營業所有者ノ分ハ朱ニテ記入スベシ

徵馬管區表

所管		道廳府縣	郡市區
師團	衛戍	栃木	各郡
		茨城	各郡市
第一師團		千葉	各郡
		熊谷	各郡市
		群馬	各郡市
		埼玉	各郡
		東京	各郡區
		川崎	各郡市
		神奈	各郡市
		梨山	各郡市
		長野	各郡
第二師團		福島	各郡
		新潟	各郡市
		宮城	各郡市
		青森	各郡市
		秋田	各郡市
		山形	各郡市
		岡山	各郡市
		廣島	各郡市
		鳥取	各郡市
		島根	各郡市
		山口	各郡市
		福岡	小倉、戸畑、若松、八幡、門司、下關、久留米、佐賀
		佐賀	各郡
		熊本	各郡市
		長崎	各郡市
		鹿兒島	各郡市
		沖縄	各郡市
第三師團		宮崎	各郡市
		大分	各郡
		福岡	各郡市
		佐賀	各郡市
		熊本	各郡市
		長崎	各郡
		鹿兒島	各郡市
		宮崎	各郡市
		大分	各郡
		山口	各郡市
第四師團		愛媛	各郡市
		香川	各郡市
		徳島	各郡市
		高知	各郡市
第五師團		廣島	各郡市
		岡山	各郡市
		島根	各郡市
		鳥取	各郡市
		兵庫	各郡市
		大阪	各郡市區
		和歌山	各郡市
		奈良	各郡
		滋賀	各郡
		三重	各郡市
		福井	各郡市
		岐阜	山縣、羽島、揖斐、本巣、坦、安八、不破、養老、郡上、武儀、加茂、恵那、土岐、可兒、海津、岐阜市
		愛知	各郡市
		静岡	各郡市
		山梨	各郡市
		長野	上伊那、下伊那、西筑摩、上水内、下水内、上高井、下高井、北安曇、南安曇、更級、埴科
		群馬	各郡市
		栃木	各郡市
		茨城	各郡市
		千葉	各郡市
		埼玉	各郡市
		東京	各郡市區
		神奈川	各郡市
		山梨	各郡市
		長野	各郡
		新潟	各郡市
		福島	各郡
		宮城	各郡市
		青森	各郡市
		秋田	各郡市
		山形	各郡市
		岡山	各郡市
		廣島	各郡市
		鳥取	各郡市
		島根	各郡市
		山口	各郡市
		福岡	各郡
		佐賀	各郡市
		熊本	各郡市
		長崎	各郡
		鹿兒島	各郡市
		沖縄	各郡市
第六師團		宮崎	各郡市
		大分	各郡
		福岡	各郡市
		佐賀	各郡市
		熊本	各郡市
		長崎	各郡
		鹿兒島	各郡市
		沖縄	各郡市
第七師團		北海道	各郡區
		山口	豐浦、赤間關市

年齢	體尺	毛色	用役	宅地所在地人民所有者	氏名

○大藏省令第三號

明治二十九年大藏省令第十三號中第二條及第三條左ノ通改正ス

明治三十年二月二十五日

大藏大臣伯爵松方正義

第二條　各人ニ關スル條件ハ左ノ如シ

第一種　工事一口ノ金額壹萬圓以上貳萬圓未滿ノ請負ニ付テハ二年以來引續キ直接國稅參圓以上ヲ納ムルコト

第二種　工事一口ノ金額貳萬圓以上參萬圓未滿ノ請負ニ付テハ二年以來引續キ直接國稅五圓以上ヲ納ムルコト

第三種　工事一口ノ金額參萬圓以上四萬圓未滿ノ請負ニ付テハ二年以來引續キ直接國稅七圓以上ヲ納ムルコト

第四種　工事一口ノ金額四萬圓以上五萬圓未滿ノ請負ニ付テハ三年以來引續キ直接國稅拾圓以上ヲ納ムルコト

第五種　工事一口ノ金額五萬圓以上六萬圓未滿ノ請負ニ付テハ二年以來引續キ直接國稅拾五圓以上ヲ納ムルコト

第六種　工事一口ノ金額六萬圓以上七萬圓未滿ノ請負ニ付テハ二年以來引續キ直接國稅貳拾圓以上ヲ納ムルコト

第七種　工事一口ノ金額七萬圓以上八萬圓未滿ノ請負ニ付テハ二年以來引續キ直接國稅貳拾五圓以上ヲ納ムルコト

第八種　工事一口ノ金額八萬圓以上九萬圓未滿ノ請負ニ付テハ二年以來引續キ直接國稅參拾圓以上ヲ納ムルコト

第九種　工事一口ノ金額九萬圓以上拾萬圓未滿ノ請負ニ付テハ二年以來引續キ直接國稅參拾五圓以上ヲ納ムルコト

第十種　工事一口ノ金額拾萬圓以上ノ請負ニ付テハ二年以來引續キ直接國稅四拾圓以上ヲ納ムルコト

第三條　會社ニ關スル條件ハ左ノ如シ

第一種（第二種ニ同シ）工事一口ノ金額壹萬圓以上貳萬圓未滿ノ請負ニ付テハ資本金壹萬圓（株式會社ニ付テハ資本拂込金額以下以上ヲ有スルコト

第二種　工事一口ノ金額貳萬圓以上參萬圓未滿ノ請負ニ付テハ資本金貳萬圓以上ヲ有スルコト

第三種　工事一口ノ金額參萬圓以上四萬圓未滿ノ請負ニ付テハ資本金參萬圓以上ヲ有スルコト

第四種　工事一口ノ金額四萬圓以上五萬圓未滿ノ請負ニ付テハ資本金四萬圓以上ヲ有スルコト

第五種　工事一口ノ金額五萬圓以上六萬圓未滿ノ請負ニ付テハ資本金五萬圓以上ヲ有スルコト

第六種　工事一口ノ金額六萬圓以上七萬圓未滿ノ請負ニ付テハ資本金六萬圓以上ヲ有スルコト

第七種　工事一口ノ金額七萬圓以上八萬圓未滿ノ請負ニ付テハ資本金七萬圓以上ヲ有スルコト

第八種　工事一口ノ金額八萬圓以上九萬圓未滿ノ請負ニ付テハ資本金八萬圓以上ヲ有スルコト

第九種　工事一口ノ金額九萬圓以上拾萬圓未滿ノ請負ニ付テハ資本金九萬圓以上ヲ有スルコト

第十種　工事一口ノ金額拾萬圓以上ノ請負ニ付テハ資本金拾萬圓以上ヲ有スルコト

（參照）

大藏省令第十二號（明治二十九年十月十六日）抄錄

第一條　葉煙草取扱所新築工事若クハ修繕工事ノ競爭ニ加ハラントスルモノハ會計規則第六十九條ニ定メタル資格ノ外尙ホ本令ニ掲クル條件ヲ備フルコトヲ要ス

（第二條第三條略ス）

○司法省令第四號

札幌地方裁判所管內幌泉區裁判所浦河登記所ヲ廢シ幌泉登記所ヲ置キ日高國幌泉郡及ヒ樣似郡幌

滿村醫內村ヲ其管轄トス

但本令ハ本年四月十五日ヨリ施行ス

明治三十年二月二十五日

司法大臣清浦奎吾

○大藏省令第四號

一本年法律第一號ヲ以テ公債利子仕拂期ヲ改正セラレタルニ付既ニ發行シタル鐵道公債證書ハ更ニ新證書ト引換フヘシ

一前項新證書引換マテハ六月拂利札ニ對シテ三月ニ十二月拂利札ニ對シテ九月ニ利子ヲ仕拂フヘシ

但本年三月ニ於テハ利札面金額ノ半額ヲ仕拂フヘシ

明治三十年二月二十六日

大藏大臣伯爵松方正義

○陸軍省令第五號

明治二十九年陸軍省令第二十六號陸軍召募規則中左ノ通改正ス

明治三十年二月二十七日

陸軍大臣子爵高島鞆之助

第七十八條中「志願者」ノ下ニ「（陸軍部內ノ志願者ヲ除ク）」ノ割註ヲ加フ

第七十九條中「軍醫學校長」ヲ「師團軍醫部長」ニ改ム

第八十條第八十一條ヲ左ノ通改ム

第八十條　陸軍部內ノ志願者ニ在テハ願書ニ免狀寫ヲ添ヘテ部隊長ニ差出シ部隊長ハ第二十六條第一項ノ例ニ準シ三月三十一日迄ニ師團軍醫部長ニ送付スヘシ

第八十一條　師團軍醫部長ハ志願者ヲシテ居住地最寄ノ聯隊區司令部附又ハ他ノ部隊附軍醫ノ身體檢査ヲ受ケシメ其ノ合格者ハ學科試驗期日マテニ出京セシメ願書其ノ他ノ書類ヲ取纏メ之ニ志願者人名書ヲ添ヘ軍醫學校長ニ送付スヘシ

前項ノ身體檢査ハ師團軍醫部長豫メ聯隊區司令官又ハ部隊長ニ照會シ之ヲ行ハシムヘシ

第八十一條ノ次ニ左ノ一條ヲ加ヘ以下順次繰下ク

第八十二條　軍醫學校長ハ試驗問題及試驗施行ノ方法ヲ定メ陸軍省醫務局長ノ認可ヲ請ケ又前條ノ書類ヲ審査シ學科試驗施行ノ方法ヲ定メ陸軍省醫務局長ノ認可ヲ請ケ師團軍醫部長及部隊長、郡市長、町村長ヲ經テ之ヲ本人ニ通達シ其ノ採用スヘキ者ニハ入學ヲ命スヘシ

（參照）

陸軍省令第二十六號陸軍召募規則（明治二十九年十二月十九日）抄錄

第七十八條　志願者ハ第八條ニ定ムル願書其ノ他ノ書類ニ醫術開業免狀寫若クハ藥劑師免狀寫ヲ添ヘ二月二十八日迄ニ居住地ノ市町村長ニ差出シ町村長ハ之ヲ郡長ニ差出スヘシ

第七十九條　郡市長ハ志願者ヨリ差出シタル願書其ノ他ノ書類ヲ審査シ第二十五條ノ例ニ準シ三月三十一日迄ニ軍醫學校長ニ送付スヘシ

第八十條　軍醫學校長ハ試驗問題及試驗施行ノ方法ヲ定メ陸軍省醫務局長ノ認可ヲ請ケ又前條ノ書類ヲ審査シ學科試驗期日前身體檢査ヲ結了スル如ク志願者ヲ召集スヘシ

第八十一條　軍醫學校長ハ志願者ノ檢査ヲ行ヒ其ノ成績ニ依リ採用スヘキ者ト否トヲ定メ其ノ人名書ニ檢査書類及郡市長ヨリ受領セシ第七十九條ノ書類ヲ添ヘ陸軍省醫務局長ニ差出シ認可ヲ請ケ郡市長、町村長ヲ經テ之ヲ本人ニ通達シ其ノ採用スヘキ者ニハ入學ヲ命スヘシ

○内務省令第一號

痘苗製造所囑托員雇員公務ノ爲メ旅行スルトキハ當分ノ内左表ノ旅費日當ヲ支給ス

汽車賃	汽船賃	車馬賃	日當
毎一哩ニ	毎一海里ニ	毎一里ニ	毎一日ニ
金四錢	金五錢	金拾錢	金七拾錢

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

明治三十年三月一日

内務大臣伯爵樺山資紀

○遞信省令第一號

電信取扱規則第七十七條左ノ通改正ス

明治三十年三月五日

遞信大臣子爵野村　靖

第七十七條　郵便電信局電信局ニ預リ置キ及留置ク電報ハ其受信人ノ住所氏名ヲ記載シテ七日ヨリ少ナカラサル間其局前ニ掲示スヘシ

〔參照〕

太政官第七號布達電信取扱規則(明治十八年五月七日)抄錄

第七十七條　郵便電信局電信局ニ預リ置キ及留置ク電報ハ其發信人及受信人ノ住所氏名ヲ詳記シテ七日ヨリ少ナカラサル間其局前ニ掲示スヘシ

○内務省令第二號

藥品ノ封緘ニ印紙ヲ貼付スル者ハ明治二十年六月内務省告示第二號衞生試驗所檢査印紙ト同色若クハ之ニ紛ハシキ外觀ヲ有スルモノヲ用ヒ封緘ヲ爲スコトヲ得ス

藥品其ノ他飲食物等ノ檢査ヲ以テ營業トスル者ハ其ノ檢査所ノ名稱又ハ名稱ノ附記ニ衞生試驗所又ハ同音ノ文字ヲ使用スルコトヲ得ス

本令施行前其ノ檢査所ノ名稱又ハ名稱ノ附記ニ衞生試驗所又ハ同音ノ文字ヲ使用シタル者ハ本令施行ノ日ヨリ改稱スヘシ

本令ニ違背シタル者ハ拾圓以內ノ罰金ニ處ス

本令ハ明治三十年六月一日ヨリ施行ス

明治三十年三月九日　內務大臣伯爵樺山資紀

○海軍省令第三號

海軍下士卒現役中刑罰ニ處セラレタルトキハ海兵團ヨリ本人在籍ノ地方廳ニ通知スヘシ

地方廳ニ於テハ前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ島司郡市長（東京市京都市大阪市及市制ヲ施行セサル地方ニ在テハ區長）ニ達シ本人ノ父兄（父兄ナキトキハ親戚）ニ通達セシムヘシ

明治三十年三月十三日　海軍大臣侯爵西鄕從道

○內務省令第三號

第一條　町村制第四條ニ依リ新ニ町村ヲ置キタル場合ニ於テ町村長就職スルニ至ルマテ監督官廳ハ前町村吏員ニ命シ又ハ臨時ニ代理者ヲ選任シ若クハ町村費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ其ノ事務取扱ヲ爲サシムヘシ

前項ニ依リ事務取扱ヲ命シタル前町村ノ吏員及臨時代理者ノ給料（報酬）旅費（實費辨償額）等ハ監督官廳ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第二條　新ニ町村ヲ置キタル場合ニ於テ町村會成立スルニ至ルマテ始メテ議員ヲ選擧スルニ付町村會ノ議決スヘキ事件ハ郡參事會代ツテ之ヲ議決スヘシ

第三條　新ニ町村ヲ置キタル日ヨリ町村稅徵收ニ至ルマテ其ノ町村必要ノ費用ハ其ノ事務取扱者ニ於テ豫算ヲ設ケ監督官廳ノ認可ヲ受クヘシ

前項ノ費用ハ假ニ町村稅ヲ徵收シテ之ニ充テ又ハ前町村ノ引繼金若クハ一時ノ借入金ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

第四條　前條第二項ニ依リ假徵收ヲ爲シタル町村稅ハ追テ町村會ニ於テ該年度ノ收支豫算ヲ議決シタル上町村稅各納人ニ對シ差引徵收ヲ爲スヘシ

第五條　町村制第四條ノ處分ヲ爲シタル爲メ町村ノ消滅シタル場合ニ於テハ其ノ財務ハ實施ノ期日ヲ限リ打切リ決算スヘシ

前項ノ決算ハ其ノ事務ヲ繼承シタル町村長ヨリ其ノ町村會ニ報告スヘシ

第六條　町村制第四條ノ處分ヲ爲シタル爲メ町村ノ消滅シタル場合ニ於テ前町村ニ對スル町村稅其ノ他ノ收入ノ未納金アルトキハ其ノ部分ノ屬スル町村ノ町村長ニ於テ之ヲ徵收スヘシ

第七條　町村ノ一部ヲ分割シテ新ニ町村ヲ置キ又ハ町村ノ區域ヲ變更シタル場合ニ於テ前町村ニ對スル町村稅其ノ他ノ收入ノ未納金アルトキハ其ノ部分ノ屬スル町村ノ町村長ハ前町村長ノ囑托ニ依リ之ヲ徵收スヘシ

第八條　町村公民ノ資格要件中其ノ年限ニ關スルモノハ町村ノ廢置分合若クハ境界變更處分ノ爲ニ中斷セラレサルモノトス

第九條　新町村ノ役場位置ハ府縣知事ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第十條　町村ヲ變シテ市ト爲シ又ハ市ヲ變シテ町村ト爲シ又ハ市制第四條ノ處分ヲ爲シタル場合ニ於テハ法令中別段ノ規程アルモノヲ除ク外總テ此ノ省令ノ規程ヲ準用ス

明治三十年三月十六日　內務大臣伯爵樺山資紀

○海軍省令第四號

海軍少主計候補生採用試驗規則中左ノ通改ム

明治三十年三月十六日　海軍大臣侯爵西鄕從道

第一條第一項願書第一號書式中「選擇科目何」ノ次ニ「隨意科目何」ノ一行ヲ加ヘ同條第二項ヲ左ノ通改ム

前項ノ試驗期日ハ三箇月前ニ官報及新聞紙ヲ以テ告示スヘシ

第三條第一項中「六國際法」ノ次ニ「七數學算術代數」ヲ加ヘ第二項及第三項ヲ削リ第一項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

以上ノ科目ハ試驗ノ際選擇取捨スルコトヲ得ス

同條末項ノ次ニ左ノ一項ヲ追加ス

前記科目ノ外ニ外國語學英佛獨ノ內及簿記學ヲ隨意科目ト爲シ受驗者ノ望ミニ依リ試驗シ相當ノ點數ヲ與フ

〔參照〕

海軍省令第十四號海軍少主計候補生採用試驗規則（明治二十七年十月二十日）抄錄

第一條　海軍高等武官候補生規則第五條ニ依リ海軍少主計候補生タランドスル者ハ願書第一號書式ニ履歷書第二號書式ヲ添ヘ告示シタル試驗期日十日前マテニ海軍省軍務局ニ差出スヘシ

前項ノ試驗期日ハ一箇月前ニ官報ヲ以テ告示スヘシ

第三條　學術試驗ハ左ノ科目ヲ用ヰテ之ヲ行フ

一　憲法　二　民法財產編　三　行政法

四　財政學　五　經濟學　六　國際法

前記科目ノ外ニ外國語學簿記及數學ノ三科目ヲ試驗ス該試驗ノ項目及程度ハ每試驗期日一箇月前ニ官報ヲ以テ告示スヘシ

以上ノ科目ハ試驗ノ際選擇取捨スルコトヲ得ス　但外國語學ハ英佛獨ノ中ニ就キ受驗者ヲシテ豫メ其一ヲ選擇セシメ之ヲ試驗ス

一　刑法　二　商法

三　刑事訴訟法　四　民事訴訟法

以上ノ科目ハ受驗者ヲシテ其中ニ就キ豫メ一科目ヲ選擇セシメ之ヲ試驗ス

第一號書式（用紙美濃紙二ツ折一通）

海軍少主計候補生採用試驗願

私儀海軍少主計候補生採用試驗相受度履歷書相添此段奉願候也

選擇科目　何

年月日　　本籍　姓名

現住所　姓名印

何年何月何日生

年號月　何年何箇月

海軍省軍務局長宛

○大藏省令第五號

臺灣總督府特別會計規則ニ據リ同會計ニ要スル諸報告書仕拂命令領收證及計算書等ノ樣式左ノ通相定ム

大藏大臣伯爵松方正義

明治三十年三月二十二日

一臺灣總督府特別會計規則第三條仕拂計算書ノ樣式ハ明治二十六年大藏省令第三十二號中第一號書式ニ準據シ同書式中「某年度」ノ下ニ「臺灣總督府」ノ五字ヲ加フ

一領收證及現金拂込書領收證書通知書ノ樣式ハ明治二十六年大藏省令第三十二號中第二號及第三號書式ニ據リ「某年度」ノ下ニ「臺灣總督府歲入」ノ七字ヲ加フ

一收入官吏收入報告書歲入事務管理廳收入總報告書仕拂命令金庫出納役仕拂命令受領濟額報告書及繰越計算書ノ樣式ハ明治二十六年大藏省令第三十二號中第四號第五號第六號第七號及第八號書式ニ據リ「某年度」ノ下ニ「臺灣總督府」ノ五字ヲ加フ

一主計簿其他諸帳簿ノ樣式ハ明治二十六年大藏省令第三十二號書式ニ據ル

○司法省令第五號

明治二十四年五月司法省令第四號裁判所書記登用試驗規則第四條中左ノ通改正ス

第四條　「刑事訴訟法」ノ下ニ「及外國語」ノ四字ヲ加フ

明治三十年三月二十二日

司法大臣清浦奎吾

〔參照〕

司法省令第四號裁判所書記登用試驗規則（明治二十四年五月十五日）抄錄

第四條　試驗ハ作文筆寫書取算術獄記ノ外民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中ニ就キ之ヲ施行ス

○遞信省令第二號

航路標識管理所ニ於テ購入スル航路標識用石油供給ノ競爭ニ加ハラントスル者ハ會計規則第六十九條ニ掲クル事項ノ外左ノ資格ヲ備フル者タルヘシ

明治三十年三月二十二日

遞信大臣子爵野村　靖

一　航路標識用石油發火點百六十度以上ノ受負ニ就テハ一日百瓦以上、百四十度以上ノ受負ニ就テハ一日五十瓦以上ヲ製造シ得ル工場ヲ有スル者

○大藏省令第六號

葉煙草專賣法施行細則左ノ通相定ム

明治三十年三月二十六日

大藏大臣伯爵松方正義

葉煙草專賣法施行細則

第一條　葉煙草專賣法第五條ノ屆出ヲ爲ス者ハ第一號ノ書式ニ準シタル書面ヲ所管葉煙草專賣所ニ差出スヘシ

第二條　枯葉蝕損其他不熟葉等ニシテ政府ニ納付スルコト能ハサルモノハ當該官吏ノ承認ヲ受ケ廢棄ノ處分ヲ爲スヘシ

第三條　葉煙草耕作者生葉ノ收穫ヲ了シタルトキハ直チニ其幹根ヲ拔除スヘシ

第四條　葉煙草ハ總テ左ノ葉分ニ據リ調理スヘシ但土地ノ狀況ニ依リ當該官吏ノ承認ヲ得テ葉分ヲ增加スルコトヲ得

一　上葉　最下ニアル三四枚
二　中葉　上葉ノ上本葉マテ
三　本葉　中葉ノ上天葉マテ
四　天葉　最上ニアル三四枚

屑葉等ニシテ前項ノ葉分ニ據リ難キモノハ雜葉トシテ之レヲ調理スヘシ

第五條　聯干ノモノハ各自同尺ノ繩ヲ用ヰ種類葉分每ニ區分スヘシ

幹干ノモノハ葉ノ採收後種類葉分每ニ各自一定ノ把ト爲スヘシ

第六條　葉煙草ハ其種類及葉分ニ據リ區別シ其品類、葉竝同等ノモノヲ取揃ヘ成ルヘク一定ノ枚數ヲ以テ一把トシ輕量ノ藁、紙等ヲ以テ結束シ凡ソ六貫匁ヲ以テ一包トシ每包ニ種類、葉分、產地、姓名ヲ標記シ第二號書式ノ納付書ヲ添ヘ所管葉煙草專賣所ニ納付スヘシ但本文ノ量目ニ滿タサルモノハ別ニ結束シ納付スヘシ

包裝ハ蓆、呉座或ハ菰ノ類ヲ用ヰ葉先ヲ內ニシ十字形ニ積重ネ遠路ノ運搬ニ差支ナキ樣堅固ニ結束スヘシ

第七條　左ニ掲クル如キ調理ノ不充分ナル葉煙草ハ耕作者ニ於テ相當ノ調理ヲ施シタル後ニアラサレハ納付スルコトヲ得ス

一　過度ノ濕氣ヲ含ムモノ
一　幹子付又ハ鍵付ト稱シ其幹ノ部分ヲ附著シアルモノ
一　種類、葉分、葉竝、包裝ノ亂雜ナルモノ

第八條　葉煙草專賣法第十條ノ認許ヲ受ケムトスル者ハ其旨所管葉煙草專賣所ニ申出テ認許ヲ受

クヘシ但貯藏期限四箇月以上ニ渉ルモノハ葉煙草ノ種類、葉分每ニ量目ヲ記載シタル書面ヲ差出スヘシ

第九條　葉煙草耕作者葉煙草ヲ輸出ニ供セムトスルトキハ第三號書式ノ書面ニ現品ヲ添ヘ所管葉煙草專賣所ニ差出スヘシ

第十條　前條ニ據リ葉煙草專賣所ニ保管シタル葉煙草ニ調理ヲ加ヘムトスルトキハ調理ノ理由場所及日時等ヲ詳記シタル書面ニ保管證ヲ添ヘ所管葉煙草專賣所ニ差出シ承認ヲ受クヘシ

第十一條　前條葉煙草ノ調理ヲ了シタルトキハ撰屑、葉莖等葉煙草ヨリ出テタル一切ノ屑ヲ葉煙草ト共ニ所管葉煙草專賣所ニ提供シ其處分ヲ受クヘシ

第十二條　保管葉煙草ヲ輸出セムトスルトキハ其輸出港ヲ指定シテ所管葉煙草專賣所ニ申出テ迴送ノ請求ヲ爲スヘシ

前項ノ葉煙草輸出港ニ到達シタルトキハ葉煙草專賣法第十七條ノ費用ヲ納付シテ保管證ヲ差出シ葉煙草ノ交付ヲ請フヘシ

第十三條　保管證ヲ毀損汚染シタル者ハ所管葉煙草專賣所ニ申出テ保管證ノ交換ヲ求ムルコトヲ得

第十四條　保管證ヲ亡失シタル者ハ葉煙草ノ價格ニ相當スル金錢又ハ國債證券ヲ擔保トシテ提供シ又ハ葉煙草專賣所ニ於テ相當ト認ムル資產ヲ有スル者二名以上ノ保證人ヲ定メ損害ノ保證ヲ爲ストキハ保管葉煙草ノ交付ヲ爲スヘシ

第十五條　收穫ノ葉煙草若クハ認許ヲ受ケタル貯藏葉煙草ヲ亡失シタルトキハ其事由ヲ詳記シ直チニ所管葉煙草專賣所ニ屆出ヘシ

第十六條　葉煙草ノ賣渡ヲ請フ者ハ葉煙草ノ名稱、品類、葉分、數量ヲ葉煙草專賣所ニ申出ヘシ

第十七條　葉煙草ハ包裝ノ儘賣渡ヲナシ分割スルコトナシ但標本トシテ賣渡ヲ爲スモノハ此ノ限ニアラス

第十八條　葉煙草ノ賣渡ヲ受ケタル者ハ直チニ代金ヲ納付シ現品ヲ引取ルヘシ

第十九條　葉煙草ノ賣渡ヲ受ケタル者葉煙草專賣所ノ指定スル金額又ハ之レニ相當スル國債證券ヲ擔保トスルトキハ代金ノ延納ヲ請フコトヲ得

第二十條　葉煙草ノ賣渡ヲ受ケタル者賣渡契約ノ日ヨリ三日以內ニ現品ヲ引取ラサルトキハ相當ノ保管料ヲ徵收ス但契約ヲ解除シタルトキハ此ノ限ニアラス

第一號書式

葉煙草耕作屆

一苗床（賃蒔）（賃入苗）　何歩　所在地何々
一耕作地　何町（村）大字、字、地番、何段歩　此植付見込株數何本
何町（村）大字、字、地番、何段歩　此植付見込株數何本
何町（村）大字、字、地番、何段歩　此植付見込株數何本
計　何段歩　此植付見込株數何本
（接續地ハ一項ニ合記スルモ妨ケナシ）
一煙草ノ種名　何々
一貯藏ノ場所　居宅構內又ハ何々
右及御屆候也
年　月　日　住所　姓名印
何葉煙草專賣所宛

第二號書式

葉煙草納付書

一何種何葉（葉分每ノ名稱ヲ云フ）　何包此量目何貫匁
右納付候也

年　月　日

住所
姓　名印
代理人ヲ以テスルモノハ其姓名ヲモ記載スヘシ

第三號書式

輸出葉煙草保管願

一何種何葉（品目毎ノ名稱ヲ云フ）　何包此量目何貫匁

右輸出ニ供シ度候間御保管相成度此段相願候也

年　月　日

住所
姓　名印

何葉煙草專賣所宛

内務大臣伯爵樺山資紀

何葉煙草專賣所宛

○内務省令第四號

阿片法施行規則左ノ通定ム

明治三十年三月三十日

阿片法施行規則

第一條　阿片製造人阿片ヲ納付セントスルトキハ納付書ニ阿片ノ量目ヲ記シ現品ヲ添ヘ地方廳ヲ經テ内務省ニ申出ツヘシ但現品ニハ量目及本人ノ住所氏名ヲ記シタル木札ヲ付スヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ納付書ヲ受ケタルトキハ現品ハ最寄衞生試驗所ニ送致シ納付書ハ其ノ旨ヲ付記シテ内務省ニ進達スヘシ

衞生試驗所ニ於テ前項ニ依リ阿片ノ送致ヲ受ケタルトキハ試驗ヲ施シ其成績ヲ内務省ニ報告スヘシ

但五匁未滿ノ納付品ハ試驗ヲ施スニ及ハス

第二條　政府ニ於テ賣下クル阿片ノ容器ハ一匁入十匁入五十匁入ノ三種トシ毎器衞生試驗所ノ印紙ヲ以テ封緘スルモノトス

第三條　阿片卸賣人ハ政府ノ會計年度ニ依リ（以下年度トアルモノ皆之ニ倣フ）半年度毎ニ拂下ケヲ受クヘキ阿片ノ數量ヲ豫算シ容器ノ種類員數ヲ記シ之ヲ地方廳ニ請求スヘシ但缺乏ノ節ハ臨時請求スルコトヲ得

第四條　阿片卸賣人ハ其ノ店頭ニ阿片卸賣所ト書シタル看板ヲ掲クヘシ

第五條　阿片製造人及阿片卸賣人族籍住所氏名ヲ變換スルカ又ハ廢業若クハ死亡シタルトキハ十日以内ニ地方廳ニ屆出ツヘシ

阿片製造人及阿片卸賣人廢業シタルトキ又ハ死亡シ相續者其ノ業ヲ繼カサルトキハ既製ノ阿片及販賣殘餘ノ阿片ハ前項ノ期日内ニ納付シ又ハ買戻ヲ請求スヘシ但販賣殘餘ノ阿片ハ本條ノ期日内ニ同業者ニ讓渡スコトヲ得

第六條　第五條ノ屆出納付及買戻ノ請求ハ死亡ノ場合ニ於テハ戸主之ヲ爲スヘシ戸主未定又ハ不在ナルトキハ死者ノ相續者相續者未定又ハ不在ナルトキハ其財産ヲ管理スル者之ヲ爲スヘシ

第七條　地方廳ニ於テハ阿片卸賣人ヲ指定シ又ハ指定ヲ取消シタルトキ及卸賣人住所氏名ヲ變換シ又ハ廢業若クハ死亡シタルトキハ其ノ住所氏名ヲ管内ニ告示シ同時ニ内務省ニ報告スヘシ

第八條　藥劑師藥種商ハ卸賣人タルト否トヲ問ハス阿片ノ受拂高並仕入元賣渡人ノ住所氏名年月日ヲ簿記シ十年間之ヲ保存スヘシ但藥劑師ニ於テ醫師ノ處方箋ニ依リ患者ニ與フルモノハ本條ノ簿記ヲ要セス

第九條　阿片卸賣人ハ毎年度ノ阿片受拂表正副二通ヲ製シ年度後一箇月以内ニ地方廳ニ差出スヘシ

第十條　第四條第九條ニ違反シタル者ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第十一條　第五條第八條ニ違反シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第十二條　此ノ規則ハ明治三十年四月一日ヨリ施行ス

○内務省令第五號

一明治三十年勅令第五十六號沖繩縣間切島吏員規程ノ實施ニ際シ新任間切長又ハ島長ニ事務引繼ヲ了ルマテハ舊吏員ヲシテ從前ノ通事務ヲ取扱ハシムヘシ

一前項沖繩縣間切島吏員規程ノ施行ニ依リ廢職ニ屬スヘキ吏員ノ給料等ハ其ノ廢職ノ月マテ月割ヲ以テ支給スヘシ但シ前項ニ依リ事務取扱ヲ爲シ明治三十年五月以降ニ渉リタル者ノ給料等ハ從前ノ額ニ依リ其ノ事務引繼ヲ了リタル日マテ日割ヲ以テ支給スヘシ

明治三十年三月三十一日　内務大臣伯爵樺山資紀

○遞信省令第三號

明治二十六年遞信省令第十五號西洋形船船長運轉手機關手試驗規程中左ノ通改正ス

明治三十年三月三十一日　遞信大臣子爵野村　靖

第七條二等運轉手ノ款中「航洋船」トアルヲ「船舶」ニ改ム

第十條第一號ヲ削除シ以下各號ヲ順次繰上ク

試驗科目中乙種二等運轉手同一等運轉手同船長ニ關スル部分ヲ左ノ通改ム

乙種

二等運轉手

口述

一　羅針儀ノ解明及用法

二　測程具及測深具ノ解明竝ニ用法

三　船舶運轉及碇泊ノ方法

四　船舶衝突豫防ノ方法

五　船舶信號法ノ大要

六　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

一等運轉手

二等運轉手ノ試驗科目ヲ合セ

筆記

一　航海日誌ノ記載

二　加減乘除應用算法

三　航海日誌ノ算法

四　羅針自差ノ算法

五　海圖ノ應用

口述

一　帆ノ取扱

二　海上衝突豫防法

三　萬國信號法

四　羅針自差ノ測定方法

五　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

船長

二等運轉手及一等運轉手ノ試驗科目ヲ合セ

筆記

一　太陽子午線高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法

二　太陽ノ出沒方位及ハ方位角ニ據リ羅針ノ違差ヲ知ル算法
三　時辰儀及太陽高度ニ據リ經度ヲ知リ又ハ太陽高度及經度ニ據リ時辰儀ノ違差ヲ知ル算法

口述

一　羅針違差ノ解明
二　汽船ノ暗車作用
三　端艇ニ依リ大錨ヲ運送投下シ又ハ之ヲ引揚ル方法
四　航海中不慮ノ事變ニ會シ之ニ應スルノ處置
五　船難ニ際シ人命及船舶ヲ救護スル方法
六　船舶及船長海員ニ關スル法規ノ要領
七　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

〔參照〕

遞信省令第十五號西洋形船舶船長運轉手機關手試驗規程（明治二十六年八月八日）抄錄

第七條　乙種免狀ヲ受有スヘキ受驗人ハ左ノ各款ニ記載スル履歷ヲ有スル者ニ限ル

二等運轉手

二等運轉手ノ受驗人ハ年齡二十年以上ニシテ四年以上航洋船ニ乘組ミ其運航ニ從事シタル者又ハ試驗官ノ允當ト認ムル學校ニ在テ航海運用學卒業ノ上三年以上航洋船ニ乘組ミ其運航ニ從事シタル者

第十條　左ニ掲クル履歷ハ此規程ニ定ムル履歷トシテ採用セス

一　湖川其他平水ノ海上ヲ限リ航通シタル船舶ノ乘組履歷但小形船機關手受驗人ノ履歷トシテハ此限リニアラス

試驗科目

乙種

二等運轉手

筆記

一　航海日誌ノ記載
二　加減乘除應用算法

三　海圖ノ應用

口述

一　檣樯並ニ帆架ノ揚降
二　帆ノ取扱
三　船舶常時運轉ノ方法
四　測程具及測深具ノ解明並ニ用法
五　海上衝突豫防法
六　萬國信號法
七　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

一等運轉手

二等運轉手ノ試驗科目ヲ合セ

筆記

一　航海日誌ノ算法
二　太陽出沒ノ方位ニ據リ羅針ノ違差ヲ知ル算法
三　太陽子午線高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法
四　潮時ノ算法

口述

一　錨錨鎖等ノ取扱及碇泊ノ方法
二　船舶ノ航運ニ關シ之ニ應スル處置
三　貨物積驗法
四　汽船暗車ノ作用
五　日本沿岸水路ノ標識及地勢
六　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項
七　船長

二等運轉手

筆記

一　太陽方位角ニ據リ羅針ノ違差ヲ知ル算法
二　「サムナー」法ニ據リ船舶所在ノ位置ヲ知ル算法

一等運轉手

二等運轉手ノ試驗科目ヲ合セ

三　羅針自差ノ算法
四　「ナビール」自差表調製及用法
　　口述
一　六分儀ノ矯正及用法
二　羅針盤差ノ解明及測定方法
三　原基羅針据付ノ方法
四　汽船運轉ノ方法
五　船舶ニ際シ人命及船舶ヲ救護スル方法
六　颶風ノ解明及避難法
七　船舶及船長海員ニ關スル法規ノ要領
八　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

○陸軍省令第六號

明治十八年陸軍省達甲第三十六號同十九年陸軍省達甲第二號同年陸軍省令甲第三十九號同二十三年陸軍省令第二十九號同二十四年陸軍省令第六號同二十八年陸軍省令第二號同第二十七號ヲ廢止ス

明治三十年四月一日

陸軍大臣子爵高島鞆之助

〔參照〕

明治十八年一月十日陸軍省達甲第三十六號ハ近衛兵滿期本籍地方所管ノ鎮臺豫備役後備役編入ノ者更ニ近衛豫備役後備役編入替ノ件、同十九年六月十日陸軍省達甲第二號ハ近衛下士滿期又ハ家事故障ニ依リ豫備役及後備軍驅員ニ入籍ノ者近衛豫備役ニ轉籍スル件、同年十月九日陸軍省令甲第三十九號ハ陸軍召集條例、同二十三年五月十日陸軍省令第二十九號ハ北海道徴兵令未行地ニ轉籍スル陸軍豫備後備下士卒ハ勤務演習簡閲點呼ニ召集セサル件、同二十四年十五日陸軍省令第六號ハ陸軍豫備將校補充條例第二條ニ依リ勤務演習施行ノトキ召集ニ關スル件、同二十八年二月一日陸軍省令第二號ハ國民兵召集規則、同年十一月八日陸軍省令第二十七號ハ陸軍補充兵召集規則ナリ

○陸軍省令第七號

徴兵事務條例施行細則中左ノ通改正ス

明治三十年四月一日

陸軍大臣子爵高島鞆之助

徴兵事務條例施行細則

第四條第二項中「百五十人以上北海道ニ在テハ概ネ七十人」ヲ「百七十人（交通不便ノ地ニ在テハ概ネ七十人）」以上ニ改ム

第十四條第一項中「配賦人員」ヲ「要員」ニ改ム

第二十一條　身體檢査ニ合格シタル壯丁中讀書算術ヲ能クシ且身元確實ナル者ニシテ抽籤ノ法ニ依ラス現役ニ服セントスルコトヲ志願スル者アルトキハ聯隊區徴兵官又ハ警備隊區徴兵官之ヲ許可スルコトヲ得

第二十二條ノ第四ヲ左ノ如ク改ム

四　第二十一條ニ依リ現役志願ヲ許可シタル者

第二十七條　壯丁名簿進達後條例第三十一條ノ處分前名簿ニ關スル異動ヲ生シタル者若クハ他ノ市町村ヨリ入籍シタル者アルトキハ町村長之ヲ島司郡長ニ報告シ抽籤前ハ島司郡長其ノ名簿ヲ訂正加除シ抽籤後ニ在テハ之ヲ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ通知スヘシ

市ニ在テ壯丁名簿調製後抽籤前本條ニ當ル者アルトキハ市長其ノ名簿ヲ訂正加除シ抽籤後條例第三十一條ノ處分前ニ在テハ之ヲ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ通知スヘシ

第二十九條第一項中「通知スヘシ」ヲ「通知シ抽籤後條例第三十一條ノ處分前ニ在テハ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ヨリ轉籍地ノ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ通知スヘシ」ニ改メ第二項ニ左ノ但書ヲ加フ

但身體檢査前ノ者ニ在テハ成ルヘク其ノ年便宜ノ徵兵署ニ呼出シ檢査ヲ爲シ置クヘシ

第二十九條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第三十條　身體檢査後ハ他ノ徵募區ニ轉籍スルモ總テ舊徵募區ニ於テ之ヲ處分シ其ノ合格者ハ新舊徵募區現役兵補充兵ノ裁決後ニ係リ要員ニ超過スルトキハ順次之ヲ繰下クヘシ

地徵募區同等番號ノ上位ニ列セシム但轉籍

第三十條ヲ第三十一條トシ同條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第三十二條　聯隊區司令官又ハ警備隊司令官條例第四十九條現役兵入營前及補充兵轉籍ノ通報ヲ受ケタルトキハ之ヲ島司郡市長ニ通知シ島司郡長ハ町村長ニ達スヘシ

第三十一條ヲ第三十三條トシ以下第三十三條ニ至ルマテ順次繰下ケ同條ニ左ノ但書ヲ加フ

但戰時若クハ事變ニ際シ各師團ノ充員召集（缺員ヲ補充スル爲メ充員召集ヲ除ク）中ハ島廳郡市吏員ヲ以テ入營兵

引率員ト爲ス其人員ハ入營兵ノ員數ニ應シ島司郡市長適宜之ヲ定ムヘシ

第三十四條ヲ第三十六條トシ同條中「敦賀聯隊區」ヲ「爾江聯隊區」ニ「久留米」ヲ「福岡」ニ改ム

第三十五條ヲ第三十七條トシ以下第三十八條ニ至ルマテ順次繰下ク

第三十九條ヲ第四十一條トシ同條中「及補充兵ヨリ現役兵ニ繰上ケタル者」ヲ「第一補充兵及現役兵ニ繰上ケタル海軍補充兵」ニ改メ「聯隊區司令官ハ」ノ下ニ「第一補充兵ニシテ現役兵ニ繰上ケサル者ヲ除クノ外」ノ二十三字ヲ加フ

第四十條ヲ第四十二條、第四十一條ヲ第四十三條トシ第四十二條ヲ左ノ如ク改ム

第四十四條　補充兵ニシテ他ノ徵募區ニ轉籍（抽籤後其ノ年十一月三十日迄ニ係ルモノヲ包含ス）シタル者ハ新舊住地徵募區同種補充兵最高ノ抽籤番號ヲ率トシ比例ヲ以テ相當番號ノ上位ニ列セシムヘシ

第四十三條ヲ第四十五條トシ以下第四十七條ニ至ルマテ順次繰下ケ同條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第五十條　條例第五十三條ニ依リ寄留地徵募區ニ於テ檢査ヲ受ケタル者本籍徵募區ノ抽籤前日迄ニ前條第二項ノ名簿到達セサルトキハ其ノ年ノ檢査成績ニ依リ翌年假決若クハ終決ノ處分ヲ爲スヘシ

第四十八條ヲ第五十一條、第四十九條ヲ第五十二條トシ同條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第五十三條　北海道ニ於テハ條例第六十三條ノ徵兵令未行地寄留地最寄徵募區ヲ函館區小樽郡室蘭郡ノ三箇所トス

第一樣式體格ノ區畫中「胸廓構造」ヲ「視辨色力」ニ「視辨色力」ヲ「一般構造」ニ改メ同樣式欄外第四項中「ニ該ル」ヲ「（第五項第九項ヲ除ク）相當ノ者タル」ニ改メ左ノ一項ヲ加フ

六　條例第五十三條ニ依リ聯隊區又ハ警備隊區外ノ徵募區ニ於テ身體檢査ヲ受ケ合格シタル者ハ寄留地徵兵官ニ於テ其ノ兵種ヲ豫定シ之ヲ備考ノ區畫ニ記載スヘシ

第二樣式裏面第一項中「學校生徒」以下ヲ「徵兵令第二十三條及明治二十八年勅令第百二十六號第二

條ニ依リ徴集猶豫若クハ延期ニ屬スル者ハ其年間トス」ニ改ム

第六樣式裏欄外ニ左ノ一項ヲ加フ

四　抽籤後裁決迄ニ他ノ徴募區ニ轉籍シタル者ハ表面氏名ノ右側ニ新舊雙方ノ聯隊區名府縣郡市町村名ヲ記載スヘシ

第七樣式ノ二ノ次ニ左ノ樣式ヲ加フ

第七樣式ノ三（徴兵表）

明治何年　第何師管徴兵表　附錄

聯隊區名	武藏	布長	野
氏名	伊豆信濃		
身長 ／ 聯隊區名	甲	乙	丙	丁	戊
五尺六寸以上					
五尺五寸以上					
五尺四寸以上					
五尺三寸五分以上					
五尺三寸以上					
五尺二寸五分以上					
五尺二寸以上					
五尺一寸五分以上					
五尺一寸以上					
五尺五分以上					
五尺以上					
四尺九寸以上					
四尺八寸以上					
四尺八寸未滿					
計					
備考					

〔參照〕

陸軍省令第十號徴兵事務條例施行細則（明治二十九年四月二十三日）抄錄

第四條第二項

一徴募區ニ二箇所以上聯隊區徴兵署ヲ設ケントスルトキハ聯隊區徴兵官謀メ師管徴兵官ノ認可ヲ受ケ一箇所概ネ壯丁百五十人以上北海道ニ在テハ概ネ七十人ヲ召集スヘキ地ニ設クヘシ

第十四條第一項

聯隊區ニ於テ歩兵ノ配賦人員ヲ充スコト能ハサルトキハ聯隊區司令官ヨリ之ヲ師團長ニ具狀シ師團長ハ師管内他ノ各聯隊區ニ配賦スヘシ其ノ配賦ハ壯丁ノ總數ヲ率トシ比例ヲ以テ之ヲ定ムルモノトス

第二十一條　壯丁中體格甲種ニシテ抽籤ノ法ニ依ラス現役ニ服センコトヲ志願スル者アルトキハ聯隊區徴兵官又ハ警備隊區徴兵官ハ本人ノ身元ヲ調査シ確實ト認ムル者ハ之ヲ許可スルコトヲ得

第二十二條　現役兵及補充兵ノ編入順序ハ左ノ如シ

四　甲種合格者ニシテ現役志願ノ者

第二十七條　壯丁名簿進達後抽籤前名簿ニ關スル異動ヲ生シタル者若クハ他ノ市町村ヨリ入籍シタル者アルトキハ町村長之ヲ島司郡長ニ報告シ島司郡長ハ其ノ名簿ヲ訂正加除スヘシ但市ニ在テ壯丁名簿調製後抽籤前本條ニ當ル者アルトキハ市長之ヲ訂正加除スヘシ

第二十九條　壯丁名簿受領後（市ニ在テハ抽籤前）徴募區外ニ轉籍スル者アルトキハ島司郡市長ヨリ壯丁名簿若クハ條例第二十七條ノ名簿ヲ添ヘ轉籍地ノ島司又ハ郡市長ニ通知スヘシ

其ノ異動轉籍地ノ抽籤後ニ係ルトキハ次年ニ於テ假決若クハ終決ノ處分ヲ爲スヘシ

第三十三條　條例第四十三條ノ入營兵引率員及海軍入營兵受領員ハ左ノ如シ

第三十四條　條例第四十三條第二項ノ海軍入營兵集合地ハ左ノ如シ

金澤、富山、敦賀聯隊區ハ　敦賀又ハ直江津

小倉、大分、久留米聯隊區ハ　門司

第三十九條　現役兵及補充兵ヨリ現役兵ニ繰上ゲタル者ハ島司郡市長ヨリ各自ノ戸籍寫ヲ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ送附シ聯隊區司令官ハ之ヲ各隊長又ハ海兵團長ニ送附スヘシ

第四十二條　第一補充兵海軍補充兵（補充兵徴募區ノ現役兵ニ編入スル期限ハ第四十六條ノ若クハ第四十七條ノ若シ）他ノ徴募區ニ轉籍スルトキハ新舊住地徴募區同種補充兵最高ノ抽籤番號ヲ率トシ比例ヲ以テ相當番號ノ上位ニ列セシムヘシ

○外務省令第二號

明治二十六年外務省令第三號公使館領事館費用條例施行細則第十三條中左ノ通追加ス

明治三十年四月二日

外務大臣伯爵大隈重信

實費精算ヲ要スル費目中

備品費ノ內「轎子附國品共」ノ下ニ「端舟附國品共」ノ一廉ヲ加フ

○內務省令第六號

淀川改良工事ニ要スル土砂運搬用鐵軌及機關車其他附屬品供給ノ競爭ニ加ハラントスル者ハ明治二十二年勅令第六十號會計規則第六十九條第一項ノ外尙ホ左ノ資格ヲ備フルコトヲ要ス

明治三十年四月二日

內務大臣伯爵樺山資紀

第一條　資產ニ關スル資格左ノ如シ

第一　各人ハ入札金額ニ應シ左ニ記載スル直接國稅年額ヲ二年以來引續キ納ムルコト

入札金高貳拾萬圓未滿ノトキ　金五拾圓

入札金高貳拾萬圓以上ノトキ　金一百圓

第二　合名會社ニアリテハ其社員ノ納稅額ヲ併セ又合資會社ニアリテハ其業務擔當社員ノ納稅額ヲ併セ前項ノ例ニ依リ直接國稅ヲ納ムルコト

第三　株式會社ニアリテハ入札金高ニ應シ左ニ記載スル資本金ノ拂込濟ナルコト

入札金高貳拾萬圓未滿ノトキ　金貳拾萬圓以上

入札金高貳拾萬圓以上ノトキ　金五拾萬圓以上

第二條　營業ニ關スル資格左ノ如シ

第一　歐州大陸市府若クハ北米合衆國市府ニ於テ支店又ハ代理店ヲ有スルカ又ハ現ニ供給セシトスル物品ノ製造地ニ於テ其物品供給契約履行ニ關スル件ヲ委任セル代理者ヲ有スルコト

第二　入札當時ノ年ヨリ起算シ既往三箇年中ノ少クモ一箇年ニ於テ總計金拾萬圓以上ノ鐵道用外國品ノ供給契約ヲ官廳若クハ鐵道會社ニ對シ完全ニ履行シタル確證アルコト

○陸軍省令第八號

陸軍歸休兵豫備役兵後備役兵第一補充兵ノ演習召集ヲ爲スヘキ年次區分左表ノ通定ム

明治三十年四月二日

陸軍大臣子爵高島鞆之助

演習召集年次區分表

兵種＼區分	歸休兵	豫備役兵	後備役兵	第一補充兵
歩兵	第二年	第二年	第三年	第三年
	第四年	第四年	第五年	第五年
	醫備隊兵ノミ各年次	醫備隊兵各年次	醫備隊兵各年次	醫備隊兵各年次
騎兵	第三年	第二年	第四年	第四年
砲兵	第二年	第二年	第二年	第二年
	第四年	第四年	第四年	第四年
	醫備隊兵ノミ各年次	醫備隊兵各年次	醫備隊兵各年次	醫備隊兵各年次
工兵	第二年	第二年	第三年	第三年
	第四年	第四年	第五年	第五年
輜重兵	第二年	第二年	第三年	第三年
	第四年	第四年	第五年	第五年
砲兵助卒	現役最終ノ四箇月間ニ於テ	第二年	第三年	第三年
	第四年	第四年	第五年	第五年
砲兵輸卒	第三年	第二年	第三年	第三年
輜重輸卒	第三年	第二年	第三年	第三年
雖工				

	靴工	看護手	在役中一回	在役中一回	第三年

備考

一　擔架術卒業ノ者ハ本表ノ外演習上ノ必要ニ應シテ第一年第三年ノ者ヲ召集スルコトアルヘシ

二　豫備役後備役兵卒及看護手ニシテ下士適任證書ヲ所持スル者ハ年次ニ拘ハラス下士ノ勤務演習ニ召集スルコトアルヘシ但此場合ニ於テハ其年ニ於ケル兵卒ノ勤務演習ニ召集セス

三　砲兵輸卒輜重輸卒ハ機動演習ノ際要員ヲ充足スルノ外本表ノ勤務演習ニ召集セス

附則

一　歸休砲兵助卒後備役歩兵砲兵（歩兵砲兵ノ擔架術卒業ノ者ヲ除ク）工兵輜重兵一二等卒砲兵助卒騎兵豫備役兵後備役兵第一補充兵繼工靴工第一補充兵後備役看護手ノ演習召集ハ當分之ヲ行ハス但前表備考第二ニ該ル者ハ此限ニアラス

二　明治二十九年ニ於テ野戰砲兵及電信通信術卒業證書ヲ所持スル工兵ニシテ豫備役第三年ノ勤務演習召集ニ應シタル者ハ豫備役第四年ニ召集セスシテ前項ニ拘ハラス後備役第二年ニ於テ召集ス

三　明治三十年ニ限リ第二第五及第六師管ニ於テ在役第一年第三年ノ歩兵工兵輜重兵竝第一年第二年ノ騎兵ヲ召集スルコトアルヘシ

四　明治二十三年陸軍省令第二號同第二十號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

〔參照〕

明治二十三年一月十日陸軍省令第二號ハ陸軍豫備兵定時演習召集方ノ件、同年六月二十五日陸軍省令第二十號ハ對馬警備隊區在籍豫備後備下士ヲ演習ノタメ召集及其旅費支給方ノ件ナリ

○遞信省令第四號

航路標識管理所ニ於テ購入スル鐵造燈塔供給ノ競爭ニ加ハラントスル者ハ會計規則第六十九條ニ掲クル事項ノ外左ノ資格ヲ備フル者タルヘシ

明治三十年四月二日

遞信大臣子爵野村　靖

第一條　資産ニ關スル條件ハ左ノ如シ

一　直接國稅五圓以上ヲ二箇年以上引續キ納ムル者

二　合名會社ニアリテハ其社員ノ一人又合資會社ニアリテハ其業務擔當社員ノ一人直接國稅五圓以上ヲ二年以來引續キ納ムル者

三　株式會社ニアリテハ資本金貳萬圓以上ノ拂込ヲ終リタル者

第二條　土地及工場等ニ關スル條件ハ左ノ如シ

一　六十尺平方高八十尺ノ建物ヲ容ルヽニ支障ナキ空地ヲ工場ノ構内若クハ其近傍ニ於テ備フル者

二　一回一噸以上ノ銑鐵ヲ鎔解シ得ル鎔爐ヲ備フル者

三　長十六尺ノ鐵柱ヲ削リ得ル旋盤ヲ工場内ニ備フル者

四　幅四尺ノ鐵板ヲ曲ケ得ル板曲機械ヲ工場内ニ備フル者

○陸軍省令第九號

陸軍六週間現役兵條例施行細則左ノ通改正ス

明治三十年四月五日

陸軍大臣子爵高島鞆之助

陸軍六週間現役兵條例施行細則

第一條　六週間現役兵ノ身體檢査ハ徵職ニ就キタル年居住地所在ノ聯隊區内又ハ警備隊區内便宜ノ徵兵署ニ於テ之ヲ行フ但其ノ年ノ入營期日ニ切迫シ若クハ入營期日後徵職トナリタル者ハ翌

年週トス

第二條　府縣廳ニ於テハ徴兵事務條例施行細則第一樣式ニ準シ六週間現役兵名簿ヲ作リ身體檢査ニ先タチ之ヲ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ送付シ檢査ノ手續ヲ協議スヘシ但官立小學校ノ教職モ亦本文同樣該校所在府縣ニ於テ取扱フヘシ

第三條　聯隊區司令官警備隊司令官ハ六週間現役兵ノ身體檢査ニ關シテハ尋常徴兵ト同一ノ取扱ヲ爲シ合格者ニハ附錄第一樣式ノ合格證書ヲ付與シ其ノ名簿ヲ師團長ニ差出シ且其ノ成績ヲ北海道廳長官又ハ府縣知事ニ通知スヘシ

其ノ徴集ニ適セサル者（沖繩縣在籍ノ者ヲ除ク）ハ徴集延期徴集免除又ハ兵役免除ノ處分ヲ爲シ徴集延期名簿ヲ北海道廳又ハ府縣廳ニ送付シ徴集免除名簿及兵役免除名簿ヲ本籍所管ノ島司郡市長（東京市京都市大阪市及北海道ノ區ニ在テハ區長以下同シ）ニ送付スヘシ

第四條　師團長ハ合格者在職地ノ遠近ニ應シ適宜之ヲ各隊ニ配付スヘシ但沖繩縣ニ在職ノ者ハ步兵第四十五聯隊ニ入隊セシムルモノトス

第五條　北海道及沖繩縣ニ在ル者ノ身體檢査ハ左ノ諸項ニ依ルヘシ

一　北海道ニ在ル者ハ札幌聯隊區司令部沖繩縣ニ在ル者ハ鹿兒島聯隊區司令部ニ於テ身體檢査ヲ行フ但北海道ニ在テ師範學校卒業ノ翌年以後ノ者ニ在テハ札幌聯隊區司令部又ハ函館聯隊區司令部若クハ該聯隊區內便宜ノ徴兵署ニ於テ行フ

二　北海道廳及沖繩縣廳ニ於テハ教職トナルヘキ年豫メ第二條ニ準シ名簿ヲ作リ該聯隊區司令部ニ送付スヘシ

三　札幌聯隊區司令官ハ三月一日迄鹿兒島聯隊區司令官ハ成ルヘク五月二十五日ヨリ同月三十一日迄ノ間ニ身體檢査ヲ行フヘシ但第一項但書ニ該ル者ハ此ノ限ニアラス

四　鹿兒島聯隊區司令官ハ合格者ノ人名書ヲ師團長ニ差出シ又其ノ名簿ヲ聯隊長ニ送付スヘシ

五　身體檢査ノ爲メ沖繩縣ヨリ鹿兒島聯隊區司令部ニ到ラシムヘキ者ハ縣官一名之ヲ引率セシムヘシ

第六條　身體檢査ノ後教職ヲ罷メタル者アルトキハ道廳府縣廳ヨリ直ニ師團司令部ニ通報スヘシ但北海道ニ在テハ檢査後入營期日迄ニ教職ヲ命セサル者アルトキ亦同シ

第七條　身體檢査ヲ受ケタル者（沖繩縣在籍ノ者ヲ除ク）ハ其ノ年ノ五月三十一日迄ニ合格若クハ其ノ受ケシ處分ヲ本籍所管ノ島司郡市長ニ屆出ヘシ

本條ノ屆出ヲ爲ササル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第八條　六週間現役兵退營スルトキハ聯隊長（獨立大隊ニ在テハ其ノ隊長警備隊ニ在テハ該司令官以下同シ）ハ該名簿ヲ本籍所管ノ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ送付シ聯隊區司令官警備隊司令官ハ之ヲ島司郡市長ニ送付スヘシ

條例第五條ニ依リ國民軍幹部適任證書ヲ授與シタル者アルトキハ聯隊長其ノ旨ヲ名簿ニ記載シ其ノ國民軍幹部適任證書ハ附錄第二樣式ニ準シ調製スヘシ

第九條　國民軍幹部適任證書ヲ授與セラレタル者ニシテ懲戒處分ヲ受ケ又ハ家資分散若クハ破產ノ宣告ヲ受ケ若クハ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキハ其ノ證書ヲ返還セシム

第十條　前諸條ニ揭クルモノノ外ハ師團長及道廳長官府縣知事協議ノ上之ヲ定ムヘシ

附則

明治三十年ニ於テ徴募スル六週間現役兵ノ身體檢査ハ聯隊區司令部若クハ聯隊區內便宜ノ地ニ於テ施行スルコトヲ得

第一樣式　用紙厚紙

陸軍六週間現役兵合格證書

府(縣)郡(市)町(村)
某長(次)男(弟)(本人ノ生ナレハ其ノ旨ト略スヘシ)
氏名

右檢査合格ニ付此證書ヲ付與ス

年　月　日

何聯隊區司令官(警備隊司令官)氏名　印

凡曲尺六寸

表

心得

一　此證書ヲ所持スル者ノ入營期日ハ六月一日トス
但疾病其他ノ事故ニ由リ期日ヨリ三日以內ニ入營シ難キ者ハ翌年徵集セラルヽモノトス

二　戰時若クハ事變ニ際シテハ其徵集ヲ延ハスコトアルヘシ

裏

第二樣式　用紙烏ノ子紙　七寸八分　五寸六分

第何號

國民軍幹部適任證書

府縣族籍
陸軍六週間現役兵氏名

國民軍幹部適任ノ者ト確認ス

明治何年何月何日

職官位勳功氏名　職印

○內務省令第七號

明治二十九年七月內務省令第八號痘苗賣下規則中左ノ通改正追加ス

第三條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第四條　各痘苗製造所ニ於テ外國ヨリ痘苗ノ請求ヲ受ケタルトキハ內地ノ供給ヲ妨ケサル限リ之ニ應スルコトヲ得

第四條ヲ第五條ト改メ左ノ但書ヲ加ヘ第五條以下順次繰下ク

但外國ニ發送スル痘苗代價ハ一具金三十錢トス

明治三十年四月九日

內務大臣伯爵樺山資紀

〔參照〕
內務省令第八號痘苗賣下規則(明治二十九年七月十一日)抄錄
第四條　痘苗製造所ニ於テ賣下クル痘苗代價ハ一具(五人分)金五錢トシ運送費ヲ要セス

○拓殖務省令第三號

北海道移住民規則左ノ通リ定ム

明治三十年四月十日

拓殖務大臣子爵高島鞆之助
內務大臣伯爵樺山資紀

北海道移住民規則

第一條　開墾ノ目的ヲ以テ國結規約ヲ締結シ北海道ニ移住シ土地ノ貸付ヲ出願セントスル者ハ現住地ノ府縣知事ニ出願シテ證明ヲ受クルコトヲ得

第二條　前條ニ依リ出願スルトキハ左ノ事項ヲ掲記シ府縣知事ニ差出スヘシ

一　事業ノ目的(開墾牧畜植樹等)

二　貸付出願ノ地積

三　移住ノ戸口
四　從來ノ職業
五　總代人ヲ設ケタルトキハ其ノ氏名
六　移住後ニ於ケル鄰保救護ノ方法ヲ設ケタルトキハ其ノ方法
七　移住旅費家屋農具衣食等ノ準備竝ニ支出ノ方法
八　小作ノ方法ニ依ル場合ハ前各項ノ外小作契約

第三條　第一條ノ出願アリタルトキハ府縣知事ハ之ヲ調査シ確實ト認ムルモノニ限リ證明ヲ與フヘシ

第四條　前條ノ證明ヲ受ケタル者ノ爲ニ北海道廳長官ハ別ニ定メタル規程ニ從ヒ其ノ出願ニ依リ開墾地ノ豫定存置ヲ爲スコトアルヘシ

第五條　證明ヲ受ケタル後六箇月ヲ經過シタルトキハ豫定存置ノ出願ヲ爲スコトヲ得ス

第六條　北海道廳ノ下付シタル土地貸付ノ指令書若ハ北海道廳長官又ハ北海道ニ於ケル郡區長ノ證明書ヲ有スル本人又ハ代理人ニアラサレハ府縣ニ於テ北海道ニ移住スヘキ小作人ヲ募集シ又ハ小作人ヲシテ北海道ニ移住セシムルコトヲ得ス

第七條　當該官吏又ハ市町村吏員ヨリ前條ノ指令書若ハ證明書ヲ示スヘキコトヲ命シタルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第八條　第六條第七條ニ違背シタル者ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第九條　第六條ニ依ル小作人ノ募集又ハ移住ヲ妨害シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

○陸軍省令第十號

明治二十九年陸軍省令第二十六號陸軍召募規則第六十四條中「五月三十一日」ヲ「六月十日」ニ「六月十日」ヲ「六月十五日」ニ改正ス

明治三十年四月十七日

陸軍大臣子爵高島鞆之助

〔參照〕
陸軍省令第二十六號陸軍召募規則（明治二十九年十二月十九日）抄錄
第六十四條　一年志願兵中軍醫生、藥劑生ニシテ見習醫官又ハ見習藥劑官ヲ志願スル者ハ第八條ニ定ムル願書其ノ他ノ書類ニ醫術開業免狀寫若クハ藥劑師免狀寫ヲ添ヘ五月三十一日迄ニ部隊長ニ差出シ部隊長ハ之ヲ調査シ六月十日迄ニ師團軍醫部長ニ送付スヘシ

○文部省令第三號

第三高等學校ニ大學豫科ヲ設置ス

第五高等學校ニ工學部ヲ設置シ其修業年限ヲ四箇年トス

此省令ハ明治三十年九月十一日ヨリ施行ス

明治三十年四月十七日

文部大臣侯爵蜂須賀茂韶

○大藏省令第七號

明治三十年法律第三十號ニ依リ水害地地租免除ヲ請ハントスルモノハ收穫ノ皆無タリシ事實ヲ證明シ願書ヲ所轄稅務署ニ差出スヘシ

明治三十年四月二十日

大藏大臣伯爵松方正義

〔參照〕
明治三十年三月三十一日官報法律第三十號ハ水害地方地租特別處分法ナリ

○司法省令第六號

大阪地方裁判所管內大阪區裁判所管轄大阪市南區天王寺ニ同區裁判所天王寺出張所ヲ置キ大阪市

南區ノ內天王寺、生野大字岡分同市東區ノ內東平野町、玉造町、西高津、清堀、鶴橋、中本同市北區ノ內
船江、東成野田、都島大字善源寺ヲ其管轄トス

明治三十年四月二十一日　　司法大臣清浦奎吾

○遞信省令第五號

明治二十年勅令第十二號私設鐵道條例第二條第二號起業目論見書ニ添附スヘキ略圖ニ關スル細則左ノ通リ制定ス

明治三十年四月二十三日　　遞信大臣子爵野村靖

第一條　私設鐵道條例第二條第二號起業目論見書ニ添附スヘキ略圖ハ左ノ二種トス

一、踏測平面圖

縮尺ハ十萬分ノ一トシ線路ノ中心線ハ赤色ヲ彩リ且其ノ經過スル地名及地勢ヲ明記シ停車場ノ位置ヲ示シ距離ハ停車場毎ニ記入スヘシ

一、踏測縱斷面圖

縮尺ノ長サ一吋三十鎖ニシテ高サハ一吋百五十尺トシ中心線地面ノ高低黑色線路基面ノ高低赤色ヲ四十鎖毎ニ記シ隧道赤色及橋梁赤色ノ延長線路ノ勾配及經過地ノ名稱ヲ記入スヘシ

第二條　略圖ニハ踏測者ヲシテ署名捺印セシムヘシ

○內務省令第八號

明治二十六年內務省令第四號醫術開業試驗規則第十四條左ノ通改正ス

第十四條　醫術開業試驗ヲ出願スル者ハ其際左ノ手數料ヲ納ムヘシ

但納付シタル手數料ハ返付セス

前期　　金五圓
後期　　金八圓
齒科　　金八圓

明治三十年四月二十七日　　內務大臣伯爵樺山資紀

〔參照〕

內務省令第四號(明治二十六年四月十四日)抄錄

第十四條　醫術開業試驗ヲ出願スル者ハ其際左ノ手數料ヲ納ムヘシ但納付シタル手數料ハ返付セス

前期試驗手數料　金三圓
後期試驗手數料　金五圓
齒科試驗手數料　金五圓

○內務省令第九號

明治二十六年七月十四日內務省令第十號ノ但書左ノ通改正ス

但試驗手數料金五圓ヲ納ムヘシ

明治三十年四月二十七日　　內務大臣伯爵樺山資紀

〔參照〕

內務省令第十號(明治二十六年七月十四日)

醫術開業試驗後期ノ學說試驗及齒科ノ學說試驗ニ合格シタル者ハ次回以後ノ試驗ニ於テ實地試驗ノミヲ受クルコトヲ得

前項ニ據リ實地試驗ノミヲ受ケントスル者ハ試驗委員長ノ示定シタル期日內ニ願出テ其學說合格承認證ヲ受クヘシ

實地試驗ヲ受ケントスル者ハ其試驗願書ニ試驗委員長ノ學說合格承認證ヲ添ヘ願出ヘシ但試驗手數料金參圓ヲ納ムヘシ

○內務省令第十號

利根川下流改修工事ニ要スル浚渫船及曳船小蒸汽船供給ノ競爭ニ加ハラントスルモノハ明治二十二年勅令第六十號會計規則第六十九條第一項ノ外尙本令ニ揭クル資格ヲ備フルコトヲ要ス

明治三十年四月二十七日　　内務大臣伯爵樺山資紀

第一條　資産ニ關スル資格左ノ如シ

第一　各人ハ入札金額ニ應シ左ニ記載スル直接國税年額ヲ二年以來引續キ納ムルコト

入札金額五萬圓未滿ノトキ　金貳拾五圓以上

入札金額五萬圓以上ノトキ　金五拾圓以上

第二　合名會社ニアリテハ其社員ノ納税額ヲ併セ又合資會社ニアリテハ其業務擔當社員ノ納税額ヲ併セ前項ノ例ニ依リ直接國税ヲ納ムルコト

第三　株式會社ニアリテハ入札金額ニ應シ左ニ記載スル資本金ノ拂込濟ナルコト

入札金額五萬圓未滿ノトキ　金拾五萬圓以上

入札金額五萬圓以上ノトキ　金貳拾萬圓以上

第二條　營業ニ關スル資格左ノ如シ

第一　總噸數百噸以上ノ鐵製若ハ鋼製汽船竝ニ總噸數五十噸以上ノ木製汽船ノ船體汽機及汽罐ヲ製造スルニ適當ナル工場船臺及機械ヲ有シ且從來是等ヲ製造シタル經驗アルコト

第二　造船及機械專門ノ技術者ヲシテ二箇年以上引續キ其業務ヲ擔當セシメ居ルコト

○陸軍省令第十一號

明治二十二年陸軍省令第十九號陸軍部内傳染病豫防規則中左ノ通改正ス

明治三十年四月三十日　　陸軍大臣子爵高島鞆之助

第一條中「明治十三年七月第三十四號布告傳染病豫防規則ノ外」ヲ「明治三十年法律第三十六號傳染病豫防法ニ準スル外」ニ改ム

第二條中「兆アリテ傳染病豫防規則第二條ニ依リ報告ヲ受ケタルトキハ」ヲ「兆アルトキハ」ニ改ム

第十六條中「傳染病豫防規則第一條ノ六病」ヲ「傳染病豫防法第一條ノ八病」ニ改ム

第十七條　臺灣守備部隊及屯田兵ニ在テハ本則ニ準據スヘシ但臺灣守備部隊ニ在テハ本則中師團長ニ關スルコトハ臺灣守備混成旅團長之ヲ區處シ第九條第十條陸軍大臣ノ認可ニ關スルコトハ臺灣總督之ヲ區處スヘシ

〔參照〕

陸軍省令第十九號陸軍部内傳染病豫防規則（明治二十二年十二月二十八日）抄錄

第一條　陸軍部内傳染病豫防ノ方法ハ明治十三年七月第三十四號布告傳染病豫防規則ノ外尚左ノ條項ニ據ルヘシ

第二條　部隊ニ於テ傳染病發生シ又ハ其近傍地方ニ傳染病流行ノ兆アリテ傳染病豫防規則第三條ニ依リ報告ヲ受ケタルトキハ部隊長ハ速ニ之ヲ所管長官ニ申告スヘシ

第十六條　本則ハ傳染病豫防規則第一條ノ六病ニ就テ其取扱ヲ示ス爾餘ノ傳染病ニシテ流行ノ兆アルトキモ亦本則ヲ適用スルコトアルヘシ

第十七條　屯田兵ニ在テモ本則ヲ適用ス

○内務省令第十一號

傳染病豫防法施行規則左ノ通定ム

明治三十年五月一日

内務大臣伯爵樺山資紀

傳染病豫防法施行規則

第一條　警視總監府縣知事ハ其ノ管内ニ傳染病流行ノ兆アリト認ムルトキ及傳染病豫防法第一條ニ掲クル八病ノ外同法ニ依リ豫防方法ノ施行ヲ必要ト認ムル傳染病發生シタルトキハ其ノ性狀ヲ記シテ速ニ内務大臣ニ申報スヘシ但前段ノ場合ニ於テハ鄰接若クハ船舶汽車交通ノ地ノ警視廳府縣廳最寄兵營及最寄港灣ニ碇泊ノ軍艦等ニ通報スヘシ

第二條　市町村長區長（沖繩縣ノ區長以下之ニ倣フ）戸長（戸長ニ準スヘキ者ヲ含ム以下之ニ倣フ）又ハ豫防委員ニ於テ傳染病豫防法第三條ノ居出ヲ受ケタルトキハ互ニ通報シ且警察官吏ニ通報スヘシ但町村長又ハ戸長ニ於テ居出又ハ通報ヲ受ケタルトキハ郡役所島廳ニ報告シ郡長市長島司又ハ區長ハ府縣廳ニ報告スヘシ

市町村長區長戸長又ハ豫防委員ニ於テ傳染病豫防法第四條ノ居出又ハ通報ヲ受ケタルトキハ直ニ醫師ヲシテ診斷セシメ傳染病ナルトキハ前項ノ手續ヲ爲スヘシ

第三條　警察官吏又ハ檢疫委員傳染病豫防法第三條又ハ第四條ノ居出ヲ受ケ又ハ傳染病アルコトヲ知リタルトキハ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ニ通報スヘシ但警察署長又ハ分署長ヨリ府縣廳（東京府ハ警視廳）ニ報告スヘシ

前項ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ醫師ヲシテ診斷セシムルコトヲ得

第四條　市町村長區長戸長又ハ豫防委員第二條ニ依リ傳染病ノ居出又ハ通報ヲ受ケ又ハ傳染病アルコトヲ知リタルトキハ直ニ其ノ家ニ臨ミ清潔方法消毒方法ヲ施行セシムヘシ但警察官吏衛生官吏郡吏員島廳吏員又ハ檢疫委員ハ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ヲ指示シテ其ノ事務ニ從事

スヘシ

第五條　市町村長區長戸長又ハ豫防委員ハ豫防上必要ト認ムルトキハ傳染病患者ヲ傳染病院又ハ隔離病舍ニ入ラシメ健康者ヲ隔離所ニ入ラシムヘシ但警察官吏衛生官吏郡吏員島廳吏員又ハ檢疫委員ハ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ヲ指示シテ其ノ事務ニ從事スヘシ

第六條　警察官吏又ハ檢疫委員ハ傳染病豫防法第八條又ハ第十九條第二ニ依リ左ノ日時間交通ヲ遮斷スルコトヲ得但第十九條第二ニ依リ交通ヲ遮斷スルハ特ニ府縣知事（東京府ハ警視總監）ノ命アル場合ニ限ル

虎列刺

赤痢

患者又ハ死體アル間及患者ヲ入院若クハ入舍セシメ又ハ患者治癒若クハ死亡シタル後消毒方法ノ施行ヲ了リタル時ヨリ起算シ滿五日間

發疹窒扶私

「ペスト」

患者又ハ死體アル間及患者ヲ入院若クハ入舍セシメ又ハ患者治癒若クハ死亡シタル後消毒方法ノ施行ヲ了リタル時ヨリ起算シ滿七日間

前項ノ場合ニ於テ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ハ警察官吏又ハ檢疫委員ノ指示ヲ受ケテ交通遮斷ニ關スル事務ニ從事スヘシ

第七條　左ノ場合ニ於テハ書面又ハ口頭ヲ以テ警察官吏市町村長區長戸長檢疫委員又ハ豫防委員ノ認可ヲ受クヘシ但第一ノ場合ニ於テハ認可ヲ爲シタル吏員ヨリ患者又ハ死體ヲ移スヘキ地ノ吏員ニ通報スヘシ

一　傳染病豫防法第九條ニ依リ傳染病患者及其ノ死體ヲ他ニ移サントスルトキ

二　傳染病豫防法第十條ニ依リ傳染病毒ニ汚染シ若クハ汚染ノ疑アル物件ヲ使用授與移轉遺棄又ハ洗滌セントスルトキ

三　傳染病豫防法第十一條第二項ニ依リ傳染病患者ノ死體ヲ二十四時間內ニ埋葬セントスルトキ

第八條　傳染病豫防法第九條第十條及第十一條第一項ノ場合ニ於テハ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ハ充分消毒方法ヲ施行セシムヘシ但警察官吏衛生官吏郡吏員島廳吏員又ハ檢疫委員ハ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ヲ指示シテ其ノ事務ニ從事スヘシ

第九條　傳染病豫防法第十四條ニ依リ家宅船舶其ノ他ノ場所ニ立入ルハ成ルヘク日出後日沒前ニ於テスヘシ其ノ戸主首長管理人等ニ示スヘキ證票ハ左ノ如シ

木札表　凡一寸　厚紙　凡三寸

傳染病豫防吏員之證

又ハ　面

裏面

官廳公署印

第十條　府縣知事（東京府ハ警視總監）ハ市町村ノ醫師ヲシテ傳染病豫防法第十九條第一ノ檢診ヲ行ハシムルコトヲ得

第十一條　府縣知事（東京府ハ警視總監）傳染病豫防法第十九條第七ニ依リ清潔方法消毒方法等ノ施行ヲ命シタルトキハ第四條ノ規程ヲ準用ス

第十二條　市町村立ノ傳染病院隔離病舍又ハ隔離所ニ於テハ食費藥價ヲ徵收スルコトヲ得其ノ金額ハ市ニ在テハ府縣知事町村ニ在テハ郡長ノ認可ヲ受クヘシ

第十三條　市町村長區長戸長又ハ豫防委員ハ傳染病豫防法第二十六條ニ依リ清潔方法消毒方法ヲ施行スヘシ但警察官吏衛生官吏郡吏員島廳吏員又ハ檢疫委員ハ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ヲ指示シテ其ノ事務ニ從事スヘシ

前項ノ場合ニ於テ市町村ハ必要ナル人夫器具藥品等ヲ供給シ又ハ其ノ費用ヲ支出スヘシ

第十四條　府縣知事ハ衛生組合ヲシテ消毒器具藥品等ヲ設備セシムルコトヲ得

第十五條　傳染病豫防法第二條第十八條（第三項但書ノ場合ヲ除ク）及第十九條ノ地方長官ノ職務其ノ他傳染病豫防法又ハ此ノ規則ノ施行ニ關シ警察ニ屬スル事項ハ東京府ニ於テハ警視總監之ヲ行フ

東京市京都市大阪市ニ於テハ傳染病豫防法又ハ此ノ規則ノ施行ニ關シ市長ニ屬スル職務ハ區長ヲシテ之ヲ補助執行セシムルコトヲ得

第十六條　傳染病豫防法又ハ此ノ規則ノ規程ニシテ其ノ準用シ得ヘキモノヲ除ク外沖繩縣ニ關シ必要ナル事項ハ沖繩縣知事之ヲ定ム

第十七條　傳染病豫防法又ハ此ノ規則ノ施行ニ關シ必要ナル細目ハ警視總監府縣知事之ヲ定ム

島地ニ關シ此ノ規則ノ規程ヲ適用シ難キ場合ニ於テハ警視總監府縣知事ハ別段ノ規程ヲ設クルコトヲ得

○内務省令第十二號

明治十九年三月内務省令第一號中左ノ四項ヲ削除ス

一阿片賣買特許藥舖鑑札下付ノ事

一阿片製造鑑札下付ノ事

一避病院開設ノ事

一檢疫委員設置ノ事

明治三十年五月一日

内務大臣伯爵樺山資紀

〔參照〕

明治十九年三月十日内務省令第一號ハ府縣ニ於テ稟請ヲ要セス處分後報告スヘキ條件ナリ

○農商務省令第三號

明治二十九年農商務省令第五號蠶業講習所蠶種配付規則中ヘ左ノ一條ヲ追加ス

明治三十年五月一日

農商務大臣伯爵大隈重信

第七條　官立公立若クハ公費ノ補助ヲ受クル學校講習所傳習所及試驗場ニシテ蠶業研究ノ爲メ第二條ニ據リ出願スルトキハ第一條ノ資格ヲ有セサルモ二十五蛾分以内ノ蠶種ヲ配付ス

但此場合ニハ第五條第六條ヲ適用セス

○拓殖務省令第四號

傳染病豫防法施行細則ハ本年五月内務省令第十一號ヲ適用スヘシ

明治三十年五月一日

拓殖務大臣子爵高島鞆之助

○拓殖務省令第五號

傳染病豫防委員及檢疫委員設置規程左ノ通相定ム

明治三十年五月一日

拓殖務大臣子爵高島鞆之助

傳染病豫防委員及檢疫委員設置規程

第一條　傳染病豫防法第十五條ニ依リ傳染病豫防委員設置ノ必要アルトキハ北海道廳長官ノ定ムル所ニ從ヒ區ニ於テハ區會議員及町總代人又ハ區住民中又町村ニ於テハ町村總代人又ハ町村住民中ヨリ區長戸長之ヲ選任ス

前項ノ外醫師ヨリ出ツル豫防委員ノ任命モ亦本文ニ準ス

第二條　傳染病豫防委員ハ區長戸長ノ指揮ヲ承ケ其區町村ニ於ケル豫防救治ニ關スル事務ヲ擔任ス

第三條　豫防委員ノ處務規程ハ區ニ於テハ區長之ヲ定メ北海道廳長官ノ認可ヲ經テ之ヲ施行シ町村ニ於テハ戸長之ヲ定メ郡長ヲ認可ヲ經テ之ヲ施行ス

第四條　傳染病豫防法第十八條ニ依リ檢疫委員設置ノ必要ヲ認ムルトキハ北海道廳及郡區官吏醫師等ニ就キ北海道廳長官之ヲ命ス

第五條　北海道廳長官ハ檢疫委員ノ中委員長一人ヲ置キ部下ノ諸員ヲ監督シ庶務ヲ整理セシム

第六條　北海道廳長官ハ必要ト認ムルトキハ管内ニ出張所ヲ置キ檢疫委員ヲ派遣シ檢疫事務ヲ分擔セシムルコトヲ得

第七條　檢疫委員ハ北海道廳長官ノ命ヲ承ケ傳染病ニ關スル豫防救治及汽車船舶ノ檢疫ヲ擔任ス

第八條　檢疫委員ノ職務章程ハ北海道廳長官之ヲ定ム

第九條　本則ニ規定スルモノヽ外必要ナル事項ハ北海道廳長官之ヲ定ム

○文部省令第四號

明治三十年勅令第百四十號第一條ニ基キ道廳及府縣ニ於ケル地方視學ノ定員ヲ定ムルコト左ノ如シ

明治三十年五月五日　　文部大臣侯爵蜂須賀茂韶

北海道廳、東京府、新潟縣、島根縣、長崎縣、鹿兒島縣ニ於ケル地方視學ノ定員ハ各三人其他ノ府縣ハ各二人トス

○文部省令第五號

明治三十年勅令第百四十號第四條ニ基キ地方視學職務規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

明治三十年五月五日　　文部大臣侯爵蜂須賀茂韶

地方視學職務規程

第一條　地方視學ハ内務部ニ屬シ小學校及其他小學校令ニ掲クル學校等ノ視察ニ從事ス

第二條　地方視學視察ノ要項左ノ如シ

一　教育ニ關スル勅語ノ主旨ノ實際ニ行ハルヽ情況

二　教授及管理ノ方法

三　學級ノ編制教員ノ配置學科課程及試驗ノ情況

四　設備ノ整否

五　學事ニ關スル表簿ノ整否

六　學齡兒童就學及出席ノ情況

七　生徒ノ成績及風儀

八　學校衞生ノ情況

九　學校長教員其他學事關係職員ノ執務

十　學事ニ關スル會計及經濟ノ情況

十一　學事集會ノ情況

十二　學事ニ於ル市町村一般ノ感情

十三　學事法令施行ノ情況

十四　其他特ニ必要ト認ムル件

第三條　地方視學ハ左ニ列記スル事項ニ關シ當事者ニ指示スルコトヲ得

一　法令ノ明文ニ牴觸スル事項

二　廳議ノ決シタル事項

三　授業法及學校管理法ニ關スル事項

四　其他特ニ地方長官ノ指命ヲ受ケタル事項

第四條　地方視學ハ學校及郡市役所町村役場ノ帳簿ヲ査閲スルコトヲ得

第五條　地方視學ハ視察ノ際授業時間ヲ變更セシメ時間外ニ授業ヲ爲サシメ又ハ授業ヲ休止セシムルコトヲ得

第六條　地方視學ハ視察ノ際當事者ノ參席ヲ求ムルコトヲ得

第七條　地方視學ハ當事者ニ對シ説明ヲ求ムルコトヲ得

第八條　地方視學ハ生徒ノ學業ヲ試驗スルコトヲ得

第九條　地方視學ハ視察ノ情況ヲ具シ意見ヲ附シテ地方長官ニ復命スヘシ

○内務省令第十三號

傳染病豫防法第六條ニ依リ清潔方法消毒方法左ノ通定ム

明治三十年五月六日　　内務大臣伯爵樺山資紀

第一章　清潔方法

第一條　清潔方法ノ要項左ノ如シ

一　傳染病患者アリタル家ニ於テハ殊ニ患者ノ居室其ノ他病毒汚染ノ疑アル場所ニ注意シ消毒方法ノ施行ヲ了リタル後掃除ヲ行ヒ其ノ塵芥ハ之ヲ燒却スヘシ

二　家屋掃除ノ際床下ノ塵芥其ノ他ノ不潔物ハ之ヲ取除ケ燒却スヘシ

三　傳染病患者アリタル家ノ井戸流臺所流、便所又ハ芥溜ノ掃除ヲ要スルトキハ消毒方法ノ施行ヲ了リタル後之ヲ行フヘシ但必要ノ場合ニハ修理改造及井戸浚ヲ爲スヘシ

四　傳染病豫防法第五條第二項ノ場合ニ於テハ前各號ヲ準用スヘシ

第二條　傳染病流行ニ際シ溝渠ヲ攪拌スルハ却テ病毒蔓延ノ媒介ヲ爲スノ虞ナシトセス必要ノ場合ニハ消毒藥(生石灰末若クハ石灰)ヲ投シタル後浚渫スヘシ

第三條　傳染病ノ流行前又ハ流行後ニ於テ清潔方法ヲ行ヒ家宅ノ掃除溝渠ノ浚渫ヲ爲ス場合ニ於テハ濫リニ消毒藥ヲ撒布スヘカラス

第四條　溝渠ヲ浚ヘタル汚泥塵芥ハ直ニ一定ノ運搬器ニ入レ健康上有害ナラサル樣一定ノ場所ニ棄ツヘシ汚泥ヲ路傍ニ散逸セシメ又ハ之ヲ堆積スヘカラス

第二章　消毒方法

第五條　消毒方法ハ左ノ四種トス

一　燒却

二　蒸汽消毒

三　煑沸消毒

四　藥物消毒

第六條　燒却ニ適スルモノハ左ノ如シ

一　傳染病患者若クハ死體ニ用ヒタル被服、臥具、布片、便器其ノ他ノ器具等ニシテ甚シク病毒ニ汚染シ消毒後再ヒ用ニ供スル目的ナキモノ

二　傳染病患者ノ吐瀉物其ノ他ノ排泄物等

第七條　蒸汽消毒ニ適スルモノハ左ノ如シ

一　衣服、臥具、布片等總テ絹布、綿布、麻布、毛織物類

二　硝子器、陶器、磁器其ノ他鑛製若クハ木製品類等ニシテ汽熱ニ堪フルモノ

第八條　蒸汽消毒ヲ施行スルトキハ左ノ各項ニ注意スルヲ要ス

一　革類、革製品、漆器其ノ他ノ塗物類、護謨製品、護謨附品、糊附品、膠附品、毛皮、象牙、鼈甲、角ノ類ハ物品ヲ損スルヲ以テ蒸汽消毒ヲ避クヘシ

二　被服類ニ蒸汽消毒ヲ施スニハ豫メ袖中又ハ衣嚢中ヲ檢索シ若シ彈丸、火藥等爆發又ハ發火シ易キ物品アルトキハ之ヲ取出スヘシ又消毒中他物ニ染色ノ恐アルモノ等ハ蒸汽消毒ヲ避クヘシ

三　蒸汽消毒ハ流通蒸汽ヲ用ヒ成ルヘク消毒器中ノ空氣ヲ驅逐シ一時間以上攝氏百度以上ノ濕熱ニ觸レシムヘシ

第九條　煮沸消毒ニ適スルモノハ蒸汽消毒ニ適スルモノニ同シ

煮沸消毒ハ沸騰後一時間以上煮沸スヘシ

第十條　藥物消毒ニ供スル藥劑竝其ノ用法ハ左ノ如シ

一　石炭酸水(二十倍)結晶石炭酸五分鹽酸一分水九十四分

石炭酸水ヲ製スルニハ石炭酸五分ニ凡水一分ヲ加ヘ攪拌又ハ振盪シツヽ徐々ニ定量ノ水ヲ注キ後鹽酸一分ヲ加フヘシ溫湯ヲ用フレハ其ノ溶解殊ニ速カナリトス但使用ノ際ハ每回振盪スルヲ要ス

石炭酸水ハ各種物件ノ消毒ニ適ス但使用ノ際ハ左ノ諸件ニ注意スヘシ

一　吐瀉物其ノ他排泄物ニハ同容量ヲ加ヘ能ク攪拌スヘシ

二　器具室內等ヲ消毒スルニハ洗滌シタル後更ニ淨水ヲ以テ洗淨スヘシ

三　手足等ヲ消毒スルニハ擦拭又ハ撒布スヘシ

四　衣類等ヲ消毒スルニハ鹽酸ヲ加ヘサルモノヲ用ヒ十二時間以上浸漬シ其ノ後淨水ヲ以テ更ニ洗濯スヘシ

二　昇汞水(千倍)昇汞一分、鹽酸十分、水九百八十九分

昇汞水ヲ製スルニハ昇汞ヲ定量ノ水ニ溶解シ後鹽酸ヲ加フヘシ

昇汞水ハ猛毒ニシテ無色無臭ナルカ爲メ危險ヲ速キ易キノ虞アリ故ニ貯藏使用ノ際充分ニ注意ヲ加ヘ又其ノ危險ヲ防カン爲メ凡十萬分一ノ「プロキシン」ヲ加ヘテ著色シ一見識別シ易カラシムルヲ要ス但金屬製ノ器ニ貯藏スヘカラス

昇汞水ハ陶器硝子器又ハ木製器具ノ消毒ニ用フヘシ飲食器、玩具、疊敷物ノ消毒飲料水ニ滲透スヘキ場所ノ消毒及金屬製品、糞便、吐瀉物ノ消毒ニ用フヘカラス

三　生石灰少量ノ水ヲ注ケハ熱ヲ發シテ崩壞スルモノ

生石灰末生石灰ニ少量ノ水ヲ加ヘ粉末ト爲シタルモノ

生石灰末ハ用ニ臨ミテ之ヲ製シ吐瀉物其ノ他ノ排泄物、溝渠、芥溜、床下等ノ消毒ニ用フヘシ

吐瀉物其ノ他ノ排泄物ヲ消毒スルニハ少クモ其ノ容量五十分一ヲ投シ能ク攪拌スヘシ溝渠、芥溜ニ對スル量ハ之ニ準シ床下ニ在テハ其ノ全面ニ撒布スヘシ

石灰乳(十倍)生石灰一分水九分

石灰乳ヲ製スルニハ一分ノ生石灰ニ九分ノ水ヲ徐々ニ加ヘ能ク攪拌スヘシ其ノ用量ハ生石灰末ノ五倍トス但石灰乳ハ用ニ臨ミテ之ヲ製シ使用ノ際ニハ每回攪拌スルヲ要ス

普通石灰ヲ生石灰末石灰乳ニ代用スル場合ニハ倍量ヲ用フヘシ

水灰ハ生石灰石灰等ヲ得ルコト能ハサル場合ニ於テ虎列刺病患者ノ吐瀉物赤痢病患者腸窒扶私病患者ノ排泄物ノ消毒ニ代用スルコトヲ得其ノ用量ハ吐瀉物排泄物ノ五分一トス灰汁トシテ使用スルニハ水灰一分ニ水四分ヲ加ヘ之ヲ煮沸シテ製スヘシ其ノ用量ハ吐瀉物排泄物ノ同容量トス但石炭灰藁灰ハ水灰ト同一ノ效ナシトス

四　格魯兒石灰水(二十倍)格魯兒石灰五分水九十五分

格魯兒石灰水ノ應用竝用量ハ石灰乳ニ同シ但用ニ臨ミテ製スヘシ

第十一條　消毒方法ノ應用ハ左ノ如シ

第一　患者

傳染病患者治癒シタルトキハ全身入浴ヲ行ヒ衣服ヲ更メシムヘシ場合ニ依リテハ溫濕布ヲ以テ拭淨シ入浴ニ代ユルモ妨ケナシ

第二　死體

傳染病ノ死體ヲ棺ニ斂ムルニハ其ノ被服ニ昇汞水若クハ石炭酸水ヲ充分ニ撒布シ又ハ昇汞水若クハ石炭酸水ニ浸漬シタル布ヲ以テ包ミ又ハ石灰若クハ木灰ヲ以テ塡ツヘシ

第三　看病人、病家ノ家人其ノ他病毒ニ觸接シタル者

看病人、病家ノ家人其ノ他消毒方法ノ施行又ハ患者、死體、排泄物ノ運搬等ノ爲病毒ニ觸接シタル者ハ時々若クハ其ノ都度手足及衣服ヲ消毒シ入浴スヘシ

第四　患者、死體等ノ運搬器

傳染病ノ患者、死體等ヲ運搬シタル駕籠釣臺ノ類ハ使用後毎回昇汞水若クハ石炭酸水ヲ以テ擦拭スヘシ

第五　便所、芥溜、溝渠等

傳染病患者ノ吐瀉物其ノ他排泄物ノ入リタル便所ノ糞池、肥料溜等ニハ生石灰末、石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ灌キ能ク攪拌スヘシ但便所ハ石炭酸水ヲ以テ消毒シタル後直ニ使用シ糞便ハ一週間ノ後肥料ニ供セシムルコトヲ得

病毒ニ汚染シタル土地ニハ石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ灌キ消毒スヘシ

病毒ノ混入シタル芥溜ニハ石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ灌キ其ノ塵芥ハ燒却スヘシ

病毒ノ混入シタル溝渠ニハ生石灰末、石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ灌クヘシ

第六　衣服器具敷物等

傳染病患者ノ著用セル衣類臥具竝其ノ病室ニ在ル諸器具又ハ看病人及患者ニ接シタル家人ノ衣類其ノ他病毒汚染ノ虞アルモノハ各物件ノ種類ニ從ヒ消毒方法ヲ施行スヘシ

第八條第一ニ掲ケタル物品ノ類ハ曹達石鹼(毛皮ニハ避クヘシ)ヲ以テ洗ヒ又ハ石炭酸水ヲ以テ拭淨シ若クハ之ヲ撒布スヘシ

第五條ニ掲クル各消毒方法ヲ施行スルコト能ハサルモノハ日光ニ曝シ若クハ大氣中ニテ乾燥セシムヘシ

第七　患者ノ居室

石炭酸水若クハ昇汞水ヲ以テ室内各部ヲ拭淨スヘシ消毒後ハ日光ノ射入空氣ノ流通ヲ良クシ乾燥セシムルヲ要ス

第八　汽車

傳染病患者若クハ死體アリタル汽車内ノ消毒ハ第七ニ準スヘシ傳染病患者ノ吐瀉物其ノ他排泄物ニ對シテハ消毒藥ヲ混シ適宜處置スヘシ

車室ニ附屬スル便所ハ石炭酸水ヲ以テ消毒スヘシ

第九　船舶

傳染病患者若クハ死體アリタル船室内ノ消毒ハ第七第八ニ準スヘシ其ノ他ノ場所ニ對シテハ消毒藥ノ撒布擦拭等適宜處置スヘシ

船底水ニハ其ノ容量二百分一ノ生石灰末ヲ加ヘ二十四時間ヲ經タル後汲出サシムヘシ

○司法省令第七號

新潟地方裁判所管内相川區裁判所管轄佐渡郡八幡村ヲ同區裁判所新町出張所ノ管轄ニ改メ登記管轄區域表中左ノ通改正ス

明治三十年五月六日

司法大臣清浦奎吾

新潟	相川	佐渡	佐渡郡ノ内	相川町	五十里町	川原田町	北海村	金泉村	二見村	澤根町村	
				野田村	二宮村	平泉村	金澤村	外海府村	高千村		
	新町	佐渡	佐渡郡ノ内	新町	國中村	畑野村	小倉村	栗野江村	金丸村	三宮村	
				真野村	戀ケ浦村	小布施村	千手村	川茂村	八幡村		

○拓殖務省令第六號

傳染病豫防法第六條ニ依ル清潔方法及消毒方法ハ本年五月内務省令第十三號ヲ適用スヘシ

明治三十年五月七日　拓殖務大臣子爵高島鞆之助

○陸軍省令第十二號

明治三十年勅令第百四十三號臺灣竝在外陸軍雇員傭人死傷手當金給與細則左ノ通定ム

明治三十年五月八日　陸軍大臣子爵高島鞆之助

第一條　臺灣竝在外陸軍雇員傭人死傷手當金給與細則（本則トハ明治三十年勅令第百四十三號ヲ云フ以下倣之）ニ依リ手當金ヲ受ントスルモノハ左ノ書類ヲ具シ居住地若クハ本籍ノ道廳長官府縣知事ニ願出ヘシ

一　願書　死歿者ニ在テハ出願者ノ外親戚若クハ居住地戸主二名連署シ市町村長ノ證明シタルモノ

二　身分證明書　職務竝給料ニ就テ所屬長ヨリ下付スルモノ

三　死亡證書若クハ診斷證書　主任醫官ヨリ下付セルモノ

但シ此證書ニハ其傷痍疾病公務ニ基因セルコトヲ明記シ尚診斷證書ニハ陸軍軍人傷痍疾病恩給等差例ヲ適用シ其輕重ヲ明記スヘシ

四　戸籍調書　市町村長若クハ之ニ準スルモノ、證明セシモノ（死歿者ニ限ル）

第二條　道廳長官府縣知事前條ノ書類ヲ受ケタルトキハ之ヲ審査シ陸軍大臣ニ進達スヘシ

第三條　本則第二條ノ遺族トハ死歿者同戸籍ニ在ル寡婦孤兒父母祖父母兄弟姉妹トス

但シ死亡手當金ハ寡婦ニ給シ寡婦ナキトキハ孤兒ニ以下本文ノ順序ニ據ル

第四條　本則ニ依リ手當金ヲ受クヘキモノヽ出願期限ハ其事故ノ生シタル日ヨリ三箇年以内トス

○陸軍省令第十三號

明治二十七八年ノ戰役ニ從事シ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ又ハ之ニ原因シ死歿シタルモノニシテ明治二十七年勅令第百六十四號ニ依リ手當金ノ支給ヲ受ケントスルモノヽ出願期限ハ本令發布ノ日ヨリ三箇年トス

明治三十年五月八日　陸軍大臣子爵高島鞆之助

○海軍省令第五號

明治三十年勅令第百四十三號臺灣竝在外海軍雇員傭人死傷手當金給與細則左ノ通定ム

明治三十年五月八日　海軍大臣侯爵西鄕從道

第一條　明治三十年勅令第百四十三號ニ依リ手當金ヲ受ントスルモノハ左ノ書類ヲ具シ居住地若クハ本籍ノ道廳長官府縣知事ニ願出ヘシ

一　願書　死歿者ニ在テハ出願者ノ外親戚若クハ居住地戸主二名連署シ市町村長ノ證明シタルモノ

二　身分證明書　職務竝給料ニ就テ所屬長ヨリ下付セルモノ

三　死亡證書若クハ診斷證書　主任醫官ヨリ下付セルモノ

但シ此證書ニハ其傷痍疾病公務ニ基因セルコトヲ明記スヘシ

四　戸籍調書　市町村長若クハ之ニ準スルモノ、證明セシモノ

第二條　道廳長官府縣知事前條ノ書類ヲ受ケタルトキハ之ヲ審査シ海軍大臣ニ進達スヘシ

第三條　扶助料又ハ弔祭料ヲ受クヘキ遺族ハ死者ト同戸籍ニ在ル寡婦孤兒父母祖父母兄弟姉妹トス

扶助料又ハ弔祭料ハ寡婦ニ給シ寡婦ナキトキハ孤兒ニ給ス以下前項ノ順序ニ依ル

第四條　勅令第百四十三號ニ依リ手當金ヲ受クヘキモノヽ出願期限ハ其事故ノ生シタル日ヨリ三箇年以内トス

○海軍省令第六號

明治二十七八年ノ戰役ニ從事シ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ又ハ之ニ原因シ死歿シタルモノニシテ明治二十七年勅令第百六十四號ニ依リ手當金ノ支給ヲ受ケントスルモノヽ出願期限ハ本令發布ノ日ヨリ三箇年トス

明治三十年五月八日

海軍大臣侯爵西鄕從道

〔參照〕陸軍省令第十三號　海軍省令第六號

明治二十七年九月八日官報　勅令第百六十四號ハ戰時若クハ事變ニ際シ陸海軍雇員、軍艦乘組傭人、官用船舶ノ船員若クハ鐵道從事員其他陸海軍傭人等ニシテ傷痍ヲ受ケ疾病ニ罹リ又ハ死歿シタルトキ手當金給與ノ件ナリ

○農商務省令第四號

種牡馬檢査法施行細則左ノ通相定ム

明治三十年五月十日

農商務大臣伯爵大隈重信

種牡馬檢査法施行細則

第一條　種牡馬ノ檢査ヲ受ケントスル者ハ地方長官ニ願出ベシ

第二條　種牡馬ノ檢査ハ地方長官豫メ其期日ヲ告示シ二名以上ノ檢査委員之ヲ行フ

檢査委員ハ府縣官吏、獸醫又ハ產馬業ニ經驗アル者ノ中ヨリ地方長官之ヲ命ス

第三條　種牡馬ノ資格標準ヲ定ムルコト左ノ如シ

一　年齡滿四歲以上

二　體尺四尺五寸以上

三　强壯ニシテ骨格及性質善良ナルモノ

四　惡癖又ハ遺傳病ナキモノ

地方ノ狀況ニ依リ第一號第三號ノ制限ヲ適用シ難キトキ若クハ前數號ノ外尙ホ必要ト認ムル事項アルトキハ地方長官ハ農商務大臣ノ認可ヲ經テ適宜之ヲ施行スルコトヲ得

第四條　地方長官ハ前條ノ資格標準ニ合格シタル種牡馬ニハ種牡馬檢査法第二條ニ依リ共牡馬ノ左臀、鼠下若クハ蹄壁ニ烙印シ其所有者ニ證明書ヲ下付スヘシ

第五條　地方長官ハ證明書ヲ得タル種牡馬ト雖疾病其他ノ事故ニ依リ種牡馬ニ不適當ナリト認メタルトキハ種牡馬檢査法第三條ニ依リ其證明ノ效力ヲ停止シ若クハ之ヲ取消スヘシ

第六條　證明書其效力ヲ失ヒ若クハ取消サレタルトキハ該證明書ノ所有者ハ三十日以內ニ之ヲ地方長官ニ返納スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ地方長官ハ第四條ノ證印ヲ烙消スヘシ

第七條　種牡馬ノ種付ヲ爲ストキハ其所有者又ハ管理人ハ證明書ヲ携帶スヘシ

證明書ハ當該官吏又ハ牝馬所有者若クハ管理人ヨリ其閱覽ヲ請求スルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第八條　證明書ヲ毀損亡失シ若クハ證明書記載ノ事項ニ異動ヲ生シタルトキハ其書換若クハ再渡ヲ地方長官ニ願出ヘシ

第九條　種牡馬ノ所有者又ハ管理人ハ帳簿ヲ調製シ種付牝馬ノ種類、年齡、毛色、體尺、特徵、種付年月日及其所有者又ハ管理人ノ住所氏名ヲ記載スヘシ

第十條　牝馬所有者又ハ管理人ニ於テ產駒ノ血統證ヲ請求スルトキハ種牡馬所有者又ハ管理人ハ之カ交付ヲ拒ムコトヲ得ス

第十一條　種牡馬檢査委員其檢査ヲ結了シタルトキハ速ニ其成績ヲ地方長官ニ報告スヘシ

地方長官ハ前項ノ報告ニ依リ證明書ヲ下付シタルトキハ種牡馬表ヲ調製シ其種類、年齡、體尺、毛色及所有者ノ住所氏名ヲ管內ニ告示スヘシ

第十二條　地方長官ハ毎年一回以上主任官吏ヲシテ種牡馬ノ狀況、產駒ノ成績及第九條ノ帳簿ヲ檢査セシムヘシ

前項ノ場合ニ於テハ種牡馬所有者又ハ管理人ハ其檢査ヲ拒ムコトヲ得ス

第十三條　地方長官ハ第十一條第二項ノ種牡馬表ヲ告示シタルトキ及第十二條第一項ノ檢査ヲ行ヒタルトキハ其都度種牡馬表及檢査ノ狀況ヲ農商務大臣ニ報告スヘシ

第十四條　農商務大臣ハ臨時主任官吏ヲ派遣シ種牡馬檢査ノ執行ヲ監督セシメ若クハ種牡馬ノ狀況ヲ監察セシムルコトアルヘシ

第十五條　第六條第一項第七條第八條第九條第十條及第十二條第二項ニ違背シタル者ハ一圓五十錢以下ノ科料ニ處ス

○農商務省令第五號

明治十八年十一月　農商務省第四十一號達蠶絲業組合準則ハ來ル三十一年三月三十一日限リ廢止ス

明治三十年五月十日

北海道廳　府縣

農商務大臣伯爵大隈重信

北海道廳　府縣

○農商務省令第六號

明治十七年十一月　農商務省第三十七號達同業組合準則中第四條ヲ削除ス

明治三十年五月十日

農商務大臣伯爵大隈重信

〔參照〕

農商務省第三十七號達同業組合準則（明治十七年十一月二十九日）抄錄

第四條　組合ノ設アル地區內ニ於テ組合員ト同業ヲ營ム者ハ其組合ニ加盟スヘシ

但事業ノ規模及趣向ヲ異ニスルカ爲メ加盟シ難キカ或ハ加盟ヲ拒ムヘキ事情アルトキハ管轄廳ニ申出テ其認定ヲ請フ可シ

○遞信省令第六號

船舶檢査法施行細則左ノ通定ム

明治三十年五月十五日

遞信大臣子爵野村　靖

船舶檢査法施行細則

第一章　總則

第一條　本則ニ於テ檢査官廳ト稱スルハ登簿噸數十五噸以上若ハ積石數百五十石以上ノ船舶ニ關シテハ其ノ所在地ヲ管轄スル船舶司檢所、登簿噸數十五噸未滿ノ汽船ニ關シテハ其ノ仕出地ノ地方官廳ヲ謂フ

第二條　本則ニ於テ船舶所有者ニ關スル規程ハ特ニ明文ヲ掲クル場合ノ外船舶檢査法第十七條ニ依リ檢査ヲ受クヘキ船舶ノ借用者ニモ之ヲ適用ス

第二章　檢査

第三條　船舶檢査法ニ依リ船舶ノ檢査ヲ受ケントスルトキハ日本船舶ニ在テハ其ノ所有者若ハ船長ヨリ第一號書式ノ申請書、外國船舶ニ在テハ其ノ借用者ヨリ第二號書式ノ申請書ヲ檢査官廳ニ差出スヘシ

第四條　船舶司檢所ノ檢査ヲ受クヘキ船舶ノ檢査執行地ハ遞信大臣之ヲ定メ地方官廳ノ檢査ヲ受クヘキ船舶ノ檢査執行地ハ地方長官之ヲ定ム

第五條　第四條ニ依リ定ムル場所ノ外ニ於テ船舶ノ檢査ヲ受ケントスル者ハ事由ヲ具シテ檢査官廳ニ申請スルコトヲ得

檢査官廳ニ於テ前項ノ申請ヲ相當ノ理由アリト認ムルトキハ檢査官吏ヲ派シ檢査ヲ執行セシムヘシ

第六條　檢査申請者ハ船舶檢査規程ニ從ヒ船體機關及屬具ノ檢査ニ必要ナル準備ヲ爲スヘシ

第七條　檢査官吏船舶ニ臨檢シタルトキハ檢査申請者ハ登簿船免狀、船鑑札、船舶檢査證書、船舶檢査手帖、船舶職員ノ海技免狀、海員雇入證書、備品明細簿及日誌等檢査ニ必要ナル書類ヲ其ノ檢閲

ニ供スヘシ

第三章　船舶檢査證書

第八條　檢査官吏船舶ヲ檢査シ船舶檢査規程ニ適合スルモノト認ムルトキハ檢査官廳ヨリ第三號書式ノ船舶檢査證書ヲ檢査申請者ニ交付スヘシ

第九條　檢査申請者船舶檢査法第七條ニ依リ假證書ノ交付ヲ申請シ檢査官吏ニ於テ其ノ船舶ヲ船舶檢査規程ニ適合スルモノト認ムルトキハ第四號書式ノ假證書ヲ交付スヘシ

假證書ノ有效期間ハ船舶檢査證書ト交換シ得ヘキ期間ヲ標準トシ三箇月ノ範圍内ニ於テ檢査官吏之ヲ定ム

船舶檢査證書ヲ受有シタルトキハ當該檢査官廳ニ假證書ヲ返納スヘシ

第十條　船舶檢査證書若ハ假證書ハ船内最モ見易キ場所ニ掲示スヘシ

第十一條　船舶檢査證書若ハ假證書ヲ亡失若ハ毀損シタルトキ又ハ之ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ船舶所有者若ハ船長ヨリ事由ヲ具シ證據書類ヲ添ヘテ檢査官廳ニ其ノ再授若ハ書換ヲ申請スヘシ

船舶檢査證書若ハ假證書ヲ受有スル船舶ノ所有權ヲ移轉シタルトキハ新舊所有者ノ連署ヲ以テ又ハ新所有者ヨリ登簿船免狀若ハ登記ノ謄本ヲ添ヘ檢査官廳ニ該證書ノ書換ヲ申請スヘシ

前二項ニ依リ船舶檢査證書若ハ假證書ノ書換ヲ申請シ新證書ヲ受有シタルトキハ舊證書ヲ返納スヘシ

第十二條　船舶檢査證書若ハ假證書ハ左ニ掲クル場合ニ於テ其ノ受有者ヨリ檢査官廳ニ返納スヘシ

第一　船舶ノ航行期間又ハ假證書ノ有效期間滿了ノトキ

第二　船舶航行ノ用ヲ爲サヽルニ至リタルトキ

第三　日本船舶タル資格ヲ失ヒタルトキ

第四　外國船舶ノ使用ヲ解止シタルトキ

第五　第二十七條ノ申請ニ依リ檢査ヲ執行シ新證書ヲ交付シタルトキ

第十三條　左ノ場合ニ於テハ船舶檢査證書若ハ假證書ヲ受有セス又ハ船舶檢査證書若ハ假證書ニ記載スル船舶ノ航路定限若ハ航行期間ヲ超エテ船舶ヲ航行ノ用ニ供スルコトヲ得

第一　船舶檢査執行地外ニ於テ新造、修繕、購入若ハ國ヒタル船舶ニシテ檢査ヲ受クル爲メ旅客貨物ヲ搭載セス檢査執行地マテ航行スルトキ但シ外國ニ於テ新造、修繕若ハ購入シタル船舶ニシテ帝國領事ニ於テ相當ト認ムル適航證書ヲ有スルトキハ旅客貨物ヲ搭載スルコトヲ得

第二　航路定限内ノ地ニ船舶檢査執行地無キ場合ニ於テ檢査ヲ受クル爲メ旅客貨物ヲ搭載セスシテ檢査執行地マテ航行スルトキ

第三　航路定限外ノ地ニ於テ檢査ヲ受ケタル船舶ニシテ檢査官廳ノ認可ヲ受ケ其ノ航路定限内ノ地マテ航行スルトキ

第四　外國ヨリ歸航スル船舶ニシテ外國ニ於ケル最終ノ寄港地ヲ發シタル後航行期間滿了スル場合ニ於テ檢査官廳所在ノ最初ノ寄港地ニ於テ其ノ認可ヲ受ケ到達地マテ航行スルトキ

第五　船體機關其ノ他要部修繕ノ爲メ檢査官廳ノ認可ヲ受ケ工場所在地マテ航行スルトキ

第六　沿海航船若ハ平水航船ニシテ航路定限變更ノ爲メ檢査官廳ノ認可ヲ受ケ航路區域外ヲ航行スルトキ

第十四條　第十三條第三號乃至第六號ニ依リ船舶ヲ航行ノ用ニ供セントスルトキハ船舶所有者ヨ

リ事由ヲ具シテ檢査官廳ニ其ノ認可ヲ申請スヘシ

檢査官廳ニ於テ前項ノ申請書ヲ受理シ回航ニ差支ナシト認ムルトキハ第五號書式ノ回航認可證書ヲ交付スヘシ但シ旅客貨物ノ搭載ヲ禁スルヲ必要ト認ムルトキハ其ノ旨ヲ該證書ニ記入スヘシ

回航認可證書ノ有效期間ハ回航ニ要スル期間ヲ標準トシテ檢査官廳之ヲ定ム

回航認可證書ニハ第十一條及第十二條ヲ準用ス

第四章　航路定限

第十五條　船舶ノ航路ハ左ノ四種トス

第一　遠洋航路

內外國ノ各地ニ通スルモノ

第二　近海航路

東經百十三度ヨリ同百五十七度及北緯二十一度ヨリ同五十二度ニ至ル線內

第三　沿海航路

一　上總國八幡崎ヨリ安房國野島崎、伊豆國大島及神子元島ヲ經テ遠江國御前崎ニ至ル線內

二　三河國伊良胡崎ヨリ志摩國大王崎ニ至ル線內及大王崎ヨリ紀伊國大島汐岬ヲ經テ日ノ岬ニ至ル線內但シ第三區內ニ連通スルコトヲ得

三　紀伊國日ノ岬ヨリ阿波國伊島ニ至ル線內、伊豫國佐田崎ヨリ豐後國地藏崎ニ至ル線內及筑前國蘆屋ヨリ岩屋崎ヲ經テ長門國觀音崎ニ至ル線內但シ第二區若ハ第四區ノ一區內ニ連通スルコトヲ得

四　豐後國地藏崎ヨリ伊豫國佐田崎ニ至ル線內及土佐國伊佐岬ヨリ日向國細島ニ至ル線內

但シ第三區內ニ連通スルコトヲ得

五　土佐國室戸崎ヨリ伊佐岬ニ至ル線內

六　日向國都井崎ヨリ大隅國種子島、屋久島、口永良部島、黑島ヲ經テ薩摩國野間岬ニ至ル線內

七　薩摩國黑瀨戸ヨリ肥前國五島ヲ經テ平戸海峽ニ至ル線內

八　出雲國日ノ岬ヨリ隱岐列島ヲ經テ伯耆國加露ニ至ル線內

九　但馬國餘部崎ヨリ越前國安島崎ニ至ル線內

十　能登國祿剛崎ヨリ佐渡國飛島ヲ經テ羽後國酒田ニ至ル線內

十一　陸前國花淵崎ヨリ金花山ヲ經テ陸中國久慈ニ至ル線內

十二　陸奥國尻矢崎ヨリ渡島國惠山岬ヲ經テ膽振國室蘭ニ至ル線內及陸奥國權現崎ヨリ小島ヲ經テ渡島國江差ニ至ル線內

十三　後志國辨慶岬ヨリ神威崎天鹽國增毛ニ至ル線內

十四　釧路國釧路ヨリ根室國納沙布岬及野付ヲ經テ知床崎ニ至ル線內及其ノ線內ノ沿岸ヨリ千島國國後島、色丹島間

十五　琉球本島ヨリ沖繩諸群島間

第四　平水航路

一　湖川港內

二　相模國觀音崎ヨリ上總國富津ニ至ル線內

三　駿河國三保崎ヨリ伊豆國戸田港ニ至ル線內

四　三河國伊良胡崎ヨリ志摩國菅島ニ至ル線內

五　紀伊國宮崎ヨリ加太港ニ至ル線內

六　紀伊國苫ケ島海峽及播磨國明石海峽以内ノ沿岸
七　播磨國室津ヨリ小豆島大角崎ヲ經テ讃岐國小田鼻ニ至ル線内及讃岐國三崎ヨリ備後國鞆ニ至ル線内
八　備後國鞆ヨリ伊豫國今治ニ至ル線内及伊豫國三津濱ヨリ周防國屋代島ヲ經テ上ノ關ニ至ル線内
九　豐後國地藏崎ヨリ美濃崎ニ至ル線内
十　豐前國今津ヨリ長門國本山鼻ニ至ル線内及筑前國若松ヨリ長門國六連島ヲ經テ村崎鼻ニ至ル線内
十一　筑前國西浦崎ヨリ志賀島大崎ニ至ル線内
十二　筑前國瓊家崎ヨリ肥前國神集島ヲ經テ呼子港ニ至ル線内
十三　肥前國津崎ヨリ鷹島ヲ經テ値賀崎ニ至ル線内
十四　肥前國向後崎ヨリ番所崎ニ至ル線内
十五　肥前國野母崎ヨリ三重崎ニ至ル線内
十六　肥前國口ノ津ヨリ肥後國天草島大島崎ニ至ル線内
十七　肥後國天草島井深港及黑瀨戸以内
十八　薩摩國山川港ヨリ大隅國小根占川ニ至ル線内
十九　出雲國地藏崎ヨリ伯耆國日野川ニ至ル線内
二十　丹後國鷲崎ヨリ博奕崎ニ至ル線内
二十一　越前國立石崎ヨリヲカ崎ニ至ル線内
二十二　能登國觀音崎ヨリ沖波鼻ニ至ル線内
二十三　陸奥國平館ヨリ九艘泊ニ至ル線内
二十四　陸前國花淵崎ヨリ宮戸島萱ノ崎ニ至ル線内
二十五　渡島國函館山尾花岬ヨリ葛登支岬ニ至ル線内
二十六　後志國辨慶岬ヨリ磯谷ニ至ル線内
二十七　後志國日和山ヨリ神溪岬ニ至ル線内
二十八　釧路國尻羽崎ヨリ大黑島ヲ經テルムセシマ岬ニ至ル線内

第十六條　各船舶ノ航路定限ハ其ノ大小、現狀及季節ニ應シ船舶檢査法第二條ニ依リ前條ニ定ムル區域以内ニ於テ檢査官吏之ヲ定ム但シ遠洋航船若ハ近海航船ノ航路ヲ制限セントスルトキハ逓信大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十七條　沿海航船若ハ平水航船ヲ第十五條第三號若ハ第四號ニ掲クル航路區域ノ内外ニ跨リテ航路ヲ限リ若ハ其ノ區域外ニ於テ新ニ航路ヲ限リ航行セシメントスルトキハ船舶所有者ヨリ事由ヲ具シ檢査官廳ニ於テ前項ノ申請書ヲ受理シタルトキハ檢査官吏ヲシテ船舶ノ大小、現狀及航路ノ狀況ヲ査覈セシメ意見書ヲ添附シテ申請書ヲ逓信大臣ニ進達スヘシ

第十八條　第十七條ノ場合ノ外船舶ノ航行期間内ニ於テ其ノ航路定限ヲ變更セントスルトキハ船舶所有者ヨリ事由ヲ具シテ其ノ認可ヲ檢査官廳ニ申請スヘシ

檢査官廳ニ於テ前項ノ申請書ヲ受理シタルトキハ檢査官吏ヲシテ船舶ノ大小、現狀及航路ノ狀況ヲ査覈セシメ適當ト認ムル場合ニハ申請ヲ認可スヘシ

第五章　旅客定員

第十九條　船舶ノ旅客定員ハ其ノ航路定限、旅客室ノ等級及積量ニ應シ左ノ割合ニ依リ檢査官吏之ヲ定ム

第一　遠洋航船

上等室
中等室
下等室　一人ニ付　（面積十二平方尺 容積七十二立方尺）以上

第二　近海航船

上等室　遠洋航船ノ上等室ニ同シ

中等室　一人ニ付　（面積十二平方尺 容積六十立方尺）以上

下等室　一人ニ付　（面積九平方尺 容積五十立方尺）以上

但シ航路ヲ定限シ其ノ航路ノ最遠里程ヲ航行シ得ヘキ時間二十四時間以内ナルトキハ沿海航船ノ割合ニ據ルコトヲ得

第三　沿海航船

上等室　一人ニ付　（面積十二平方尺 容積六十立方尺）以上

中等室　一人ニ付　（面積八平方尺 容積五十立方尺）以上

下等室　一人ニ付　（面積六平方尺 容積四十立方尺）以上

但シ航路定限ノ最遠里程ヲ航行シ得ヘキ時間六時間以内ナルトキハ平水航船ノ割合ニ據ルコトヲ得

第四　平水航船

上等室　一人ニ付　面積九平方尺以上

中等室　一人ニ付　面積六平方尺以上

下等室　一人ニ付　面積四、五平方尺以上

但シ航路定限ノ最遠里程ヲ航行シ得ヘキ時間一時間以内ナルトキ又ハ其ノ航路定限ノ最遠里程五海里以内ナルトキハ其ノ航路ノ狀況ニ據リ下等室一人ニ付面積三平方尺マテニ遞減スルコトヲ得

第二十條　特別ノ契約ヲ以テ移住民若ハ人夫等多人數ヲ搭載セントスルトキハ船舶所有者若ハ船長ヨリ當事者雙方ノ連署ヲ以テ第六號書式ノ申請書ニ船舶檢査證書ノ寫ヲ添ヘ船舶司檢所檢査執行地ニ於テハ其ノ船舶司檢所其ノ他ノ地方ニ於テハ本船所在地ノ地方官廳ニ差出スヘシ

前項ノ官廳ニ於テ申請書ヲ受理シタルトキハ檢査官吏ヲシテ旅客ヲ搭載スヘキ場所及準備ノ適否ヲ査覈セシメ船舶檢査規程ニ依リ適當ト認ムル場合ニハ左ノ割合ニ依リ別種旅客室ノ旅客定員ヲ定ムヘシ

第一　近海航路區域外航行

一人ニ付　（面積九平方尺 容積五十立方尺）以上

第二　近海航路區域內航行

航行時間二十四時間以上

一人ニ付　（面積七平方尺 容積四十立方尺）以上

航行時間二十四時間未滿

一人ニ付　（面積五平方尺 容積二十五立方尺）以上

第二十一條　第二十條ノ官廳ニ於テ申請ヲ認可シタルトキハ第七號書式ノ別種旅客室檢査證書ヲ交付スヘシ

別種旅客室檢査證書ノ有效期間ハ航行ニ要スル期間ヲ標準トシ檢査官廳之ヲ定ム

別種旅客室檢査證書ニハ第十一條及第十二條ヲ準用ス

第二十二條　別種旅客室檢査證書ハ別種旅客室ニ掲示スヘシ

第二十三條　旅客室ニ貨物ヲ搭載シタルトキハ其ノ積量ニ對スル旅客員數ヲ減スヘシ

第二十四條　旅客室ト乘組員常用室、通常旅客室ト別種旅客室トハ各之ヲ區別スヘシ

第六章　汽壓制限

第二十五條　船舶ノ汽壓制限ハ機關ノ現狀ニ應シ船舶檢査規程ニ依リ檢査官吏之ヲ定ム

第七章　航行期間

第二十六條　船舶ノ航行期間ハ船舶ノ現狀ニ應シ船舶檢査法第四條ニ依リ檢査官吏之ヲ定ム

第二十七條　船舶所有者若ハ船長ハ船舶ノ航行期間內ニ於テ檢査ヲ申請スルコトヲ得

第二十八條　船舶ノ航行期間內ニ於テ船舶ヲ入渠若ハ上架セントスルトキハ第八號書式ニ依リ船舶所有者若ハ船長ヨリ檢査官廳ニ屆出ツヘシ但シ外國ニ於テ入渠若ハ上架シタル場合ハ此ノ限ニアラス

第二十九條　船舶ノ航行期間內ニ於テ船體機關其ノ他要部ニ損傷ヲ生シタルトキ又ハ之ヲ修繕變更セントスルトキハ船舶所有者若ハ船長ヨリ事由ヲ具シ修繕變更ヲ加フル場合ニハ其ノ仕樣書ヲ添附シテ檢査官廳ニ屆出ツヘシ

第八章　臨視

第三十條　檢査官廳ニ於テ第二十八條若ハ第二十九條ノ屆書ヲ受理シ必要ト認ムルトキ又ハ船舶ニ異狀アリト認ムルトキハ檢査官吏ヲシテ船舶ヲ臨視セシメ又ハ船舶檢査證書若ハ假證書ノ返納ヲ命スヘシ

第三十一條　檢査官吏船舶ニ臨視シタルトキハ船舶所有者若ハ船長ニ於テ其ノ指揮ニ從フヘシ

第三十二條　檢査官吏第三十條ニ依リ船舶ニ臨視シ檢査ヲ執行スル必要アリト認ムルトキハ船舶ノ航行ヲ停止シ又ハ其ノ船舶檢査證書若ハ假證書ノ返納ヲ命スヘシ

第九章　再檢査

第三十三條　船舶檢査法第九條ニ依リ船舶ノ再檢査ヲ申請セントスル者ハ事由ヲ具シ檢査ヲ執行シタル檢査官廳ヲ經由シテ申請書ヲ遞信大臣ニ差出スヘシ

第三十四條　遞信大臣ニ於テ第三十三條ノ申請書ヲ受理シ再檢査ヲ執行スルノ必要アリト認ムルトキハ特ニ檢査官吏ヲ命シ檢査ヲ執行セシムヘシ

第三十五條　遞信大臣ニ於テ再檢査ノ申請ヲ理由ナシト認ムルトキ若ハ申請者ニ於テ遞信大臣ノ認可ヲ受ケスシテ再檢査ノ執行前船舶ノ原狀ヲ變更シタルトキハ申請書ヲ却下スヘシ

第十章　旅費及手數料

第三十六條　第五條及第三十三條ニ依リ檢査官吏ノ出張ヲ要スルトキハ檢査申請者ハ成規ノ旅費日當ヲ納ムヘシ

第三十七條　第八條、第十一條、第十四條若ハ第二十一條ニ依リ船舶檢査證書、回航認可證書若ハ別種旅客室檢査證書ヲ交付シタルトキハ檢査申請者ハ手數料壹圓ヲ納ムヘシ

第十一章　罰則

第三十八條　第六條、第七條、第十條、第十一條、第十二條、第十四條第四項、第二十二條、第二十三條、第二十四條、第二十八條、第二十九條若ハ第三十一條ニ違背シタル者ハ貳圓以上貳拾五圓以下ノ罰金ニ處ス第三十條若ハ第三十二條ニ依リ船舶檢査證書若ハ假證書ノ返納ヲ命セラレタル者之ニ違背シタルトキ亦同シ

前項ノ罰則ハ商事會社ニ在テハ其ノ所爲ヲ爲シタル業務擔當ノ任アル社員取締役若ハ使用人ニ之ヲ適用ス

附則

第三十九條　本則ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

第四十條　明治十八年農商務省告示第十四號、明治十九年遞信省令第一號及明治二十六年遞信

省令第十八號西洋形船舶檢査細則ハ本則施行ノ日ヨリ廢止ス

第四十一條　明治二十六年遞信省令第十八號西洋形船舶檢査手續ニ依リ交付シタル別種旅客室檢査證書及明治二十九年遞信省訓令第二號西洋形船舶檢査手續ニ依リ交付シタル航行認可書ハ本則第二十一條及第十四條ニ依リ交付シタルモノト見做ス

第一號書式

汽(帆)船　丸第　回(本則)(定期)(臨時)檢査申請書

一所有者ノ住所及氏名
一定繫場
一仕出地(登簿噸數十五噸未滿ノ汽船ニ在テハ)
一船質(鋼、鐵、木若ハ木鐵)
一登簿噸數(積石數)
一前回ノ航路定限
一前回ノ汽壓制限
一前回ノ航行期間
一前回檢査ノ場所
一前回入渠(上架)ノ年月
一前回汽鑵水壓試驗ノ年月
一船長ノ氏名及其ノ海技免狀ノ種類

右汽(帆)船　航路ニ使用仕度目下　ニ碇泊(入渠若ハ上架)中ニ有之檢査準備整居候ニ付來　月　日御臨檢相成度此段申請候也

明治　年　月　日　所有者(船長)　氏名印

檢査官廳宛　宿所

第二號書式

汽(帆)船　第　回定期(臨時)檢査申請書

一所有者ノ國籍及氏名
一借入者ノ住所及氏名
一定繫場
一船質(鋼、鐵、木若ハ木鐵)
一總噸數
一登簿噸數
一汽機ノ種類
一汽鑵ノ種類
一製造年月及機所
一借入ノ期間
一前回ノ航路定限
一前回ノ汽壓制限
一前回ノ航行期間
一前回檢査ノ場所
一前回入渠(上架)ノ年月
一前回汽鑵水壓試驗ノ年月
一船長ノ氏名及其ノ海技免狀ノ種類

右汽(帆)船　航路ニ使用仕度目下　ニ碇泊(入渠若ハ上架)中ニ有之檢査準備整居候ニ付來　月　日御臨檢相成度此段申請候也

明治　年　月　日　借入者

檢査官廳宛

第三號書式(竪九寸横一尺三寸)

檢査官廳宛

第　號

氏名印　宿所

船舶檢査證	
割印	
船名	定繫場
船ノ種類	發條ハ發條石數
航路定限	所有者
航行期間	汽機種類
	汽鑵種類
旅客定員 上等室	汽壓制限
旅客定員 中等室	端艇
旅客定員 下等室	船長
旅客定員 甲室	
旅客定員 乙室	

右檢査ヲ遂ケ船舶檢査法ニ依リ此ノ證書ヲ交付ス

明治　年　月　日

檢査官廳名印

第四號書式(竪九寸横一尺三寸)

假船舶檢査證書

船名	定繫場
船ノ種類	發條ハ發條石數
航路定限	所有者
端艇	汽機種類
旅客定員 上等室	汽鑵種類
旅客定員 中等室	汽壓制限
旅客定員 下等室	船長

右檢査ヲ遂ケ船舶檢査法ニ依リ此ノ證書ヲ交付ス

但シ此ノ證書ハ明治　年　月　日限リ無效トス

明治　年　月　日

檢査官吏官氏名印
(檢査官吏ニ依リ上ナルトキハ總名スルモノトス)

第五號書式

同航認可證書

所有者　住所　氏名

右所有汽(帆)船　丸船舶檢査法施行細則第十三條第三(四、五若ハ六)項ニ依リ(旅客貨物ノ搭載ヲ禁シタルトキハ其旨ヲ記入ス)　ヨリ　迄航行スルコトヲ認可シ此ノ證書ヲ交付ス

但シ此ノ證書ハ明治　年　月　日限リ無效トス

明治　年　月　日　　檢査官廳名　印

第六號書式

汽(帆)船　丸別種旅客室檢査申請書

一仕出地及仕向地竝寄港地(若シアラハ)
一航行里程
一平均速力
一航行豫定日限
一別種旅客ノ種類(移住民若ハ人夫等)
一別種旅客ノ人員
一別種旅客室ニ充ツヘキ場所

右汽(帆)船今般　ト契約ノ上別種旅客搭載航行仕度檢査準備整居候ニ付來　月　日　ニ於テ御臨檢相成度船舶檢査證書寫相添以連署此段申請候也

明治　年　月　日

所有者(船長)　氏名　印　宿所
契約相手方　氏名　印　宿所

船舶司檢所(地方官廳)宛

第七號書式(竪九寸横一尺一寸)

割印

別種旅客室檢査證書

船名	所有者	仕出地及仕向地竝寄港地(若シアラハ)

別種旅客		
種類	總員	譯内

右檢査ヲ遂ケ船舶檢査法施行細則ニ依リ此ノ證書ヲ交付ス

但シ此ノ證書ハ明治　年　月　日限リ無效トス

明治　年　月　日

船舶司檢所(地方官廳)名印

第八號書式

汽(帆)船　丸入渠(上架)屆

一船主ノ住所及氏名
一定繫場
一船質(鋼、鐵、木若ハ木鐵)
一登簿噸數(積石數)
一航路定限
一汽壓制限
一航行期間
一前回檢査ノ場所
一前回入渠(上架)ノ年月
一今回入渠(上架)ノ事由及場所
一入渠(上架)ノ豫定月日
一出渠(下架)ノ豫定月日

右及御屆候也

明治　年　月　日

所有者(船長)　氏名　印　宿所

檢査官廳宛

〔參照〕

明治十八年七月農商務省告示第十四號ハ汽船ノ檢査ハ東京府下ニ限リ農商務省ニ於テ直管スルノ件、同十九年三月九日遞信省令第一號ハ汽船ノ官有ニ屬スルモノハ其所屬官廳ニ於テ檢査シ其商業上ニ使用スルモノニ限リ遞信省ニ於テ檢査スルノ件ナリ

○文部省令第六號

明治二十七年勅令第七十五號高等學校令第四條ニ依リ第五高等學校工學部ノ學科及講座ノ數ヲ定ムルコト左ノ如シ

明治三十年五月十七日　　文部大臣侯爵蜂須賀茂韶

數學力學　二講座　圖畫測量　二講座
物理學　一講座　土木工學　三講座
化學地質鑛物製造冶金學　一講座　機械工學　二講座

前ニ掲ケタル學科目ノ外必修科トシテ國語及漢文外國語體操ヲ置ク

○內務省令第十四號

淀川改良工事用鐵製曳船及附屬品供給ノ競爭ニ加ハラントスル者ノ資格左ノ通リ定ム

明治三十年五月二十二日　　內務大臣伯爵樺山資紀

第一條　淀川改良工事用鐵製曳船及附屬品供給競爭者資格規定第二條ノ資格ヲ備フルコトヲ要ス

第二條　供給競爭者ハ明治二十二年勅令第六十號會計規則第六十九條第一項ノ外尙本令第二條第

第二條　資産ニ關スル資格

第一　各人ハ直接國税年額金參拾圓以上ヲ二年以來引續キ納ムルコト

第二　合名會社ニ在リテハ其社員ノ納税額ヲ併セ又合資會社ニ在リテハ其業務擔當社員ノ納税額ヲ併セ前項ノ例ニ依リ直接國税ヲ納ムルコト

第三　株式會社ニ在リテハ資本金拾五萬圓以上拂込濟ナルコト

第三條　營業ニ關スル資格

第一　總噸數五十噸以上ノ鐵製船體ヲ製造スルニ適當ナル船臺若クハ其敷地及諸器械ヲ備ヘ且ツ造船專門ノ技術者ヲシテ其業務ヲ擔當セシメ居ルカ又ハ其業務ヲ擔當セシムル契約アルコト

第二　前項船舶ニ据付クヘキ舶用汽機及汽罐ヲ製造スルニ適當ナル工場及諸器械ヲ備ヘ且ツ機械專門ノ技術者ヲシテ其業務ヲ擔當セシメ居ルカ又ハ其業務ヲ擔當セシムル契約アルコト

第四條　前條第一第二ノ資格ノ内其一ノミヲ備フル者他ノ一ヲ備フル者ト共ニ連帶責任ヲ以テ契約ヲ結ハントスルトキハ連名ニテ競爭ニ加ハルコトヲ得但資産ニ關シテハ各第二條ノ資格ヲ備フルヲ要ス

○陸軍省令第十四號

陸軍兵籍規則左ノ通改正ス

明治三十年五月二十二日

陸軍大臣子爵高島鞆之助

陸軍兵籍規則

第一條　陸軍兵籍ハ陸軍軍人及補充兵ノ身上ニ關スル必要ノ諸件ヲ登記スルモノトス

第二條　陸軍兵籍ハ分テ第一種及第二種トス

第一種兵籍ハ將校同相當官及准士官ニ第二種兵籍ハ士官候補生見習醫官見習藥劑官見習獸醫官見習軍吏下士兵卒（雜卒職工ヲ包含ス以下同シ）第一補充兵及諸生徒（陸地測量部修技所生徒ヲ除ク以下同シ）ニ用ユ

第三條　陸軍兵籍ノ正本ハ左ニ掲クル軍隊官衙學校（教導團ヲ包含ス以下同シ）ニ備置クモノトス

一　現役將官同相當官監督部衛生部獸醫部上長官士官軍吏部士官ハ陸軍省但休職停職ノ者ヲ除ク

二　參謀官ハ參謀本部

三　軍隊附將校（隊外ニ轉職スル歩騎砲工輜重兵科中少尉ヲ包含ス）及准士官ハ該隊本部

四　隊外現役將校（歩騎砲工輜重兵科中少尉ヲ除ク）及准士官ハ官衙又ハ學校

五　現役軍樂部士官及准士官ハ官衙又ハ學校

六　現役下士兵卒（歸休兵ヲ除ク）ハ中隊又ハ聯「大」隊（中隊又ハ聯「大」隊ヲ爲ササル隊ニ在テハ該隊）本部若クハ官衙學校

七　休職停職豫備役後備役ノ將官同相當官ハ師團司令部

八　休職停職豫備役後備役將校同相當官（將官同相當官ヲ除ク）准士官下士兵卒歸休兵及第一補充兵ハ聯隊

九　區司令部又ハ警備隊司令部

士官候補生見習醫官見習藥劑官見習獸醫官見習軍吏其ノ他諸生徒ハ聯隊（聯隊ヲ爲ササル隊ニ在テハ該隊）本部又ハ官衙學校

第四條　將校（將官ヲ除ク）及准士官ノ兵籍ハ陸軍省ニ將官同相當官參謀官隊外中少尉（憲兵科ヲ除ク）及監督部衛生部獸醫部軍吏部將校相當官ノ兵籍ハ官衙又ハ學校ニ其ノ副本ヲ備置クヘシ但豫備役後備役將校同相當官ノ兵籍ハ總テ陸軍省ニ其ノ副本ヲ備置クモノトス

豫備役後備役將校同相當官及下士ニシテ官衙學校又ハ憲兵隊ニ奉職スル者ニ在テハ前項ノ外更ニ副本ヲ其ノ官衙又ハ本部ニ備置クヘシ

第五條　第一種兵籍ハ新タニ將校同相當官及准士官ニ任セラレタルトキ軍隊官衙學校ニ於テ正副二本ヲ調製シ其ノ一本ハ順序ヲ經テ一週日以内ニ發送シ陸軍省ヘ差出スヘシ但任官同時ニ他ニ轉屬スルモノハ其ノ一本ヲ新所屬ニ送付スヘシ

第六條　第二種兵籍ハ入隊又ハ入校ノトキ該隊又ハ學校ニ於テ調製スヘシ但第一補充兵ノ兵籍ハ其ノ始メテ役ニ就クトキ聯隊區司令部又ハ警備隊司令部ニ於テ調製スヘシ

第七條　轉職轉役其ノ他所屬ヲ變換スルトキハ原所屬ヨリ直ニ其ノ兵籍ノ正本又ハ副本ヲ新所屬ヘ送致スヘシ但新ニ參謀官ニ補セラレ又ハ中少尉（憲兵科ヲ除ク）ニシテ隊外ニ轉シ若クハ第四條第二

項ニ該ル者アルトキハ原所屬ニ於テ副本ヲ調製シ之ヲ新所屬ニ送付スヘシ

第八條　第二補充兵ノ兵籍ハ補充兵名簿ヲ以テ之ニ充テ聯隊區司令部又ハ警備隊司令部ニ備置クヘシ

第九條　現役中傷痍疾病ニ由リ常備後備役免除兵役免除トナリ又ハ服役十二箇年四箇月ヲ過キ若クハ現役定限年齢ニ滿チ免官免役トナリタル者及死亡者ノ兵籍正本ハ聯隊區司令部又ハ警備隊司令部ニ送付スヘシ

附　則

第十條　本則發布前調製ノ兵籍ハ其ノ儘之ヲ應用シ漸次改正樣式ニ依リ調製スヘシ

（「」内ハ朱書）

料紙西ノ内紙　九　寸

兵籍	「何兵」	所管	「何師團（何部）」	本籍	「何府（縣）何郡（區）（市）町（村）番地」
		族籍	「華（士）族（平）民」	氏名	「某長（次）男（兄）（弟）（月主）」
					「爵　何・某」
賞典	「何年何月日（何々ノ役何々ニ付）叙勳何等金何百圓下賜」			誕生	「何年月日」
刑罰	「何年何月日何々ノ科ニ依リ謹慎何日」			死亡	「何年月日何地ニ於テ戦（病）死」
公傷公病	「何年何月日何地ニ於テ何ニ依リ何傷（病）ヲ受ク」			要	「何年月日合式婚姻（婚姻）」「何某長（次）女」某
陸軍出身前ノ履歴	「何年何月日何省出仕」「何年何月日何ニ依リ免出仕」			子	「嗣子長男（養子）」某「長女」某「次男」某
陸軍出身後ノ履歴	「何月日士官候補生トシテ何隊入隊」			父	「某」
				母	「某」
				祖父	「某」
				祖母	「某」
				兄弟（姉妹）	「兄（弟）」某「何年月日生」
				姉（妹）	「姉（妹）」某「何年月日生」

明治年「何月日士官學校入校」○何月日退校○何月日見習士官」

明治年「何月日何兵少尉○何月日正八位」

明治年「何月日何學校入校」

明治年「何月日一等給下賜○何月日何々ニ付何地ヘ派遣（巡廻）何月日歸著（何々アルモノニ限ル）」

明治年「何月日國學何月日出發何月日歸朝○何月日何聯隊附（何課附）」

明治年「何月日何々委員（陸軍省部何々ニ限ル）○何月日軍法會議判士長（判士）」

明治年「何月日免第何聯隊附（本職）第何聯隊附（何職）」

明治年「何月日後備役」

《第一種陸軍兵籍》

「一　賞罰ハ陸軍出身以來ニ係ハルモノヲ掲ク（下士ヨリ進級ノモノハ下士中ノ罰科モ記載スヘシ）下補候生及生徒中ノ罰科ハ記載セス」

「二　陸軍出身後ノ履歴ハ逐年順次ニ記載スヘシ若シ其ノ年間記スヘキ事項ナキトキト雖トモ空齋ヲ置カサルモノトス」
「三　任免補職等ノ月日ハ辭令ノ日ヲ記載スルモノトス」
「四　出戰務ハ朱書スヘシ但出戰軍ニ編入セラレタル者外國戰ニ當リテハ內國港灣發著ノ月日、內國戰ニ當リテハ戰地ニ臨ミタル月日及戰地ヲ去リタル月日、臨戰(合圍)地境內ニ於テ服役シタルトキハ其始終ノ月日又外國ノ鎭戍ニ編入セラレタル者ハ內國港灣並該國港灣發著ノ月日ヲ記載スヘシ」
「五　父母祖父母兄弟姉妹ハ同戶籍中ノ者ヲ記載スヘシ」
「六　妻ノ臨並合式婚姻トハ陸軍武官結婚條例ニ依リ結婚シタルモノヲ謂ヒ婚姻トハ軍籍ニ入ラサル前結婚シタルモノヲ謂フ」

料紙西ノ內紙　九寸

項目	記載
兵科	「何兵」
所管	「何師團何聯隊(何大隊)」
族籍	「華(士)族平民」
本籍	「何府(縣)何郡(區)(市)町(村)番地」
官等級	
入隊	「何兵(士官候補生)トシテ何年何月何日何隊(教導團)ヘ入隊」
適任證書	「何年何月何日士官(下士)適任證書ヲ賜フ」
特業	「電信術或ハ何々」
現役年期	「何箇年」「何年何月日ヨリ何年何月日ニ至ル」
再服役年期	「何箇年」「同」
豫備役年期	「何箇年何箇月」「同」
後備役年期	「何箇年」「同」
備考	
免役除役	「何年何月日何々ニ依リ免役(免官)(除役)」
公傷公病	「何年何月日何地ニ於テ何々ニ依リ何傷(病)ヲ受ク」
褒	「何年何月日褒賞休業何日間○何年何月日善行證書ヲ賜フ」
賞	
罰	「何年何月日何々ノ科ニ依リ輕營倉(禁足)何日間」

氏名	誕生	死亡	幹	顔	額	眼	鼻	口	顋	髮	眉	痘	徵別	妻	子	父	祖父	母	祖母
「某長(次)男(兄二(弟))(戶主)」「爵何　某」	「何年月日」	「何年何月日何地ニ於テ戰(病)死」												「何年何月日合式婚姻(婚姻)何某長(次)女　某」	「嗣子長男(養子)　某　何年何月日生」「長女　某　何年何月日生」「次男　某　何年何月日生」	「某」	「某」	「某」	「某」

一尺二寸九分

兄弟	「兄(弟)　某　何年何月日生」
姉妹	「姉(妹)　某　何年何月日生」

第二種陸軍兵籍

項目	記載
陸軍出身	「何年何月日何省御用掛」
前ノ履歴	

陸軍出身後ノ履歴

年	記載
明治何年	「何月日教導團卒業○同日陸軍何兵二等軍曹○同日步兵第何聯隊附○何月日何中隊附」「何月日一等卒(喇叭手)」
明治何年	「何月日何學校入校何月日退校○何月日一等給下賜○何月日曹長」
明治何年	「何月日長途行軍(野營演習)トシテ何地ヘ出發何月日歸著」
明治何年	「何月何日ヨリ何月何日迄何隊ニ於テ勤務演習」
明治何年	「何月日給養掛(何々書記)○何月日第何聯隊附免何司令部附」
明治何年	「何月日何々ニ付何地ヘ派出何月日歸著○何月日何々助數」

「一」賞罰ハ陸軍出身以來ニ係ハルモノヲ掲ク但生徒中ノ罰科ハ記載セス」
「二」陸軍出身後ノ履歴ハ逐年順次ニ記載スヘシ若シ某ノ年間記スヘキ事項ナキトキト雖トモ空盡ヲ置カサルモノトス」
「三」任免命課等ノ月日ハ雖令ノ日ヲ記載スルモノトス」
「四」出戰務ハ朱書スヘシ但出戰軍ニ編入セラレタル者外國戰ニ當リテハ內國港灣發著ノ月日、內國戰ニ當リテハ戰地ニ臨ミタル月日及戰地ヲ去リタル月日、臨戰(合圍)地境內ニ於テ服役シタルトキハ其始終ノ月日又外國ノ鎭戍ニ編入セラレタル者ハ內國港灣竝該國港灣發著ノ月日ヲ記載スヘシ」
「五」等級ハ現等ヲ記載ス但二等卒ハ記載スルニ及ハサルモノトス」
「六」父母祖父母兄弟姉妹ハ同月籍中ノ者ヲ記載スヘシ」
「七」妻ノ區劃合式婚姻トハ陸軍武官結婚條例ニ依リ結婚シタルモノヲ謂ヒ婚姻トハ軍籍ニ入ラサル前結婚シタルモノヲ謂フ」

○陸軍省令第十五號

陸軍戰時名簿規則左ノ通定ム

明治三十年五月二十二日　　陸軍大臣子爵高島鞆之助

第一條　陸軍戰時名簿規則

陸軍戰時名簿ハ陸軍軍人軍屬及兵役義務アル者動員以後身上ニ關スル必要ノ諸件ヲ登記スルモノトス

第二條　陸軍戰時名簿ハ分テ第一種及第二種トス

第一種戰時名簿(第一樣式)ハ將校同相當官准士官、第二種戰時名簿(第二樣式)ハ下士兵卒(雜卒職工)ヲ包含ス以下同シ補充兵國民兵軍屬ニ用ユ

第三條　戰時名簿ハ將校同相當官准士官下士兵卒ノ始メテ任官サレタルトキ又ハ入隊シタルトキ軍隊官衙學校(教導團ヲ包含ス以下同シ)ニ於テ調製スヘシ

第一補充兵ノ戰時名簿ハ始メテ其ノ役ニ就クトキ聯隊區司令部(警備隊區ニ在テハ警備隊司令部以下同シ)ニ於テ調製スヘシ但人相ハ本人ノ始メテ召集ニ應シタルトキ聯隊區司令部ヨリ名簿ヲ召集部隊ニ送付シ該部隊ニ於テ之ヲ記入スルモノトス

第一國民兵ノ戰時名簿ハ編入前調製ノモノヲ以テ之ニ充テ第二補充兵及第二國民兵ノ戰時名簿ハ其ノ召集ニ應シタルトキ諸部團隊ニ於テ調製スヘシ

第四條　戰時名簿ハ復員後更ニ之ヲ調製シ舊名簿ニ記載スル敍位敍勳任官進級其ノ他履歷中主要ノ事項ヲ兵籍ニ轉載スヘシ但第一國民兵ノ名簿ハ更ニ調製スルヲ要セス

第五條　留守擔當者ノ氏名現役將校同相當官ノ寄留地及動員前ノ所屬ハ應用ノ際軍隊官衙學校ニ於テ記入スルモノトス但師團長ハ平時ヨリ之ヲ記入スルノ規定ヲ設クルコトヲ得

第六條　豫備役後備役下士兵卒第一補充兵元下士以下ナル第一國民兵ノ戰時名簿ニ記載スル人相ハ召集ノ際諸部團隊ニ於テ本人ニ照合シテ訂正スルモノトス

第七條　戰時名簿ハ左ノ區分ニ依リ之ヲ備フヘシ

在職將校同相當官准士官現役下士兵卒(歸休兵ヲ除ク)軍屬ハ軍隊官衙學校

休職停職豫備役後備役將官同相當官ハ師團司令部其ノ召集中ハ諸部團隊

休職停職豫備役後備役上長官士官同相當官准士官豫備役後備役下士兵卒歸休兵第一補充兵ハ聯隊區司令部其ノ召集中ハ諸部團隊

第一國民兵ノ戰時名簿ハ本籍地市區役所町村役場戶長役場及之ニ準スヘキモノ

第八條　第一國民兵役ニ轉入シタル者ノ戰時名簿ハ聯隊區司令官(警備隊區ニ在テハ警備隊司令官)ヨリ本籍地ノ島司郡市區長ニ送付スヘシ島司郡長ニ在テハ町村長戶長及之ニ準スヘキ者ニ送付スヘシ

第九條　轉職轉役及在鄕者ノ轉籍等所屬ヲ轉換シタル者ノ戰時名簿ハ舊所屬ヨリ新所屬ニ送付スヘシ但現役ヨリ第一國民兵役ニ轉入シタル者ノ戰時名簿ハ聯隊區司令部ニ送付スヘシ

第十條　士官候補生、見習醫官、見習藥劑官、見習獸醫官、見習軍吏ノ戰時名簿ハ戰役中動員ヲ行ヒタル諸部團隊ニ附屬シタルトキ其ノ諸部團隊ニ於テ本人ノ階級ニ應シ將校下士兵卒ニ準シテ調製スヘシ

附　則

第十一條　第一國民兵戰時名簿ハ從前ノ名簿ヲ以テ之ニ充テ漸次改正ノ名簿ニ改ムルモノトス

（十八、內八朱書）

料紙西ノ內紙半葉　九寸

六寸三分

族籍「華（士）族（平民）」
本籍「何府（縣）何郡（市）（區）何町（村）何番地」
寄留「記載方右ニ同シ」
官名「何兵大尉」
位階「從何位」
勳等「勳何等」「功何級」
氏名「某長（次）男（兄）（弟）（戸主）」「爵　何　某」
動員前ノ所屬「在郷將校同相當官及准士官ニ在テハ其所屬聯隊區名ヲ記スヘシ」
動員後ノ所屬「何兵第何聯（大）隊」
誕生「何年月日」
死亡「何年何月日何地ニ於テ戰（病）死」
賞典「動員後ニ係ルモノヲ記載ス」
刑罰「動員後ニ係ルモノヲ記載ス」

動員後履歷
「明治何年何月何日第何師團參謀被仰付○何月何日何地出發同何日何地上陸○何月何日何地ニ於テ戰鬪○何月何日任少佐同日第何聯隊第何大隊長被仰付○何月何日何地ニ於テ戰鬪ノ際何部ニ貫通銃傷ヲ受ケ何地病院ニ入ル○何年何月全癒退院何地ヲ經何月何日復隊○何月何日何々ノ功ニ依リ何々ニ敍セラレ何勳章ヲ賜フ○何月何日何地出發同何日何地ニ於テ乘船同何日何地ニ上陸何月何日凱旋」
「記載方ハ其梗槩ヲ示スノミ宜シク類ヲ推シテ記載スヘシ（動員前略履歷）ノ區畫ニハ任官敍位敍勳ニ關シ調查上必要ノ事項ヲ記載シ（動員後履歷）ノ區畫ニハ動員後平定迄ニ係ル任官敍位敍勳功績其ノ他主要ナル經歷ヲ記載スヘキモノトス」

動員前略履歷
「明治何年何月何日士官候補生トシテ何隊ニ入ル○何年何月何日任少尉○何年何月何日敍正八位○何年何月何日任中尉○何年何月何日敍從七位○何年何月何日一等給○何年何ノ役何隊附ヲ以テ從軍○何年何月何日任大尉何中隊長ニ補セラル○何年何月何々ニ依リ謹愼何日○何年何月何日中隊長ヲ免シ何々ニ補セラル○何年何月何々ノ功ニ依リ何々」

留守擔當者ノ住所氏名

第一種戰時名簿

料紙西ノ內紙半葉　九寸

六寸三分

族籍「華（士）族（平民）」
本籍「何府（縣）何郡（市）（區）何町（村）何番地」
認識票番號「第何番」
寄留「記載方右ニ同シ」
特業「搶架術或ハ何々」
入隊「明治何年何月徵兵トシテ何隊ヘ」
官名等級「何兵何等軍曹」「（一等卒）」
位階「從何位」
勳等「勳何等」「功何級」
氏名「某長（次）男（兄）（弟）（戸主）」「爵　何　某」
動員前ノ所屬「何聯隊區」
動員後ノ所屬「何兵第何聯（大）隊第何中隊」
誕生「何年月日」
死亡「何年何月日何地ニ於テ戰（病）死」
賞典「動員後ニ係ルモノヲ記載ス」
刑罰「動員後ニ係ルモノヲ記載ス」

人相		
幹	顏	額
眼	鼻	口
髮	眉	齒
徵別		

再服役
「自明治何年何月何日至何年何月何日」
「自明治何年何月何日至何年何月何日」

動員後履歷
「明治何年何月何日充員召集ニ應シ何隊ニ編入○何月何日何地出發同何日何地上陸○何月何日何地ニ於テ戰鬪○何月何日任何官○何月何日何々ノ功績アリ○何月何日何々ニ依リ重禁錮二箇月ニ處セラル○何月何日何地戰鬪ノ際何々部ニ貫通銃傷ヲ受ケ即日何病院ニ入ル○何月何日全癒退院何補充隊ニ編入○何月何日召集解除」
「記載方ハ其梗槩ヲ示スノミ宜シク類ヲ推シテ記載スヘシ（動員前略履歷）ノ區畫ニハ任官敍位敍勳ニ關シ調查上必要ノ事項ヲ記載シ（動員後履歷）ノ區畫ニハ動員後平定迄ニ係ル任官敍位敍勳功績其他主要ナル經歷ヲ記載スヘキモノトス」

動員前略履歷
「明治何年何月何日任何官（一等卒被申付）○何年何月何日豫備役編入○何年何月何日充員召集ニ應シ何隊ニ編入何戰役ニ從軍○何年何月何々ノ功ニ依リ何々○何年何月何日召集解除」

留守擔當者ノ住所氏名

第二種戰時名簿

○遞信省令第七號

海員試驗規程左ノ通定ム

明治三十年五月二十四日

遞信大臣子爵野村　靖

海員試驗規程

第一章　總則

第一條　海員試驗ハ左ノ十二種トス

甲種船長試驗
甲種一等運轉士試驗
甲種二等運轉士試驗
乙種船長試驗
乙種一等運轉士試驗
乙種二等運轉士試驗
丙種船長試驗
丙種運轉士試驗
機關長試驗
一等機關士試驗
二等機關士試驗
三等機關士試驗

第二條　海員試驗ハ遞信大臣ノ定ムル場所及期日ニ於テ之ヲ執行ス

遞信大臣ニ於テ前項ノ定日外ニ臨時試驗ヲ執行スルノ必要アリト認ムルトキハ別ニ其ノ場所及期日ヲ定ム

第二章　受驗履歷

第三條　年齡二十年以上ニシテ左ニ掲クル履歷ノ一ヲ有スル者ハ海員試驗ヲ受クルコトヲ得

甲種船長試驗

一甲種一等運轉士ノ免狀若ハ遞信大臣ニ於テ之ニ相當スト認ムル外國政府ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數三百噸以上ノ航洋船ニ乘組ミ一等運轉士ノ職ヲ執リタルコト

一乙種船長若ハ丙種船長ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數三百噸以上ノ航洋船ニ乘組ミ船長ノ職ヲ執リタルコト

甲種一等運轉士試驗

一甲種二等運轉士ノ免狀若ハ遞信大臣ニ於テ之ニ相當スト認ムル外國政府ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數三百噸以上ノ航洋船ニ乘組ミ二等運轉士ノ職ヲ執リタルコト

甲種二等運轉士試驗

一四年以上登簿噸數二百噸以上ノ航洋船ノ運航ニ從事シ其ノ內一年以上ハ橫帆裝置ノ帆船又一年以上ハ汽船ニ乘組ミタルコト

一遞信大臣ノ允當ト認ムル學校ニ在テ航海運用學卒業ノ上三年以上登簿噸數二百噸以上ノ航洋船ノ運航ニ從事シ其ノ內一年以上ハ橫帆裝置ノ帆船、又六月以上ハ汽船ニ乘組ミタルコト

乙種船長試驗

一乙種一等運轉士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數二百噸以上ノ航洋汽船ニ乘組ミ一等運轉士ノ職ヲ執リタルコト

一乙種一等運轉士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數五十噸以上ノ航洋汽船ニ乘組ミ船長ノ職ヲ執リタルコト

一水先人免狀ヲ受有シ三年以上其ノ營業ヲ爲シタルコト

乙種一等運轉士試驗

一四年以上登簿噸數一百噸以上ノ航洋汽船ノ運航ニ從事シタルコト

一乙種二等運轉士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數二百噸以上ノ航洋汽船ニ乘組ミ運轉士ノ名義ヲ以テ其ノ運航ニ從事シタルコト

一乙種二等運轉士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數五十噸以上ノ航洋汽船ニ乘組ミ船長ノ職ヲ執リタルコト

一遞信大臣ノ允當ト認ムル學校ニ在テ航海運用學卒業ノ上三年以上登簿噸數一百噸以上ノ航洋汽船ノ運航ニ從事シタルコト

乙種二等運轉士試驗

一三年以上汽船ノ運航ニ從事シタルコト

一遞信大臣ノ允當ト認ムル學校ニ在テ航海運用學卒業ノ上二年以上汽船ノ運航ニ從事シタルコト

丙種船長試驗

一丙種運轉士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數一百噸以上若ハ積石數一千石以上ノ航洋帆船ニ乘組ミ一等運轉士ノ職ヲ執リタルコト

一丙種運轉士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數五十噸以上若ハ積石數五百石以上ノ航洋帆船ニ乘組ミ船長ノ職ヲ執リタルコト

一水先人免狀ヲ受有シ三年以上其ノ營業ヲ爲シタルコト

丙種運轉士試驗

一四年以上航洋帆船ノ運航ニ從事シタルコト

一遞信大臣ノ允當ト認ムル學校ニ在テ航海運用學卒業ノ上三年以上航洋帆船ノ運航ニ從事シタルコト

機關長試驗

一一等機關士ノ免狀若ハ遞信大臣ニ於テ之ニ相當スト認ムル外國政府ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數三百噸以上ノ航洋汽船ニ乘組ミ一等機關士ノ職ヲ執リタルコト

一一等機關士ノ免狀若ハ遞信大臣ニ於テ之ニ相當スト認ムル外國政府ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數二百噸以上ノ航洋汽船ニ乘組ミ機關長ノ職ヲ執リタルコト

一等機關士試驗

一四年以上登簿噸數二百噸以上ノ航洋汽船ニ乘組ミ機關ノ運轉ニ從事シタルコト

一二等機關士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數五十噸以上ノ航洋汽船ニ乘組ミ機關長ノ職ヲ執リタルコト

一二等機關士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數一百噸以上ノ航洋汽船ニ乘組ミ一等機關士ノ職ヲ執リタルコト

一二等機關士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數五百噸以上ノ航洋汽船ニ乘組ミ二等機關士ノ名義ヲ以テ機關ノ運轉ニ從事シタルコト

一遞信大臣ノ允當ト認ムル機關工場若ハ學校ニ在テ二年以上機關ノ製造若ハ修繕ニ從事シタル上一年六月以上登簿噸數二百噸以上ノ航洋汽船ニ乘組ミ機關ノ運轉ニ從事シタルコト

二等機關士試驗

一四年以上登簿噸數五十噸以上ノ航洋汽船ニ乘組ミ機關ノ運轉ニ從事シタルコト

一三等機關士ノ免狀ヲ受有シ一年以上登簿噸數五十噸以上ノ汽船ニ乘組ミ機關長ノ職ヲ執リタルコト

一　遞信大臣ノ允當ト認ムル機關工場ニ在テ二年以上機關ノ製造若ハ修繕ニ從事シタル上一年六月以上登簿噸數五十噸以上ノ航洋汽船ニ乘組ミ機關ノ運轉ニ從事シタルコト

三等機關士試驗

一　三年以上汽船ニ乘組ミ機關ノ運轉ニ從事シタルコト

一　遞信大臣ノ允當ト認ムル機關工場ニ在テ二年以上機關ノ製造若ハ修繕ニ從事シタル上一年以上汽船ニ乘組ミ機關ノ運轉ニ從事シタルコト

第四條　甲種一等運轉士若ハ甲種二等運轉士ノ免狀ヲ以テ乙種一等運轉士ノ免狀ニ代用シ其ノ職ヲ執リタル者ハ乙種船長試驗又丙種運轉士ノ免狀ニ代用シ其ノ職ヲ執リタル者ハ丙種船長試驗ヲ受クルコトヲ得但シ其ノ執職期間ハ第三條ノ規定ニ依ルヘシ

甲種二等運轉士ノ免狀ヲ受有シ登簿噸數五百噸以上ノ航洋船ニ乘組ミ三等運轉士ノ名義ヲ以テ其ノ職ヲ執リタル者又ハ一等機關士ノ免狀ヲ受有シ登簿噸數五百噸以上ノ航洋船ニ乘組ミ二等機關士ノ名義ヲ以テ其ノ職ヲ執リタル者ハ其ノ執職日數ノ半數ヲ以テ各免狀相當ノ職ヲ執リタル履歷ト見做スコトヲ得

第五條　前數條ニ於テ航洋船ト稱スルハ沿海航船以上ノ船舶、航洋汽船ト稱スルハ沿海航船以上ノ汽船ヲ謂フ

第六條　第三條中乙種船長試驗第一號及第二號ニ掲クル職務ハ其ノ執職期間ヲ通算シテ一年ニ滿ツルトキハ履歷タル效力ヲ有ス乙種一等運轉士試驗第二號及第三號、丙種船長試驗第一號及第二號、機關長試驗第一號及第二號、一等機關士試驗第二號、第三號及第四號ニ掲クル職務ニ關シテモ亦同シ

第七條　左ニ掲クルモノハ第三條、第四條ニ規定シタル履歷タル效力ヲ有セス

一　繫留船ニ乘組ミタルモノ

二　年齡滿十五年前ニ係ルモノ

三　明治十二年八月前ニ係ルモノ

第三章　受驗申請

第八條　海員試驗ヲ受ケントスル者ハ試驗期日七日前（休暇日ヲ算入セス）迄ニ其ノ履歷書、身分書及海技免狀受有者ニ在テハ海技免狀ノ寫ヲ添ヘ受驗申請書ヲ船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ニ差出スヘシ

臨時試驗ヲ受ケントスル者ハ試驗期日三日前（休暇日ヲ算入セス）迄ニ前項ノ手續ヲ爲スヘシ

第九條　履歷ハ左ニ掲クル書類ヲ以テ之ヲ證明スヘシ

一　商船ニ乘組ミタル履歷　當該官吏公吏ノ證明書

二　海軍艦船艇其ノ他官廳所屬船ニ乘組ミタル履歷　當該官廳若ハ艦船艇ノ辭令書若ハ證明書

三　學校若ハ工場ニ在リタル履歷　當該學校若ハ工場ノ卒業證書若ハ證明書

第十條　身分書ニハ左ノ事項ヲ記載シ本籍市區町村長、外國人ニ在テハ本國領事ノ證明ヲ受クヘシ

一　原籍地、身分及氏名

二　生年月日

三　船舶職員法第六條第一號及第二號ニ掲クル事項ニ該當セサルコト

第十一條　受驗申請者ハ體格檢査ニ付テハ二十錢、學術試驗ニ付テハ其ノ試驗ノ種類ニ從ヒ左ノ手數料ヲ納ムヘシ

甲種船長	五圓
甲種一等運轉士	三圓
甲種二等運轉士	二圓

乙種船長　三圓
乙種一等運轉士　二圓
乙種二等運轉士　一圓
丙種船長　三圓
丙種運轉士　一圓
機關長　五圓
一等機關士　三圓
二等機關士　二圓
三等機關士　一圓

第十二條　體格檢査手數料ハ受驗申請書ト與ニ納メ學術試驗手數料ハ學術試驗開始ニ先チテ納ムヘシ

第十三條　既納手數料ハ事故ノ如何ヲ問ハス之ヲ還付セス

第四章　試驗

第十四條　海員試驗ハ體格檢査及學術試驗トス體格檢査ニ合格シタル者ニアラサレハ學術試驗ヲ受クルコトヲ得ス但シ體格檢査ニ合格シ學術試驗ニ合格セサル者體格檢査ヲ受ケタル日ヨリ三箇月以內ニ於テ試驗ヲ受ケントスルトキハ試驗官吏ノ見込ニ依リ體格檢査ヲ省略スルコトアルヘシ

學術試驗ハ分チテ筆記試驗及口述試驗トス但シ乙種二等運轉士試驗、丙種運轉士試驗及三等機關士試驗ニハ筆記試驗ヲ行ハス

筆記試驗ニ合格シタル者ニアラサレハ口述試驗ヲ受クルコトヲ得ス

學術試驗ハ別記ノ科目ニ依リ之ヲ行フ

第十五條　筆記試驗ニ於テ答ヲ爲スノ時限ハ試驗官吏之ヲ定ム

口述試驗ハ受驗人一人毎ニ試問シテ卽時答ヲ爲サシム

第十六條　試驗官吏ニ於テ受驗人ノ履歷若ハ身分ニ詐欺錯誤アルコト又ハ受驗ノ資格ナキコトヲ發見スルトキ若ハ船舶司檢所ノ定メタル受驗人心得ニ違反シタルコトヲ認ムルトキハ何時ニテモ其ノ試驗ヲ停止スルコトヲ得

第十七條　試驗官吏ニ於テ受驗人第十六條ノ處分ヲ受クヘキ所爲アリタルコトヲ試驗結了後ニ發見スルトキハ其ノ試驗ヲ無效トスヘシ

第十八條　受驗人左ニ揭クル場合ニ於テハ其ノ試驗ハ成立セサルモノトス

一　定期ノ日時ニ出場セサルトキ

二　試驗ヲ了ラスシテ退場シタルトキ

三　第十五條ノ時限內ニ答ヲ爲サヽルトキ

四　第十六條ノ處分ヲ受ケタルトキ

第十九條　受驗人試驗ニ合格シタルトキハ附錄書式ノ合格證書ヲ付與ス

第二十條　合格證書ヲ付與シタル後試驗官吏ニ於テ合格者第十六條ノ處分ヲ受クヘキ所爲アリタルコトヲ發見スルトキハ該合格證書ヲ無效トスヘシ

前項ノ場合ニ於テハ當該船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ハ之ヲ官報ニ公告スヘシ

第五章　試驗停止

第二十一條　體格檢査ニ合格セサル者ハ受驗ノ日ヨリ三箇月ヲ經過スルニアラサレハ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第二十二條　同種免狀ニ對スル筆記試驗ニ合格セサルコト若ハ筆記試驗成立セサルコト三箇月間ニ於テ二回ニ及ヒタル者ハ最後受驗ノ日ヨリ三箇月ヲ經過スルニアラサレハ下等免狀ニ對スル

ノ外試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第二十三條　同種免狀ニ對スル口述試驗ニ合格セサルコト若ハ口述試驗成立セサルコト二回ニ及ヒタル者ハ最後受驗ノ後三箇月間實地運航ニ從事シタル履歷ヲ有スルニアラサレハ下等免狀ニ對スルノ外試驗ヲ受クルコトヲ得ス

前項ノ履歷ニ關シテハ第三條、第七條及第九條ノ規定ヲ適用ス

附　則

第二十四條　此ノ規程ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

第二十五條　明治二十六年遞信省令第十五號明治二十九年遞信省令第十號及明治三十年遞信省令第三號ハ此ノ規程施行ノ日ヨリ廢止ス

（別記）

試驗科目

甲種船長試驗

（甲種一等運轉士試驗及甲種二等運轉士試驗ノ科目ヲ合セ）

筆記

一　星象高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法
二　太陰子午線高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法
三　經度及太陽高度ニ據リ時辰儀ノ遲差ヲ知ル算法
四　「ナビール」自差表調製及用法

口述

一　羅針遲差ノ解明
二　原差羅針據附及矯正ノ方法
三　船雜ニ際シ人命及船舶ヲ救護スル方法
四　風風ノ解明及避離法
五　船舶及船長海員ニ關スル法規ノ要領
六　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

甲種一等運轉士試驗

（甲種二等運轉士試驗ノ科目ヲ合セ）

筆記

一　太陽方位角ニ據リ羅針ノ遲差ヲ知ル算法
二　子午線ニ近キ太陽高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法
三　「サムナー」法ニ據リ船舶所在ノ位置及太陽ノ方位角ヲ知ル算法
四　潮時ノ算法

口述

一　六分儀ノ矯正用法及時辰儀ノ取扱
二　下檣建設其ノ他圓材ノ取扱
三　錨ヲ運送投下シ又ハ之ヲ引揚ル方法
四　船舶荒天運用ノ方法
五　航海中不慮ノ事變ニ會シ之ニ應スル處置

六　汽船ノ暗車作用
七　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

甲種二等運轉士試驗

筆記

一　航海運用ニ關スル用語ノ解明
二　航海日誌ノ記載
三　分數及比例算法
四　航海日誌ノ算法
五　緯線航行算法
六　「マーケートル」法又ハ中分緯度法ニ據リ經緯度若ハ針路航程ヲ知ル算法
七　太陽子午線高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法
八　太陽出沒方位ニ據リ羅針ノ遲差ヲ知ル算法
九　時辰儀及太陽高度ニ據リ經度ヲ知ル算法
十　羅針自差ノ算法
十一　海圖ノ應用

口述

一　船具ノ取附及取脫
二　桅檣及帆架ノ揚降
三　帆ノ取扱
四　船舶常時運轉及碇泊ノ方法
五　測程具及測深具ノ解明並用法
六　貨物積載法
七　海上衝突豫防法
八　萬國信號法
九　羅針自差ノ測定方法
十　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

乙種船長試驗

（乙種一等運轉士試驗及乙種二等運轉士試驗ノ科目ヲ合セ）

筆記

一　太陽子午線高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法
二　太陽ノ出沒方位又ハ方位角ニ據リ羅針ノ遲差ヲ知ル算法
三　時辰儀及太陽高度ニ據リ經度ヲ知リ又ハ太陽高度及經度ニ據リ時辰儀ノ遲差ヲ知ル算法

口述

一　六分儀ノ矯正用法及時辰儀ノ取扱
二　羅針遲差ノ解明
三　汽船ノ暗車作用
四　煙船荒天運用ノ方法
五　錨ヲ運送投下シ又ハ之ヲ引揚ル方法
六　航海中不慮ノ事變ニ會シ之ニ應スル處置
七　船雜ニ際シ人命及船舶ヲ救護スル方法
八　船舶及船長海員ニ關スル法規ノ要領
九　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

乙種一等運轉士試驗

（乙種二等運轉士試驗ノ科目ヲ合セ）

筆記

一　航海日誌ノ記載
二　加減乘除應用算法
三　航海日誌ノ算法
四　羅針自差ノ算法
五　海圖ノ應用

口述

一　帆ノ取扱

二　海上衝突豫防法
三　萬國信號法
四　羅針自差ノ測定方法
五　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

乙種二等運轉士試驗

口述

一　羅針儀ノ解明及用法
二　測程具、測深具ノ解明及用法
三　汽船運轉及碇泊ノ方法
四　船舶衝突豫防ノ方法
五　船舶信號法ノ大要
六　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

丙種運轉士試驗

（丙種運轉士試驗ノ科目ヲ合セ）

筆記

一　航海日誌ノ算法
二　太陽子午線高度ニ據リ緯度ヲ知ル算法
三　太陽ノ出沒方位又ハ方位角ニ據リ羅針ノ遠差ヲ知ル算法
四　時辰儀及太陽高度ニ據リ經度ヲ知リ又ハ太陽高度及經度ニ據リ時辰儀ノ遠差ヲ知ル算法
五　羅針自差ノ算法

口述

一　六分儀ノ矯正用法及時辰儀ノ取扱
二　羅針遠差ノ解明及測定方法
三　帆船荒天運用ノ方法
四　錨ヲ遲送投下シ又ハ之ヲ引揚ル方法
五　航海中不慮ノ事變ニ會シ之ニ應スル處置
六　船雖ニ際シ人命及船舶ヲ救護スル方法
七　船舶及船長海員ニ關スル法規ノ要領
八　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

丙種運轉士試驗

口述

一　羅針儀ノ解明及用法
二　海圖ノ應用
三　測程具、測深具ノ解明及用法
四　帆ノ取扱
五　帆船運轉及碇泊ノ方法
六　海上衝突豫防法
七　船舶信號法ノ大要
八　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

機關長試驗

（一等機關士試驗、二等機關士試驗及三等機關士試驗ノ科目ヲ合セ）

筆記

一　汽機強力、汽罐強力、螺旋螺距、煙突溫度、蒸氣膨脹、蒸氣切斷、水壓力、開平式、汽力圖等ニ關スル算法
二　汽機汽罐局部ノ製圖

口述

一　熱及汽機汽罐ニ於ケル熱ノ效力及害
二　汽機汽罐各部ニ要スル諸強力ノ解明
三　汽機汽罐材料ノ解明
四　汽機各部ノ摩擦力及實馬力ト推進力トノ關係
五　蒸氣及其ノ膨脹力使用ニ基キ各種汽機比較ノ大要
六　汽力器及汽力圖ノ解明

七　汽機汽罐ノ要部及炭量水量等ノ割合
八　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

一等機關士試驗

（二等機關士試驗及三等機關士試驗ノ科目ヲ合セ）

筆記

一　重量、炭費、觸火面、速力、槓杆安全瓣、喞筒馬力等ニ關スル算法

口述

一　汽機汽罐各部組成ノ理解
二　各種ノ汽機汽罐構造及利害ノ解明
三　汽機各部ノ働力方向ノ解明
四　各種ノ滑瓣、働瓣機及推進器ノ解明
五　車軸、螺旋軸、滑瓣等ノ裝置及其位置ノ改正
六　馬力ノ解明
七　汽機汽罐ニ關スル諸器製造ノ理解
八　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

二等機關士試驗

（三等機關士試驗ノ科目ヲ合セ）

筆記

一　機關室日誌ノ記載
二　分數、比例及面積求積ノ算法

口述

一　汽機汽罐組成ノ大要
二　汽機ノ毀損シ易キ部分及之ニ對スル注意
三　汽罐ニ腐蝕燒損其ノ他毀損ヲ來タスノ原因及其ノ豫防方法
四　運轉中汽機汽罐ニ要スル注意
五　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

三等機關士試驗

口述

一　汽機汽罐檢査ノ方法
二　汽機汽罐各部ノ效用
三　汽機汽罐ニ關スル諸器ノ效用及用法
四　汽機汽罐ノ取扱及運轉方法
五　汽機汽罐ノ損所ヲ修繕スル方法
六　運轉中汽機汽罐ニ不慮ノ危害ヲ生シタルトキノ處置
七　前數項ノ外本分ノ職務ニ關シ試驗官吏ニ於テ必要ト認ムル事項

附錄書式（竪七寸七分　横一尺八分）

合格證書

道府縣等士族平民
氏　名
生年月日

右者海員試驗規程ニ依リ（試驗種類）ヲ受ケ合格ス依テ此ノ證書ヲ付與ス

明治　年　月　日

船舶司檢所長（船舶司檢所支所長）　氏　名　印

〔參照〕
明治二十六年八月遞信省令第十五號ハ西洋形船船長運轉手機關手試驗規程、同二十九年二月十遞信省令第十號及同三十年十一月三遞信省令第三號ハ同規程中改正ノ件ナリ

○遞信省令第八號

海技免狀取扱規則左ノ通改正ス

明治三十年五月二十四日

遞信大臣子爵野村　靖

海技免狀取扱規則

第一條　海員試驗規程ニ依リ合格證書ヲ得タル者海技免狀ヲ受ケントスルトキハ第一號書式ノ申請書ニ合格證書ノ寫ヲ添エ試驗ヲ受ケタル船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ヲ經由シテ之ヲ遞信省ニ差出スヘシ

第二條　船舶職員法第五條第二項ニ依リ海技免狀ヲ受ケントスルトキハ海軍艦船艇ニ乘組ミ運航若ハ機關運轉ニ從事シタル者ニ在テハ最後任官ノ辭令書、履歷書及身分書、商船學校全科卒業生ニ在テハ其ノ卒業證書、履歷書及身分書ヲ添エ第二號書式ノ申請書ヲ體格檢査ヲ受ケタル船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ヲ經由シテ遞信省ニ差出スヘシ

前項ノ身分書ニ關シテハ海員試驗規程第十條ノ規定ニ依リ海技免狀受有後ノ履歷ニ關シテハ海員試驗規程第九條ノ規定ニ依ルヘシ

第三條　遞信省ニ於テ第一條若ハ第二條ノ申請書ヲ受ケ海技免狀ヲ授與スヘキモノト認ムルトキハ左ノ事項ヲ海員名簿ニ登錄シ第三號書式ノ海技免狀ヲ授與スヘシ

一　海技免狀ノ番號

二　海技免狀ノ種類

三　氏名

四　族籍（道府縣華士族平民）

五　原籍地

六　生年月日

七　試驗地名

八　合格年月日

九　登錄年月日

第四條　當該官吏若ハ公吏ニ於テ海技免狀ノ檢閲ヲ要スルトキハ海技免狀受有者ハ直ニ之ヲ提供スヘシ

第五條　氏名若ハ族籍ヲ變更シ又ハ生年月日ニ誤謬アルコトヲ發見シタルトキハ原籍市區町村長、外國人ニ在テハ本國領事ノ證明ヲ受ケ二箇月以內ニ事由ヲ具シ最寄船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ヲ經由シテ遞信省ニ登錄ノ變更竝海技免狀ノ書換ヲ申請スヘシ

原籍地ヲ變更スルモ族籍ニ異動ヲ生セサルトキハ當該市區町村長、外國人ニ在テハ本國領事ノ證明ヲ受ケ二箇月以內ニ最寄船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ヲ經由シテ遞信省ニ屆出ツヘシ

第六條　海技免狀ヲ亡失若ハ毀損シタルトキハ二箇月以內ニ事由ヲ具シ最寄船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ヲ經由シテ其ノ再授ヲ遞信省ニ申請スヘシ

第七條　左ニ掲クル海技免狀ハ無效トス

一　船舶職員法第六條第一號乃至第三號ニ掲クル事項ニ該當シタル者ノ受有スル免狀

二　高等免狀ヲ授與セラレタル者ノ受有セシ下等免狀

三　書換若ハ再授ニ依リ免狀ヲ授與セラレタル者ノ受有セシ當該免狀

四　廢業、失踪若ハ死亡シタル者ノ免狀

五　無效ノ合格證書ニ依テ授與セラレタル免狀

前項ノ場合ニ於テ遞信省ハ直ニ海技免狀ノ無效タルコトヲ官報ニ公告スヘシ

第八條　海技免狀無效ト爲リタルトキハ本人ニ於テ三十日以內ニ事由ヲ具シ最寄船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ヲ經由シテ該免狀ヲ遞信省ニ返納スヘシ

本人失踪若ハ死亡シタルトキハ海技免狀ノ保管者ニ於テ前項ノ手續ヲ爲スヘシ

第九條　遞信省ハ登錄事項ニ變更アリタルトキハ之ヲ訂正シ又海技免狀無效トナリタルトキハ第七條第三號ノ場合ヲ除クノ外其ノ登錄ヲ削除スヘシ

第十條　第一條若ハ第二條ニ依リ登錄ヲ申請シ若ハ第五條ニ依リ登錄ノ變更ヲ申請スル者ハ申請書ト與ニ登錄稅法第九條ニ從ヒ相當ノ登記印紙ヲ貼用シタル登錄稅上納書ヲ差出スヘシ

貼用シタル印紙ニハ上納書ノ紙面ト印紙ノ彩紋トニ掛ケ署名ノ下ニ押捺スル印ヲ以テ消印スヘシ

第十一條　第六條ニ依リ海技免狀ノ再授ヲ申請スル者ハ手數料一圓ヲ納ムヘシ

第十二條　第四條、第五條、第六條若ハ第八條ニ違背シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第十三條　此ノ規則ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

第十四條　此ノ規則施行以前ニ於テ第五條、第六條若ハ第八條ニ掲クル場合ニ該當シタル者ニシテ未タ其ノ手續ヲ了ラサルトキハ此ノ規則施行ノ日ヨリ三十日以內ニ其ノ手續ヲ爲スヘシ

本條ニ違背シタル者ニハ第十二條ノ罰則ヲ適用ス

（第一號書式）

海技免狀授與申請書

私儀　試驗ニ合格仕候ニ付海員名簿ニ登錄ノ上海技免狀授與相成度別紙合格證書寫相添此段申請候也

所ニ於テ

明治　年　月　日

原籍道府縣郡市區町村番地
華士族平民
氏　名　印
（氏名ハ假名ニテ傍訓スヘシ）

遞信大臣宛

（第二號書式）

海技免狀授與申請書

私儀別紙履歷書之通ニ有之候間船舶職員法第五條第二項ニ依リ海員名簿ニ登錄ノ上　免狀授與相成度成規ノ書類相添此段申請候也

明治　年　月　日

原籍道府縣郡市區町村番地
華士族平民
氏　名　印
（氏名ハ假名ニテ傍訓スヘシ）

遞信大臣宛

（第三號書式）

花紋

第　號

道府縣華士族平民
氏　名
生年月日

明治　年　月　日登錄
（免狀種類）免狀

明治二十九年法律第六十八號船舶職員法ニ依リ之ヲ授與ス

明治　年　月　日

遞信大臣　爵　氏　名　印

紋章

割印

備考

一海技免狀ノ寸法ハ竪九寸橫一尺二寸トス

一甲種船長、甲種一等運轉士、甲種二等運轉士、機關長及一等機關士ノ免狀ハ其ノ裏面ニ英譯文ヲ附ス

一前項ニ掲クル免狀ノ紋章ハ菊章トシ其ノ他ノ免狀ノ紋章ハ桐章トス

○遞信省令第九號

海技免狀交換規程左ノ通定メ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

明治三十年五月二十四日　遞信大臣子爵野村　靖

海技免狀交換規程

第一條　船舶職員法第十二條ニ掲クル舊免狀ヲ受有スル者ハ船舶司檢所若ハ船舶司檢所支所ヲ經由シテ該免狀ノ寫ヲ添エ別記書式ノ申請書ヲ遞信省ニ差出スヘシ

明治二十六年十一月一日以前ニ免狀ヲ授與セラレタル者ニ在テハ原籍地、身分、氏名、生年月日ヲ記載シ且原籍市區町村長、外國人ニ在テハ本國領事ノ證明ヲ受ケタル身分書ヲ前項ノ申請書ニ添附スヘシ

第二條　船舶職員法第二號表ニ於テ二種ノ新免狀ニ相當スル舊免狀ヲ受有スル者ハ一種ノ新免狀ヲ選擇シ交換ヲ申請スヘシ

甲種二等運轉手若ハ本免狀二等運轉手及乙種一等運轉手若ハ假免狀一等運轉手ノ舊免狀ヲ併有スル者ハ甲種二等運轉士、乙種一等運轉士若ハ丙種運轉士ノ新免狀ノ中一種ヲ選擇シ交換ヲ申請スヘシ

前項ノ場合ヲ除クノ外二種ノ舊免狀ヲ併有スル者ハ各別ニ其ノ交換ヲ申請スルコトヲ得

第三條　第二條第二項若ハ第三項ノ場合ニ於テ交換ヲ申請セサル舊免狀ハ第一條ノ申請書ニ添エ之ヲ返納スヘシ

第四條　第一條ノ申請書ハ明治三十年七月一日ヨリ明治三十一年六月三十日迄ニ之ヲ差出スヘシ」

前項ノ期間內ニ申請書ヲ差出サヽル者ハ其ノ受有スル舊免狀ヲ遞信省ニ返納ス可シ

第五條　遞信省ニ於テ第一條ノ申請書ヲ受ケ新免狀ヲ授與スヘキモノト認ムルトキハ本人若ハ代人ニ新免狀ヲ交付シ期間ヲ指定シ舊免狀ヲ返納セシムヘシ

第六條　第三條、第四條第二項若ハ第五條ニ違背シ舊免狀ヲ返納セサルトキハ遞信省ハ該免狀ヲ無效トシ之ヲ官報ニ公告スヘシ

（別記書式）

海技免狀交換申請書

私儀從來何免狀受有罷在候處船舶職員法第十二條ニ依リ何免狀ト交換相成度別紙受有免狀寫及身分書（第一條第二項ニ該當スル者ニ在テハ）相添此段申請候也

明治　年　月　日

原籍道府縣郡市區町村番地
華士族平民
氏　名　印

遞信大臣宛

（第三條ニ該當スル者ハ左ノ追書ヲ加フヘシ）

本文何免狀ノ外何免狀受有罷在候ニ付添附返納候也

○遞信省令第十號

積石數百五十石以上ノ帆船ニ乘組ミタル者ニ海技免狀ヲ授與スル件左ノ通定メ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

明治三十年五月二十四日　遞信大臣子爵野村　靖

第一條　船舶職員法第十四條ニ依リ遞信大臣ニ於テ相當海技免狀ヲ授與スヘキ者ハ三役若ハ之ニ相當スル者ノ中船長ノ職ヲ執リタル者一人ニ限ル

三役ト稱スルハ船頭、親司及表主ヲ謂フ

第二條　第一條ニ該當スル者ニシテ海技免狀ノ授與ヲ申請セントスルトキハ其ノ乘組船舶ノ所有者及三役ノ中二人ノ連署シタル別記書式ノ申請書ニ身分書及履歷書ヲ添エ地方官廳ヲ經由シテ之ヲ遞信省ニ差出スヘシ但シ連署ヲ得ル能ハサルトキハ其ノ理由書ヲ添附スヘシ

前項ノ身分書ハ海員試驗規程第十條ノ規定ニ依ルヘシ

（別記書式）

海技免狀授與申請書

私儀何箇年以來帆船ノ運航ヲ業リ現ニ何丸（船舶名稱及主者ノ之ニ相當スル名稱）執職滞在候ニ付相當免狀御授與相成度別紙身分書及履歷書相添此段申請候也

明治　年　月　日

原籍道府縣郡市區町村番地
華士族平民
本　人　氏　名　印

遞信大臣宛

○遞信省令第十一號

船舶職員法第一號表中近海航船ニシテ登簿噸數五百噸未滿ノ汽船及沿海航船ニシテ登簿噸數二百噸以上ノ汽船ニハ船舶職員法施行ノ日ヨリ一箇年ヲ限リ二等機關士ノ免狀ヲ有スル者ニ機關長ノ職ヲ執ラシメ又一等機關士ヲ乘組マシメサルコトヲ得

明治三十年五月二十四日

遞信大臣子爵野村　靖

○司法省令第八號

岡山地方裁判所管內岡山區裁判所輕部出張所管轄赤阪郡竹枝村、葛城村及ヒ五城村大字新庄、伊田、矢原ヲ同區裁判所金川出張所ノ管轄ニ改メ登記管轄區域表中左ノ通改正ス

明治三十年五月二十七日

司法大臣清浦奎吾

岡山	岡山	輕部	同
			同
			何丸所有者 氏　名　印
			同
			同
			何　役　氏　名、印
			同
			同
			何　役　氏　名　印
	金川	備前	津高郡ノ內
			金川村
			牧山村
			宇垣村
			上建部村
			建部村
			宇甘東村
			宇甘西村
			赤阪郡ノ內
			竹枝村
			葛城村
			五城村大字（新庄、伊田、矢原）

		輕部	赤阪郡ノ內
			輕部村
			東高月村
			西高月村
			牲岡村
			周匝村
			山方村
			鳥取上村
			鳥取中村
			鳥取下村
			西山村
			仁堀村
			布都奚村
			五城村大字（邑岡、矢細西、）
鳥取	湯口	黑坂	日野郡ノ內
			黑坂村
			菅福村
			菅澤村
			福成村
			印賀村大字（印賀、賀谷）
			石見村大字（上石見、中石見）
		矢戸	伯耆
			日野郡ノ內
			宮內村
			阿毘縁村
			印賀村大字（折渡）
			山上村
			多里村
			石見村大字（下石見、三吉）
			霞村
			福榮村
松山	西條	三島	伊豫
			宇摩郡ノ內
			三島村
			川之江村
			中脊根村
			金生村
			中之庄村
			川滝村
			寒川村
			斐烏村
			富郷村
			松柏村
			金砂村
			上分村
			二名村
		小林	伊豫
			宇摩郡ノ內
			小富士村
			野田村
			關川村
			天滿村
			蕊崎村
			土居村
			豐岡村
			津根村

○司法省令第九號

鳥取地方裁判所管內溝口區裁判所黑坂出張所管轄日野郡霞村、福榮村、印賀村大字折渡、石見村大字下石見、三吉ヲ同區裁判所矢戸出張所ノ管轄ニ改メ登記管轄區域表中左ノ通改正ス

明治三十年五月二十七日

司法大臣清浦奎吾

○司法省令第十號

松山地方裁判所管內西條區裁判所關川出張所ヲ宇摩郡小富士村ニ移シ小林出張所ト改稱シ同區裁判所三島出張所管轄同郡豐岡村、津根村、野田村ヲ同區裁判所小林出張所ノ管轄ニ改メ登記管轄區域表中左ノ通改正ス

明治三十年五月二十七日

司法大臣清浦奎吾

○司法省令第十一號

福島地方裁判所管内白河區裁判所矢吹出張所管轄西白河郡關平村ヲ同區裁判所ノ管轄ニ改メ同區裁判所須賀川出張所管轄岩瀬郡廣戸村ヲ同區裁判所矢吹出張所ノ管轄ニ改メ登記管轄區域表中左ノ通改正ス

明治三十年五月二十七日

司法大臣清浦奎吾

福島	白河	磐城	西白河郡ノ内
			白河町
			釜子村
			西郷村
			五箇村
			白坂村
			大沼村
			古關村
			吉子川村
			金山村
			小田川村
			社村
			關平村
			小野田村
	須賀川	岩代	岩瀬郡ノ内
			須賀川町
			鏡石村
			濱田村
			仁井田村
			西袋村
			白江村
			稲田村
		磐城	石川郡ノ内
			川東村
			小塩江村
			大森田村
	矢吹	磐城	西白河郡ノ内
			矢吹村
			中畑村
			信夫村
			川崎村
			三神村
			滑津村
		岩代	岩瀬郡ノ内
			廣戸村

○司法省令第十二號

秋田地方裁判所管内大曲區裁判所管轄仙北郡藤木村及同區裁判所六郷出張所管轄同郡金澤西根村ヲ同區裁判所角間川出張所ノ管轄ニ改メ登記管轄區域表中左ノ通改正ス

明治三十年五月二十七日

司法大臣清浦奎吾

秋田	大曲	羽後	仙北郡ノ内
			大曲町
			横堀村
			大川西根村
			花館村
			高梨村
			神宮寺村
			四ッ屋村
			清水村
			横澤村
			長信田村
	角間川	羽後	平鹿郡ノ内
			角間川町
			川西村
			仙北郡ノ内
			藤木村
			内小友村
			金澤西根村
	六郷	羽後	仙北郡ノ内
			六郷町
			畑屋村
			仮詰村
			金澤村
			千屋村

○大藏省令第八號

長崎稅關木製小蒸汽船新造ノ競爭入札ニ加ハラントスル者ハ會計規則第六十九條ニ定メタル資格ノ外尚ホ左ノ資格ヲ備フルコトヲ要ス

第一　造船學ヲ修メタル技術者ヲ聘用シ居ル者

第二　還燒火（アンニーリング、ファーネス）爐ヲ備フル工場ヲ有スル者

明治三十年五月二十九日

大藏大臣伯爵松方正義

○文部省令第七號

明治二十四年文部省令第十四號小學校教科用圖書審査等ニ關スル規則第一條第一項ノ一ノ次ニ「二　地方視學」ヲ追加シ「二」ヲ「三」トシ以下順次繰下ク

明治三十年五月三十一日

文部大臣侯爵蜂須賀茂韶

〔參照〕

文部省令第十四號小學校教科用圖書審査等ニ關スル規則（明治二十四年十一月十七日）抄錄

第一條　小學校圖書審査委員ハ府縣知事之ヲ命ス其ノ人員左ノ如シ

一　府縣高等官及學務擔任官吏各一名

二　府縣參事會員二名但府縣制ヲ施行セサル地方ニ於テハ府縣會常置委員二名

三　尋常師範學校長

四　尋常中學校長一名
五　尋常師範學校教員二名
六　小學校教員三名乃至五名
審査委員長ハ府縣高等官ニシテ審査委員タルモノヲ以テ之ニ充ツ

○海軍省令第七號

海軍下士卒被服裁縫請負ノ競爭ニ加ハラントスル者ハ會計規則第六十九條第一項ニ掲クル事項ノ外尙ホ左ノ資格ヲ備フルヲ要ス

明治三十年六月四日　海軍大臣侯爵西鄕從道

一　各人ニ在リテハ直接國稅年額拾五圓以上ヲ二箇年以來引續キ規定ノ納期ニ納ムルコト
　　合名會社ニ在リテハ社員ノ納稅額ヲ併セ直接國稅年額拾五圓以上ヲ納ムルコト
　　合資會社及株式會社ニ在リテハ資本金貳萬圓以上拂込ヲ終ヘタルコト
二　競爭ヲ執行スル鎭守府ノ所在地方ニ於テ二十坪以上ノ石造若クハ煉瓦造倉庫又ハ堅牢ナル土藏及四十坪以上ノ裁縫工場一工場ニ付二十坪以上ノモノヲ所持スルコト

○海軍省令第八號

明治二十九年三月海軍省令第二號海軍少軍醫少藥劑官少軍醫候補生少藥劑官候補生採用試驗規則第一條中海軍衛生會議ヲ海軍省醫務局ニ改メ第一號書式中海軍衛生會議議長ヲ海軍省醫務局長ニ改ム

明治三十年六月四日　海軍大臣侯爵西鄕從道

○內務省令第十五號

傳染病豫防法第十八條ニ依リ檢疫委員設置規則左ノ通定ム

明治三十年六月五日　內務大臣伯爵樺山資紀

檢疫委員設置規則

第一條　檢疫委員ハ廳府縣郡島廳ノ官吏醫師藥劑師等ニ就キ府縣知事（東京府ハ警視總監以下之ニ倣フ）之ヲ命ス

警視總監ハ東京府知事ニ協議シ府ノ官吏ニ檢疫委員ヲ命スルコトヲ得

第二條　檢疫委員ハ府縣知事ノ命ヲ承ケ傳染病豫防事務ノ監督廳府縣ニ於テ施行スル船舶汽車ノ

檢疫其ノ他傳染病豫防救治ニ關スル事務ニ從事ス

第三條　檢疫委員ノ設置及廢止ハ之ヲ告示スヘシ

第四條　檢疫委員ノ組織及職務ハ第五條以下ニ準據スヘシ但廳府縣ノ本廳ニ限リ檢疫委員ヲ置キ又ハ郡市島ニ限リ檢疫委員ヲ配置スルモ妨ナシ

第五條　廳府縣ノ本廳ニ檢疫委員長一人ヲ置ク但必要アルトキハ副長一人又ハ數人ヲ置ク

檢疫委員長ハ警部長（警視廳ハ警察署長）ハ副長ハ委員中ニ就キ府縣知事之ヲ命ス

第六條　府縣知事ハ郡市島ニ檢疫委員事務所ヲ置キ其ノ郡市島內ニ屬スル第二條ノ事務ニ從事セシムルコトヲ得

第七條　檢疫委員事務所ニ所長一人及副長一人又ハ數人ヲ置ク

檢疫委員事務所長ハ郡長島司又ハ警察署長ニ副長ハ委員中ニ就キ府縣知事之ヲ命ス

第八條　檢疫委員ノ職務章程ハ府縣知事之ヲ定ム

○內務省令第十六號

明治十九年六月內務省令第十一號警察官吏其他內國旅費概則第九條中「認可ヲ經テ」ノ五字ヲ削ル

明治三十年六月九日　　內務大臣伯爵樺山資紀

〔參照〕

內務省令第十一號警察官吏其他內國旅費概則（明治十九年六月二十六日）抄錄

第九條　地方ノ情況ニ據リ認可ヲ經テ定額ノ旅費ヲ節減スルコトヲ得

○司法省令第十三號

山口地方裁判所管內萩區裁判所佐々並出張所ヲ阿武郡明木村ニ移シ明木出張所ト改稱シ登記管轄區域表中左ノ通改正ス

明治三十年六月十二日　　司法大臣清浦奎吾

山口	萩	明木	長門	阿武郡ノ內明木村	佐々並村　川上村

○內務省令第十七號

明治二十二年四月內務省令第六號徵兵參事員手當金竝ニ旅費支給規則第二項但書中「認可ヲ經テ」ノ五字ヲ削ル

明治三十年六月十四日　　內務大臣伯爵樺山資紀

〔參照〕

內務省令第六號徵兵參事員手當金竝ニ旅費支給規則（明治二十二年四月二十四日）抄錄

第二項但書

但地方ノ狀況ニ依リ認可ヲ經テ定額ノ旅費ヲ節減スルヲ得

○司法省令第十四號

靜岡地方裁判所沼津支部甲府地方裁判所谷村支部奈良地方裁判所五條支部神戸地方裁判所筱山支部岡山地方裁判所高梁支部富山地方裁判所丸龜支部安濃津地方裁判所上野支部同地方裁判所四日市支部同地方裁判所山田支部岐阜地方裁判所大垣支部同地方裁判所高山支部廣島地方裁判所三次支部山口地方裁判所岩國支部大分地方裁判所豆田支部熊本地方裁判所八代支部宮崎地方裁判所延岡支部仙臺地方裁判所石卷支部及ヒ秋田地方裁判所大館支部ニ於テ本年九月十日ヨリ豫審事務ヲ取扱フ

明治三十年六月十四日　　司法大臣清浦奎吾

○司法省令第十五號

大分地方裁判所管內大分區裁判所管轄大分郡石城川村大字內成、田代ヲ同區裁判所別府出張所ノ管轄ニ改メ登記管轄區域表中左ノ通改正ス

明治三十年六月十四日　　司法大臣清浦奎吾

大分	大分	別府	豐後	大分郡ノ内 大分町　西大分町　東大分村　毘府村　荏隈村　八幡村　由布川村 挾間村　谷村　瀧尾村　日岡村　賀茂村　石城川村大字[illegible] 東稙田村大字[illegible] 速見郡ノ内 別府町　濱脇町　石垣村 大分郡ノ内 石城川村大字[illegible]

○農商務省令第七號

明治二十七年二月本省令第五號營林主事補及森林監守特別任用規則中左ノ通リ削除改正ス

明治三十年六月十六日　　農商務大臣伯爵大隈重信

第二條中「滿四十年以下」ノ六字ヲ削ル

第十九條中前條ノ試驗合格證書ヲ有スル者ノ下三十六字ヲ「ハ營林主事補及森林監守ニ任用スルコトヲ得」ト改ム

第二十條但書ヲ「二十年未滿ノ者ハ此限リニ在ラス」ト改ム

〔參照〕

農商務省令第五號營林主事補及森林監守特別任用規則（明治二十七年二月十二日）抄錄

第二條　年齡滿二十年以上滿四十年以下ノ男子ニシテ身體健全ナルモノハ前條ノ試驗ヲ受クルコトヲ得但左ノ諸項ノ一ニ該當スルモノハ此限ニアラス

一　重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此限ニアラス

二　定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

三　破產者ク[illegible]ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

第十九條　前條ノ試驗合格證書ヲ有スル者ノ内ヨリ營林大林區署ノ需用ニ應シ營林主事補又ハ森林監守ニ任用スルモノトス

但試驗合格證書有效ノ年限ハ其日附ヨリ滿五年トス

第二十條　左ニ掲クル者ハ試驗ヲ要セス營林主事補及森林監守ニ任用スルコトヲ得但第一項乃至第三項ニ該當スルモノハ滿四十年以上ノ者ハ此限リニアラス

一　前ニ判任文官ヲ勤メタル者

二　陸軍滿期ノ下士及陸軍滿期ノ上等兵ニシテ下士適任證書ヲ有スル者

三　滿二年以上巡査又ハ看守ヲ勤續セシ者

四　滿二年以上府縣立尋常師範學校尋常中學校公立小學校ノ教員ヲ勤續セシ者

五　林務ニ關スル各官廳ノ雇員トナリ滿二年以上勤續セシ者

○陸軍省令第十六號

在鄕陸軍軍人及補充兵ニシテ寄留地ヨリ直ニ召集ニ應セントスル者ハ准士官以上ニ在テハ師團長ニ下士以下ニ在テハ聯隊區司令官又ハ營備隊司令官ニ願出テ許可ヲ請クヘシ

前項ニ關スル取扱ハ師團長之ヲ定ム

明治三十年六月十七日　　陸軍大臣子爵高島鞆之助

○拓殖務省令第七號

本年勅令第百五十八號北海道區制ハ明治三十年十月一日ヨリ同勅令第百五十九號北海道一級町村制ハ明治三十一年一月一日ヨリ施行ス

但シ區制及一級町村制施行ノ地ハ追テ之ヲ指定ス

明治三十年六月十七日　　拓殖務大臣子爵高島鞆之助

○陸軍省令第十七號

明治二十七年陸軍省令第四號左ノ通改正ス

明治三十年六月十九日　　陸軍大臣子爵高島鞆之助

工事請負ス北海道及臺灣ニ關スル工事ハ除ク競爭ニ加ハラントスルモノハ會計規則第六十九條ニ掲クル事項ノ外

左ノ資格ヲ備フルモノタルヘシ

第一條　工事ヲ請負ハントスル者ハ一箇年ニ付左ニ區分スル金額ノ直接國稅ヲ二箇年間引續キ納ムル者ニシテ其五以下ニ在テハ尙ホ造家土木各其專門學士ヲシテ當該工事ヲ擔當セシムル者但砲臺建築工事ニ在テハ契約擔任者ニ於テ特ニ示シタルモノヽ外技術者ヲ要セス

其一　工事一口ノ金額壹萬圓以上貳萬圓未滿ノ請負ニ在リテハ參圓以上ヲ納ムル者

其二　同貳萬圓以上參萬圓未滿ノ請負ニ在リテハ五圓以上ヲ納ムル者

其三　同參萬圓以上四萬圓未滿ノ請負ニ在リテハ七圓以上ヲ納ムル者

其四　同四萬圓以上五萬圓未滿ノ請負ニ在リテハ拾圓以上ヲ納ムル者

其五　同五萬圓以上六萬圓未滿ノ請負ニ在リテハ拾五圓以上ヲ納ムル者

其六　同六萬圓以上七萬圓未滿ノ請負ニ在リテハ貳拾圓以上ヲ納ムル者

其七　同七萬圓以上八萬圓未滿ノ請負ニ在リテハ貳拾五圓以上ヲ納ムル者

其八　同八萬圓以上九萬圓未滿ノ請負ニ在リテハ參拾圓以上ヲ納ムル者

其九　同九萬圓以上拾萬圓未滿ノ請負ニ在リテハ參拾五圓以上ヲ納ムル者

其十　同拾萬圓以上ノ請負ニ在リテハ四拾圓以上ヲ納ムル者

合名會社ニ在リテハ其社員ノ直接國稅ヲ併セテ其一乃至其十ノ例ニ依ル

合資會社株式會社ニ在リテハ直接國稅ニ換フルニ資本金ヲ以テシ其一ニ在リテハ壹萬圓以上其二ニ在リテハ貳萬圓以上其三ニ在リテハ四萬圓以上其四ニ在リテハ四萬圓以上其五ニ在リテハ五萬圓以上其六ニ在リテハ六萬圓以上其七ニ在リテハ七萬圓以上其八ニ在リテハ八萬圓以上其九ニ在リテハ九萬圓以上其十ニ在リテハ拾萬圓以上ノ拂込ヲ終ヘタルモノ

第二條　砲臺建築工事ニ於テハ第一條ノ其一乃至其十ニ揭クルモノヽ外除積土工事石材切出及其運搬放捨ニ關スル競爭入札者ハ入札前契約擔任者ニ於テ定ムル所ノ職工人夫及船舶ノ員數ヲ豫

定時日限內ニ準備シ得ルノ確證アルモノ

第三條　地方ノ狀況ニ依リ契約擔任者ニ於テ第一條ノ其一乃至其十ニ依リ難シト認ムルトキハ其具申ニ依リ資格ヲ輕減スルコトアルヘシ

附　則

第四條　第一條中工事擔當技術者ニ係ル事項ハ當分ノ內之ヲ施行セス

〔參照〕

明治二十七年三月三十日陸軍省令第四號ハ工事請負ノ競爭ニ加ラントスル者ニ要スル資格ノ件ナリ

遞信大臣子爵野村　靖

○遞信省令第十二號

船舶檢査規程左ノ通定ム

明治三十年六月十九日

船舶檢査規程

第一章　總則

第一條　此ノ規程中鐵船ニ關スル規定ハ鋼船ニモ之ヲ適用ス

木鐵交造船ノ木部ニハ木船ニ關スル規定、其ノ鐵部ニハ鐵船ニ關スル規定ヲ準用ス

日本形西洋形ヲ折衷シテ構造シタル船舶ニハ其ノ構造部分ニ依リ西洋形船若ハ日本形船ニ關スル規定ヲ準用ス

第二條　此ノ規程ニ於テ旅客汽船ト稱スルハ十二人以上ノ旅客定員ヲ有スル汽船ヲ謂フ

第三條　此ノ規程ニ於テ特別檢査ト稱スルハ船舶ヲ日本船舶トシテ初テ航行ノ用ニ供スルトキ若ハ爾後船舶ノ狀況ニ依リ三年乃至五年每ニ一回執行スルモノ、定期檢査ト稱スルハ初テ船舶ノ航行期間ヲ定ムルトキ及航行期間滿了ノトキ若ハ船舶檢査法施行細則第二十七條ノ申請アリタルトキ執行スルモノ又臨時檢査ト稱スルハ船舶檢査法施行細則第二十八條若ハ第二十九條ノ屆

出又ハ其ノ他ノ原因ニ依リ檢査官廳ニ於テ必要ト認ムルトキハ執行スルモノヲ謂フ

第四條　第二回以後ノ特別檢査ハ檢査官吏ニ於テ第三條ニ依リ豫メ期限ヲ定メテ船舶所有者若ハ船舶借用者ニ通知シ該期限内ニ於テ船舶所有者若ハ船舶借用者ノ便宜ナルトキ之ヲ執行ス

第五條　臨時檢査ニ於テ特別檢査ノ手續ヲ執行シタルトキハ其ノ檢査ヲ特別檢査トシ又定期檢査ノ手續ヲ執行シタルトキハ其ノ檢査ヲ定期檢査トスルコトヲ得

第六條　特別檢査ハ船舶ヲ入渠若ハ上架セシメテ之ヲ執行ス

進水後又ハ前回入渠若ハ上架後一年ヲ經過セサル船舶ニ在テハ檢査官吏ノ見込ニ依リ前項ノ入渠若ハ上架ヲ猶豫スルコトヲ得

第七條　第二回以後ノ特別檢査ニ於テハ船體、汽機及汽罐ハ各時ヲ異ニシテ之ヲ檢査スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ汽罐ノ檢査ニハ船舶ヲ入渠若ハ上架セシムルニ及ハス

第八條　定期檢査及臨時檢査ハ船舶碇泊中ニ之ヲ執行ス但シ檢査官吏ノ見込ニ依リ其ノ入渠若ハ上架ヲ命スルコトヲ得

第九條　檢査官吏ハ檢査上必要ト認ムルトキハ船舶ノ試運轉ヲ命スルコトヲ得

第十條　檢査官吏ハ船舶ノ大小、年齡及現狀ニ依リ第十三條第一號第二號第三號及第五號、第十四條、第十五條、第二十四條第三項、第四十條、第七十四條、第七十五條、第八十二條第一號第二號及第三號竝第八十三條ニ規定スル檢査方法ヲ變更若ハ增減スルコトヲ得

第十一條　檢査官吏ハ此ノ規程ニ規定セサルモノニ付テハ航行ノ安全ヲ目的トシ船體、機關及屬具ノ適否ヲ認定ス

第十二條　水壓試驗ノ執行ハ檢査官吏ノ適當ト認ムル證明書ヲ有スルモノニ限リ之ヲ省略スルコトヲ得

第二章　西洋形船船體部檢査

第一節　檢査準備

第十三條　碇泊シタル船舶ノ定期檢査ニ於テハ左ノ準備ヲ爲スヘシ

一　船體ノ内外適宜ノ場所ニ足場ヲ設クルコト

二　石炭及荷足ヲ取出シ船體ニ固著セサル物品ハ成ルヘク取片付ケ又淦水道覆板ハ悉ク取除ケ船體ノ内外部トモ總テ掃除スルコト

三　二重底及水艙ハ出入口ヲ開キ其ノ水ヲ排出シ内部ヲ掃除シ檢閲ニ支障ナカラシムルコト

四　船體屬具ノ中取外サヽレハ檢査シ得サルモノハ之ヲ取外シ手用淦水喞筒、手用消防喞筒及操舵具等ハ所屬具ヲ取揃ヘ置キ錨鎖、大索、帆類、船燈、信號器、救命具其ノ他航海ノ要具ハ總テ適宜ノ場所ニ排列シ置クコト

五　端艇ハ所屬具ヲ備ヘ水上ニ浮ヘ置クコト

第十四條　入渠若ハ上架シタル船舶ノ定期檢査ニ於テハ第十三條ニ掲クル準備ノ外鐵船ハ船底外部ノ塗料ヲ掻落シ木船及木鐵交造船ハ船底包板ノ幾分ヲ剝去シ外板ノ現狀、塡隙及固著釘ヲ檢査スルニ支障ナカラシムヘシ

第十五條　特別檢査ニ於テハ第十三條及第十四條ニ掲クル外左ノ準備ヲ爲スヘシ

一　肋骨及外板内面ノ現狀ヲ檢スル爲メ内張板ノ幾分ヲ取離スコト

二　梁端及梁上側板ヲ檢スル爲メ甲板ノ幾分ヲ取離スコト

三　鐵船ニ於テハ第一號及第二號ニ掲クル外船舶ノ年齡及現狀ニ依リ船底其ノ他ニ塗リタル「セメント」ノ幾分ヲ取離シ且外板、肋骨、隔壁、二重底ノ内底板其ノ他要部ニ於ケル鐵板ノ厚ヲ檢スル爲メ小孔ヲ鑿ツコト

四　木船ニ於テハ第一號及第二號ニ掲クル外船底包板及毛紙ノ全部又ハ幾分ヲ剝去シ船骨ノ要

部ヲ檢スル爲メ外板ノ幾分ヲ取離シ且固著釘ノ現狀ヲ檢スル爲メ其ノ若干ヲ拔取ルコト

第十六條　臨時檢査ニ於テハ檢査官吏ノ指揮ニ從ヒ必要ナル準備ヲ爲スヘシ

第二節　船體檢査

第十七條　碇泊シタル船舶ノ定期檢査ニ於テ檢査スヘキ要部ハ左ノ如シ

諸內龍骨、縱通材、船首及船尾肘材、肋骨、梁、梁受材、梁歷材、梁曲材、梁柱、隔壁、支水戸、支水瓣、淦水道、汽機及汽罐ノ臺、石炭庫、船底「セメント」、車軸隧道、船尾管上面甲板、二重底、甲板塡隙、艙口、載貨門、舷窓、天窓、以上諸部ノ固著方及釘

第十八條　入渠若ハ上架シタル船舶ノ定期檢査ニ於テハ第十七條ニ揭クルモノヽ外左ノ要部ヲ檢査スルモノトス

龍骨、船首材、船尾骨材、龍骨翼板、其ノ他外板、塡隙、船底外部ニ通スル諸孔、瓣蓋、芥除、舵、以上諸部ノ固著方及釘

第十九條　特別檢査ニ於テハ第十七條及第十八條ニ揭クルモノヽ外船骨、外板、甲板等ノ內定期檢査ニ於テ檢査セサル部分ヲ檢査スルモノトス

第二十條　鐵船及木鐵交造船ハ船ノ中央部ニ於テハ梁每ニ、首尾ニ於テハ其ノ現狀ニ依リ相當ノ間隔ニ梁柱ヲ設クヘシ

木船ハ船ノ中央部ニ於テハ梁一本置ニ、首尾ニ於テハ其ノ現狀ニ依リ相當ノ間隔ニ梁柱ヲ設クヘシ

前二項ニ揭クル梁柱ノ外甲板室、斜檣、操舵機、揚錨機及揚貨機等ヲ支フル梁其ノ他必要ノ箇所ニハ梁柱ヲ增設スヘシ

上層梁ニ梁柱ヲ設クルトキハ其ノ下層ノ梁ニモ亦之ヲ設クヘシ

第二十一條　木製汽船ハ機關室ノ前後ニ隔壁ヲ設ケ登簿噸數二百噸以上ナルトキハ其ノ隔壁及石

炭庫ノ圍壁ヲ鐵製トスヘシ

前項ノ隔壁ハ正甲板ニ止ムルモ妨ナシ

第二十二條　汽罐ニ接近シタル隔壁、石炭庫ノ圍壁及船體ノ部分木製ニシテ汽罐トノ距離一尺未滿ナルトキハ之ニ毛紙ヲ敷キ鉛板、鐵板若ハ亞鉛板ヲ張リ又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ燃焦ノ豫防ヲ爲スヘシ但シ其ノ隔壁其ノ他ノ部分ニ二寸以上ヲ隔テヽ鐵板ヲ張リタルトキハ毛紙ヲ敷クヲ要セス

第二十三條　鐵船及木鐵交造船ノ隔壁ノ數及構造ハ造船規程第二十章ノ規定ニ準スヘシ但シ船舶ノ構造ニ依リ隔壁ヲ該規程ニ定ムル高マテ達セシムルヲ得サルトキハ檢査官吏ニ於テ適當ト認ムル他ノ補充方法ヲ用フルモ妨ナシ

此ノ規程施行以前ノ製造ニ係ル木鐵交造船ニ限リ隔壁ハ正甲板ニ止メ且機關室ノ前後ニ設クルモノヽ外其ノ數ヲ減スルモ妨ナシ

第二十四條　二重底ノ內底板及水艙ノ頂板ニハ密閉シ得ヘキ出入口ヲ設ケ艙內ニ於ケル內底板ニハ厚二寸以上ノ內張板ヲ取附クヘシ

艙內ニ貨物積載兼用ノ水艙ヲ設クルトキハ其ノ艙口ノ覆蓋ヲ水密ニ裝置シ得ヘキ構造トスヘシ」

定期檢査及特別檢査ニ於テハ二重底及水艙ノ現狀ヲ檢査シ必要ト認ムルトキハ相當水高壓力ヲ以テ其ノ水密ヲ試驗スヘシ

第二十五條　艙及機關室ニハ淦水喞筒及測水管ヲ設ケ喞筒管ノ端ニハ芥除ヲ設置スヘシ但シ登簿噸數二百噸未滿ノ木船ニ限リ每艙ニ設クルノ必要ナキトキハ各艙ヲ通シテ一箇ノ淦水喞筒ヲ設クルモ妨ナシ

手用淦水喞筒ハ最大喫水線以上ノ甲板ニ於テ使用シ得ヘキ樣裝置シ該喞筒ノ上瓣、下瓣ハ各豫備ヲ備フヘシ

第二十六條　二重底及水艙ニハ區畫室毎ニ蒸氣喞筒ノ吸水管及排氣管ヲ導クヘシ

船首隔壁ノ前部及船尾隔壁ノ後部ヲ水艙トシテ使用セサルトキハ船首隔壁ノ前部ニハ手用淦水喞筒ヲ設ケ船尾隔壁ニハ支水瓣ヲ設ケテ船尾隔壁後部ノ淦水ヲ車軸隧道ニ導クカ又ハ之ヲ他ニ排出スルノ裝置ヲ爲スヘシ

水密構造ノ車軸隧道ニハ淦水溜ヲ設ケ之ニ蒸氣喞筒ノ吸水管ヲ導クヘシ

第二十七條　甲板間ニ於ケル機關室ノ周圍ニハ上甲板迄圍壁ヲ設クヘシ

前項ノ圍壁ハ鐵船ニ於テハ鐵製トシ又木船ニ於テ木製ナルトキハ少クモ其ノ高二尺迄ハ成ルヘク之ヲ水密ニ構造スヘシ

第二十八條　正甲板及上甲板ニ設クル艙口ノ緣材ハ其ノ高甲板上面ヨリ沿海航船ニ於テハ五寸以上、近海航船及遠洋航船ニ於テハ七寸以上トシ又艙口ニハ堅牢ナル覆蓋ヲ備ヘ且之ヲ堅固ニ密閉シ得ヘキ樣二重ノ覆布及適當ノ締具ヲ備フヘシ

第二十九條　載貨門ノ周圍ニハ適當ノ補强構造ヲ爲シ其ノ戸ハ堅牢ニ作リ適當ノ締具ヲ備ヘ之ヲ閉鎖スルトキハ水密ナル樣取附クヘシ

第三十條　旅客室及乘組員常用室ニハ明取リ及空氣流通ノ爲メ相當ノ窓若ハ空氣筒ヲ設クヘシ

沿海航船以上ノ舷窓ニハ圓形水密ニシテ開閉シ得ヘキ堅牢ノ硝子戸ヲ用ヒ且波浪ヲ受クヘキ舷窓ニハ堅牢ノ覆蓋ヲ備フヘシ但シ此ノ規程施行以前ノ製造ニ係ル船舶ニ限リ角形舷窓ヲ備フルモ其ノ構造水密ナルトキハ之ヲ改造スルヲ要セス

天窓及空氣筒ハ甲板ヨリ適當ノ高ニ造リ其ノ緣材ノ高ハ艙口緣材ノ高ニ準シ風濤ノ爲メ破損セサル樣堅牢ニ固著シ之ニ覆布ヲ備フヘシ

第三十一條　上甲板ニハ適宜ノ間隔ニ排水孔ヲ設ケ且閉塞舷墻ヲ備フルトキハ其ノ舷墻ニ適當ノ排水口ヲ設クヘシ

正甲板以下ノ甲板ニハ適當ノ排水管ヲ設ケ之ヲ淦水道ニ導クヘシ若シ之ヲ船外ニ通スルトキハ其ノ管口ニ適宜ノ支水戸若ハ螺旋蓋ヲ設クヘシ

第三十二條　旅客汽船ノ舷墻及柵欄ハ船舶ノ大小ニ應シ近海航船以上ニ於テハ二尺五寸以上、沿海航船以下ニ於テハ適當ノ高トシ之ヲ堅牢ニ取附クヘシ

第三十三條　旅客汽船ニ於テハ旅客定員及乘組員ヲ合セ人員大約五千人ニ付一箇ノ割合ヲ以テ便所ヲ設クヘシ但シ人員三百人以上ナルトキハ檢査官吏ニ於テ其ノ割合ヲ斟酌スルコトヲ得

上等室用若ハ乘組員用ノ便所ヲ區別シテ設クルトキハ上等室定員若ハ乘組員ヲ除キ其ノ殘餘ノ人員ニ對シ前項ノ割合ヲ以テ之ヲ設クヘシ

第三十四條　舵ハ堅牢ナル蝶鉸ヲ以テ附著セシメ近海航船以上ノ船舶ニ於テハ蝶鉸三組以上ヲ備ヘ其ノ各距離五尺五寸以內ナルヲ要ス但シ總噸數二百噸未滿ナルトキハ蝶鉸ノ數ヲ二組ト爲スコトヲ得

下端ノ舵架ハ蝶鉸ノ數ニ加算スルモノトス

特別檢査ノトキ及檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ舵ヲ取外サシメ之ヲ檢査スヘシ

第三節　屬具

第三十五條　船體部ニ於テ主トシテ檢査スヘキ屬具ハ左ノ如シ

檣、帆架其ノ他ノ圓材、纜、裝索具及金具、帆、錨、錨鎖、揚錨機、起錨機、錨鎖管、大索、操舵具、手用淦水喞筒、手用消防喞筒及附屬品、端艇、救命具、船燈、信號器、測量器

第三十六條　檣、帆架其ノ他ノ圓材及索具等ハ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ上檣、帆架等ヲ下シ下檣及斜檣ノ楔ヲ拔取ラシメ其ノ現狀ヲ檢査スヘシ

第三十七條　船舶ニハ適當ノ帆二揃ヲ備フヘシ但シ檣ヲ備ヘサル船舶ニ於テハ此ノ限ニアラス

帆船ニ於テハ前項ノ外尙ホ左ノ豫備帆ヲ備フヘシ

横帆ヲ備ヘサル船｛「フオール、ステースル」一箇「メインスル」一箇
横帆ヲ備フル船｛「フオースル」又ハ「メインスル」一箇「フオール、ステースル」一箇「トップスル」一箇

第三十八條　錨、錨鎖及大索等ハ左ノ規定ニ依リ第一號表及第二號表ニ照ラシ之ヲ備フヘシ

一　木船、木鐵交造船及重甲板鐵船ニ於テハ上甲板下ノ噸數ヲ以テ、輕甲板又ハ覆甲板ヲ備フル鐵船ニ於テハ該甲板下噸數ノ五分ノ四ヲ以テ表中ノ噸數トス

二　大錨ハ其ノ合量表中ノ合量ヨリ減少セサル限リハ二箇ヲ備フヘキ船舶ニ於テハ内一箇ハ七分五厘以内又三箇ヲ備フヘキ船舶ニ於テハ内一箇ハ一割五分以内、一箇ハ七分五厘以内表中規定ノ單量ヨリ少量ナルモ妨ナシ

三　汽船ハ沿海航船以下、帆船ハ近海航船以下ニ限リ日本形錨ヲ代用スルモ妨ナシ

四　錨ハ常時使用セサルモノト雖モ甲板上ニ備置クヘシ

五　第一號表及第二號表ニ於テ中錨ノ鎖及鋼索ハ便宜其ノ一ヲ備ヘ或ハ相當ノ大サノ麻索、棕梠索、「マニラ」索ヲ以テ之ニ代用シ又同表中挽索ノ麻索及鋼索モ便宜其ノ一ヲ備ヘ或ハ相當ノ大サノ「マニラ」索、棕梠索ヲ以テ之ニ代用スルモ妨ナシ

六　第一號表及第二號表ニ定ムル錨數、錨量竝錨鎖、大索等ノ徑、周及長ハ數ニ依リ得タルモノト噸數ニ依リ得タルモノト差異アルトキハ其ノ小ナルモノニ依ルコトヲ得

第三十九條　船舶ニハ常用操舵具ノ外豫備操舵索一揃ヲ備ヘ又近海航船以上ノ船舶ニハ舵ノ後部ニ應急舵鎖ヲ備ヘ且操舵汽機ヲ備フル船舶ニハ手用操舵具ヲ備フヘシ

第四十條　揚錨機、起錨機及操舵具ハ特別檢査ノトキ及檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ之ヲ取外スヘシ

第四十一條　手用溢水喞筒ハ檢査毎ニ其ノ屬具ヲ取附ケ且檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ其ノ試驗ヲ行フヘシ

第四十二條　登簿噸數五十噸以上ノ旅客汽船ニハ蒸氣喞筒ノ送水管ヲ上甲板ニ導キ船内各部ニ達スヘキ消防用布管ヲ備ヘ尚ホ登簿噸數二百噸以上ノ旅客汽船ニハ消防用移動喞筒一組以上ヲ備フヘシ

消防用送水管、喞筒及布管ハ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ其ノ試驗ヲ行フヘシ

第四十三條　旅客汽船ニハ其ノ噸數ニ應シ左ノ規定ニ依リ第三號表ニ照ラシ端艇ヲ備ヘ且其ノ揚卸ニ適當ナル端艇鈎具ヲ備フヘシ但シ平水航船及航行豫定時間六時間以内ノ沿海航船ハ此ノ限ニアラス

一　端艇ノ容積ハ外部ニ於テ長、幅ヲ測リ長ノ中央ニ於テ内部ノ深ヲ測リ之ヲ相乘シタルモノノ十分ノ六トス但シ救命艇ニ於テハ空氣箱ノ容積ヲ除クニ及ハス

二　一人ノ容積十立方尺ノ割合ヲ以テ旅客定員及乘組總員數ヲ搭載シ得ヘキ端艇ノ數及容積ヲ備フルトキハ第三號表ノ艇數及容積ニ達セサルモ其ノ不足ヲ補充スルヲ要セス

三　普通端艇ノ容積五十立方尺未滿ナルトキ又ハ救命艇ノ容積百立方尺未滿ナルトキハ之ヲ表中ノ容積ニ算入セサルモノトス

四　普通端艇ハ傳馬船其ノ他ノ艀舟ニシテ其ノ效用西洋形端艇ニ劣ラサルモノヲ以テ之ニ代用スルモ妨ナシ

五　傳馬船其ノ他艀舟ノ容積ハ西洋形端艇ニ同シク其ノ長、幅、深ヲ測リ之ヲ相乘シタルモノヽ十分ノ七トス

六　端艇ニハ必要ナル附屬品ノ外豫備トシテ櫂及櫂架各二箇以上、放水口ノ栓、淦杓、鉤竿各一箇

以上ヲ備ヘ又救命艇ニハ羅針盤斧及水箱各二箇以上ヲ備フヘシ

第四十四條　救命艇ノ構造ハ左ノ規定ニ依ルヘシ

一　艇尾ハ尖形ナルヲ要ス

二　救命艇ニハ其ノ容積十立方尺ニ付少クモ一立方尺ノ割合ヲ以テ水密ナル空氣箱ヲ備ヘ若シ空氣箱ノ容積不足ナルトキハ「コルク」其ノ他ノ浮游物ヲ入レタル完全ノ浮袋ヲ以テ其ノ不足ヲ補フヘシ

三　救命艇ノ構造ニハ亞鉛材ヲ用フヘカラス又鐵製ノ艇ニハ銅製空氣箱ヲ用フヘカラス

四　空氣箱ハ艇首艇尾又ハ兩側ニ設置シ其ノ覆板ハ銅製若ハ眞鍮製ノ螺釘ヲ以テ取附クヘシ

五　救命艇ノ周圍ニハ救命索ヲ備フヘシ

第四十五條　第三號表中八十噸以下ノ船舶ニ於テハ端艇ノ代用トシテ、百五十噸以下ノ船舶ニ於テハ其ノ端艇中一箇ノ代用トシテ又定數ノ端艇ヲ備フルモ其ノ容積ノ不足二割以下ナルトキハ其ノ補足トシテ救命浮環若ハ救命浮帶ヲ用フルコトヲ得但シ其ノ割合ハ端艇ノ容積十立方尺若ハ十立方尺未滿ニ付救命浮環若ハ救命浮帶一箇トス

端艇ハ第三號表ニ掲クル容積ヲ有スルトキハ該表中艇數十箇以上ヲ要スル船舶ニ在テハ其ノ定數ヨリ二箇以內、六箇以上ヲ要スル船舶ニ在テハ二箇ヲ減シ又該表中二百噸以下ノ船舶ニ在テハ表中ノ容積ヲ有スル端艇一箇ヲ以テ二箇ニ代用スルモ妨ナシ

第四十六條　帆船及旅客汽船ニ於テハ乘組員一人ニ對シ十立方尺ノ割合ヲ以テ端艇ヲ備フヘシ但シ其ノ二艘ハ本船ノ中錨ヲ載セ得ヘキモノナルヲ要ス

第四十七條　救命具、船燈、信號器、測量器、國旗、書册、消防用手桶及斧ハ船舶ノ種類ニ依リ第四號表ニ照シ之ヲ備フヘシ

第四十八條　救命浮環ハ船名ヲ記載シ上甲板ニ於テ衆人ノ認メ易ク且投入ニ便宜ノ場所ニ配置スヘシ

第四十九條　第四號表ニ掲クル救命浮帶及救命焰ハ操舵室其ノ他何時ニテモ取出シ易キ場所ニ之ヲ備置クヘシ

旅客汽船ニ於テハ第四號表ニ掲クル救命浮環及救命浮帶ノ外遠洋航船ニ於テハ上等、中等旅客定員、近海航船ニ於テハ上等旅客定員ニ等シキ救命浮帶若ハ救命浮環ヲ增備シ之ヲ該客室每ニ配置スヘシ

第五十條　舷燈隔板ハ燈心ヨリ三尺以上前方ニ突出スヘキ長ニ作リ之ヲ船舷若ハ其ノ他ノ固定物ニ取附クヘシ

第五十一條　汽船ニハ前方ニ音響ノ妨ナキ適當ノ位置ニ汽笛若ハ汽角ヲ裝置スヘシ

第五十二條　海圖ハ沿海航船ニハ其ノ航路區域及區內港灣ノ分圖、近海航船ニハ日本全圖及航路海岸港灣ノ分圖、遠洋航船ニハ近海航船ニ要スル海圖ノ外航通外國ノ海岸港灣ノ分圖ヲ備ヘ又平水航船ニハ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキニ限リ其ノ航路ノ海圖ヲ備フヘシ

海圖ハ海軍水路部ノ最近刊行ニ係ルモノヲ使用スヘシ但シ最近ノ刊行ニアラサルモ改正ノ廉ヲ記入シタルモノ又ハ外國出版ノ海圖ニシテ最近ノ刊行ニ係ルモノハ之ヲ備フルモ妨ナシ

第五十三條　信號火器ハ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ其ノ發火ヲ試ムヘシ

第五十四條　沿海航船以上ノ船舶ニ於テハ旅客定員及乘組員ヲ合セ一人一日少クモ二升ノ割合ヲ以テ沿海航船ハ汽船ニ在テハ三日分、帆船ニ在テハ十日分、近海航船ハ汽船ニ在テハ十日分、帆船ニ在テハ三十日分、遠洋航船ハ汽船ニ在テハ三十日分、帆船ニ在テハ三月分ヨリ少ナカラサル飲用水ヲ貯藏スルニ適スヘキ水箱ヲ備フヘシ但シ蒸溜器ノ備アルトキ又ハ沿海航船ニシテ檢査官吏ニ於テ前記ノ水量ヲ貯藏スルノ必要ナシト認ムルトキハ該水箱ノ容積ヲ減スルコトヲ得

第四節　旅客室及乘組員常用室

第五十五條　旅客室ハ覆甲板ヲ除キ其ノ他ノ甲板上ニ於テ旅客ノ起臥動作ニ安全ナル場所ニ之ヲ設クヘシ

第五十六條　甲板間ノ距離遠洋航船ニ於テハ六尺以上、近海航船ニ於テハ五尺以上、沿海航船及平水航船ニ於テハ四尺五寸以上ナルニアラサレハ旅客室ヲ設クルコトヲ得ス但シ船尾ノ如キ斜曲ノ場所ニ設ケタル腰掛様ノ平棚ニシテ其ノ上面ヨリ甲板裏面迄ノ高三尺五寸以上ナルトキハ之ヲ客席ト爲スコトヲ得

第五十七條　上甲板上旅客室ノ高ハ遠洋航船ニ於テハ六尺以上、近海航船ニ於テハ四尺五寸以上、沿海航船ニ於テハ三尺五寸以上ナルヲ要ス

第五十八條　旅客室ノ高六尺以上ナルニアラサレハ客席ヲ二層トスルコトヲ得ス

第五十九條　雜居客室ノ長十二尺以上ニシテ其ノ出入口一邊ニノミ在ルトキハ其ノ出入口ヨリ該室ヲ貫キ幅一尺八寸以上ノ通路ヲ設クヘシ若シ之ヲ設ケサルトキハ全面積ノ六分ノ一ヲ通路ニ充ツヘシ

雜居客室二室以上鄰接シ其ノ出入口一室ノ一邊ニノミ在ルトキハ其ノ出入口ヨリ他室ニ達スル迄幅一尺八寸以上ノ通路ヲ設ケ又他室内ノ通路ハ前項ニ準スヘシ

第六十條　左ニ掲クル場所ハ客室ニ充ツルコトヲ得ス

外車汽船ノ車覆、船首隔壁ノ前方(船首隔壁ノ設ナキ船舶ニ於テハ正甲板上面ニ於テ船首材ノ内面ヨリ長最大船幅ノ二分ノ一ニ達スル迄ノ場所)幅若ハ長一尺八寸未滿ノ場所其ノ他檢査官吏ニ於テ旅客ノ起臥動作ニ不適當ト認ムル場所

機關室兩側ニ於テ一尺八寸以外ノ場所ニ客席ヲ設クルトキハ該室兩側一尺八寸迄ノ場所ヲ以テ客席ノ容積ニ算入スルモ妨ナシ

第六十一條　左ニ掲クル場所ハ客席ニ算入スヘカラス

通路、艙口ノ上面、艙口ノ周圍一尺八寸迄ノ場所、載貨門ノ前後各一尺二寸ノ所ヨリ其ノ幅ニテ艙口ノ周圍一尺八寸迄ノ場所、其ノ他檢査官吏ニ於テ客席ニ不適當ト認ムル場所

沿海航船又ハ平水航船ニシテ屋艙口ヲ開閉スルノ必要ナキモノ及湖川港内ヲ限リ航通スルモノハ艙口ノ上面周圍及載貨門ノ内側ヲ客席ニ算入スルモ妨ナシ

艙口ヨリ載貨門ニ至ル除去面積ヲ算スルニ當リ艙口ト載貨門ノ位置竝列セサルトキハ載貨門ノ中央ヨリ艙口ノ中央ニ至ル距離ト載貨門ノ幅ニ二尺四寸ヲ加ヘタルモノトヲ相乘シ其ノ積ヲ除去面積ト爲スヘシ

第六十二條　客席ニハ莚、疊其ノ他旅客ノ坐臥ニ適スヘキ敷物ヲ備フヘシ

第六十三條　甲板間機關室ノ前後ニ於ケル雜居客室ノ容積ハ每室其ノ前中後ノ三箇所ニ於テ上中下ノ幅ヲ測リ前後上下ノ幅ニ前後ノ中幅及中央上下ノ幅各四倍ト中央ノ中幅十六倍トヲ加ヘ之ヲ三十六ニテ除シ平均ノ幅ト之ニ長ヲ乘シ總面積トシ之ヨリ其ノ室内ニ於ケル蔽圍ノ場所ノ平均幅ニ長ヲ乘シタルモノヲ減シ其ノ殘リ面積ニ平均ノ高ヲ乘シタルモノトス

機關室ノ兩側甲板上其ノ他或ル一部ニ於ケル客室ノ容積ハ平均ノ幅ニ長高ヲ乘シ若シ其ノ室内ニ蔽圍ノ場所アルトキハ其ノ長、幅、高ヲ乘シタル積ヲ減シタルモノトス

船尾斜曲ナル場所ノ容積ヲ算スルニハ其ノ長(矢)幅(弦)ノ二分ノ一以下ノ所迄ハ本條第一項若ハ第二項ニ依リ算出シ其ノ後部ハ高ノ中央ニ於テ長ヲ測リ其ノ三分ノ二ニ其ノ場所ノ最大幅ト高トヲ乘シ其ノ容積トスヘシ

第六十四條　甲板間機關室ノ前後ニ於ケル雜居客室ノ面積ハ每室客席ニ充ツヘキ甲板又ハ棚ノ上面ニ於テ前中後三箇所ノ幅ヲ測リ前後ノ幅ニ中央ノ幅四倍ヲ加ヘ之ヲ六ニテ除シ平均ノ幅トシ之ニ長ヲ乘シ總面積トシ之ヨリ第六十一條ニ掲クル除去スヘキ場所ノ面積ヲ減シタルモノトス」

機關室ノ兩側、甲板上其ノ他或ル一部ノ客席ハ平均ノ幅ニ長ヲ乘シ前項ニ準シ通路等ノ面積ヲ

減シタルモノトス

船尾斜曲ナル場所ノ面積ヲ算スルニハ其ノ長(矢)幅(弦)ノ二分ノ一以上ノ所迄ハ本條第一項若ハ第二項ニ依リ算出シ其ノ後部ハ長ノ三分ノ二ニ最大幅ヲ乘シタルモノトス

第六十五條　旅客定員ヲ算出スルニハ第六十三條ニ依リ算出シタル旅客室容積及第六十四條ニ依リ算出シタル旅客室面積ヲ船舶ノ航路定限及客室ノ等級ニ應シ船舶檢査法施行細則第十九條ニ規定スル旅客定員一人分最少容積及面積ヲ以テ除去シ其ノ容積ト面積トニ依リ算出シタル員數ヲ比較シ其ノ少數ヲ以テ該室ノ旅客定員トスヘシ

第六十六條　沿海航船以上ノ船舶ニ於テ甲板間ニ旅客室ノ設アルトキハ天氣ノ如何ニ拘ラス何時ニテモ甲板上ニ出入シ得ヘキ昇降口ヲ設ケ之ニ階子ヲ備フヘシ

前項ノ階子ハ旅客定員五十人未滿ナルトキハ幅一尺八寸以上ノモノ一箇以上、五十人以上百人未滿ナルトキハ幅三尺以上ノモノ一箇以上若ハ幅一尺八寸以上ノモノ二箇以上ヲ備フヘシ但シ迴リ階子若ハ勾配高ク段面狹クシテ柵欄ニ依ラサレハ昇降シ難キモノハ其ノ幅三分ノ二ヲ以テ前記ノ割合ニ適合セシムルモノトス

第六十七條　水火夫等乘組員常用室ハ其ノ船舶ノ航路定限ニ應スル下等旅客室ニ準シ之ヲ設クヘシ但シ該常用室ハ之ヲ船首隔壁ノ前方ニ設クルコトヲ得

沿海航船若ハ平水航船ニシテ其ノ航路定限往復豫定時間二十四時間以內ノモノハ水火夫等乘組員總數二分ノ一ニ對スル迄積量ヲ減シ又十二時間以內ノモノハ檢査官吏ニ於テ差支ナシト認ムル迄尙ホ之ヲ減スルコトヲ得

第六十八條　別種旅客室ハ近海航路ヲ航行スルトキニ限リ艙內ニモ之ヲ設クルコトヲ得但シ其ノ艙口ノ數若ハ大サ不充分ニシテ別ニ空氣筒等ノ設ナク檢査官吏ニ於テ空氣ノ流通不充分ト認ムルトキハ衞生上適當ノ場所ヲ限リ客席ト爲サシムヘシ又荒天ノトキ艙口ヲ密閉スルノ必要アル

艙內ニハ之ヲ設クルコトヲ得ス

艙梁ヲ備フル船舶ニシテ其ノ艙梁上ニ甲板ヲ假設シ荷艙ト其ノ區域ヲ分チ檢査官吏ニ於テ旅客ノ搭載ニ適當ト認ムルトキハ遠洋航路ヲ航行スルトキト雖モ該甲板上ヲ別種旅客室トスルコトヲ得

第六十九條　艙內ニ別種旅客室ヲ設クルトキハ其ノ高ヲ五尺以上トシ艙梁若ハ假設シタル床梁又ハ貨物若ハ荷足ノ上ニ板及莚等ヲ敷クヘシ但シ衞生ニ害アリト認ムル貨物ノ上ハ客席トスルコトヲ得ス

第七十條　高三尺以上ノ閉塞舷墻ヲ有シ且完全ノ天幕ヲ備フル船舶ニシテ其ノ航行豫定時間二十四時間以內ナルトキハ上甲板ニ於テ適當ノ場所ヲ限リ別種旅客ヲ搭載スルコトヲ得

第七十一條　艙內別種旅客室ノ積量測度方法ハ通常旅客室ノ測度方法ニ據ルヘシ

第七十二條　甲板間又ハ上甲板ヲ別種旅客室ニ充テ仕出港ヨリ仕向港ニ直航スルトキハ艙口ノ上面周圍及載貨門ノ內側ヲ客席ノ面積ニ算入スルコトヲ得但シ其ノ艙口下ニ別種旅客室ヲ設クルトキハ載貨門ノ內側ノミヲ面積ニ算入スヘシ

第七十三條　上甲板ニ別種旅客ヲ搭載スルトキハ其ノ場所ノ形狀ニ從ヒ第六十四條ニ依リ面積ヲ算出シ之ヲ五ニテ除シ其ノ得數ヲ定員トスヘシ

第三章　日本形船檢査

第七十四條　定期檢査ニ於テハ左ノ準備ヲ爲スヘシ

一　水線上ノ包板及埋木ノ幾分ヲ取外スコト

二　艙內ヲ掃除シ取外シ得ヘキモノハ總テ之ヲ取外シ腰當梁ト二ノ間梁トノ中央部ニ積ミ置クコト但シ積石數千石以上ノ船舶ニ於テハ舷側內部ヲ檢スル爲メ兩側ノ素板ヲ足場ニ殘シ置クコト

三　檣、帆架、舵及傳馬船ヲ除クノ外屬具ハ檢ノ上ニ排列シ置クコト

四　舵ヲ引上ケ檣ヲ倒シ置クコト

第七十五條　特別檢査ニ於テハ第七十四條ニ掲クル外左ノ準備ヲ爲スヘシ

一　包板、外艦、外舳、除杙、校板、臺詰及埋木ノ幾分ヲ剝取リ腰當梁其ノ他一二ノ梁端ヲ拔出シ置クコト

二　檣ハ船體上ニ倒シ若ハ陸上ニ揚置クコト

三　各部ニ於テ若干ノ釘ヲ拔取リ置クコト

第七十六條　臨時檢査ニ於テハ檢査官吏ノ指揮ニ從ヒ必要ナル準備ヲ爲スヘシ

第七十七條　定期檢査ニ於テ檢査スヘキ要部及屬具ハ左ノ如シ

船體

航、加敷、內舳、外舳、戸建、中杙、重板、弦、弦押、矧付、腰當梁其他各種梁、筒、筒挾、檣座、步桁、櫓、碁板、除杙、投板、臺梁ノ外端外艦、千里

屬具

檣、桁、帆、舵、錨、錨索、檣索、淦水喞筒、消防具、傳馬船及附屬品、救命具、船燈、信號器、測量器

第七十八條　航ト加敷ノ接著、加敷ト中杙ノ接著、中杙ト重板根板ノ接著、內舳戸建ヘ杙板ノ接著、弦ニ於テ梁孔及其ノ梁端、除杙上部ノ矧付、大纜、見付矧、小間ノ寬、小間板ノ木口等ハ其ノ現狀ノ適否ヲ檢査スヘシ

第七十九條　航ト加敷及內舳、戸建ト杙板ノ接著釘ハ內部ニ於ケル折曲ケノ適否ヲ檢査スヘシ

第八十條　腰當梁ノ所及中杙大纜ノ所ニ於ケル加敷ト中杙ノ通リ釘錆衰シタルトキハ錆衰ノ程度ニ從ヒ一本置ニ其ノ半數ヲ打換ヘ若ハ悉ク打換フヘシ

弦ノ縫釘錆衰シタルトキ弦押ヲ取換ヘ其ノ縫釘ヲ打換フヘシ

第八十一條　救命具、船燈、信號器、測量器、國旗、書冊、消防用手桶及斧ハ第四號表ニ照シ之ヲ備フヘシ

第四章　機關部檢査

第一節　檢査準備

第八十二條　定期檢査ニ於テハ左ノ準備ヲ爲スヘシ

一　吸錫ノ彈環、滑瓣等ヲ取外シ排氣喞筒、循環喞筒、給水喞筒、淦水喞筒等ノ諸瓣ヲ取出シ冷汽器、蒸騰器等ヲ開キ置クコト又主軸ニ於テハ曲拐栓黃銅ヲ取外シ主軸受、中間軸受、進力受等ノ上半ヲ取外シ置クコト

二　機關室ノ淦水ヲ排除シ底部ヲ掃除シ泥箱ヲ開キ芥除ヲ床板上ニ取出シ各艙ノ芥除ヲ露出シ置クコト

三　正汽罐、副汽罐ハ水ヲ排除シ人孔其ノ他ノ諸孔ヲ開キ火床、火橋ヲ取出シ燃燒室、汽部、水部、汽兜、加熱器ヲ掃除シ安全瓣及正窒汽瓣ヲ取外シ置クコト

四　屬具ヲ適宜ノ場所ニ排列シ置クコト

第八十三條　特別檢査ニ於テハ第八十二條ニ掲クル外左ノ準備ヲ爲スヘシ

一　推進器ヲ取外シ螺旋軸ヲ拔取リ置キ瓣、嘴子ニシテ汽機汽罐ノ要部ニ屬シ若ハ水線以下ニ於テ船外ニ通スルモノヲ開放シ置クコト

二　汽管及正汽管ノ包被ヲ取除キ接續餌ヲ取外シ置キ機關室ヨリ各艙ニ通スル諸管ノ包被ヲ取除キ置クコト

第八十四條　臨時檢査ニ於テハ檢査官吏ノ指揮ニ從ヒ必要ナル準備ヲ爲スヘシ

第二節　汽機檢査

第八十五條　碇泊シタル船舶ノ定期檢査ニ於テ檢査スヘキ要部ハ左ノ如シ

汽筩、吸鍔、吸鍔銲、接續銲、導板、導沓、滑瓣、滑瓣鉤、動瓣機、排氣喞筒、循環喞筒、給水喞筒、淦水喞筒、冷汽器、蒸騰器、曲拐軸、中間軸、汽機室、軸受、進力受、管瓣、嘴子、泥箱、芥除、副喞筒、副汽機、操舵汽機、揚錨汽機

第八十六條　入渠若ハ上架シタル船舶ノ定期檢査若ハ特別檢査ニ於テハ第八十五條ニ掲クル外船尾管、螺旋軸、推進器及水線以下ニ於テ船外ニ通スル瓣、嘴子ヲ檢査スヘシ

第八十七條　汽筩ハ其ノ現狀ニ依リ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ造船規程第三百十二條ニ依リ水壓試驗ヲ執行スヘシ

第八十八條　冷汽器ハ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキ五呎以上ノ水高壓力ヲ以テ其ノ漏否ヲ檢査スヘシ

內部ヲ窺知シ能ハサル表面冷汽器ハ細管ノ幾部ヲ拔出サシメ之ヲ檢査スヘシ

第八十九條　遠洋航船ニ於テハ正給水喞筒及正淦水喞筒各二箇ヲ備ヘ其ノ一箇ヲ使用スルトキト雖モ他ノ一箇ヲ開放シ得ヘキ裝置ヲ爲スヘシ

第九十條　副喞筒ハ正給水喞筒ニ屬スルモノヽ、外別ニ給水管及制限瓣ヲ備ヘ汽罐ニ給水シ得ヘキ裝置ヲ爲スヘシ但シ小機關ニ於テハ手用喞筒ヲ以テ副喞筒ニ代用スルモ妨ナシ

第九十一條　近海航船以上ノ船舶ニ於テハ機關室ヨリ每艙ニ正淦水喞筒ノ吸水管ヲ通シ其ノ淦水ヲ排除シ得ヘキ裝置ヲ爲シ尙ホ副喞筒ノ吸水管ヲシテ之ニ連續セシムヘシ

第九十二條　近海航船以上ノ船舶ニ於テハ淦水注射器ヲ備ヘ其ノ瓣ハ機關室床板上ニテ開閉シ得ヘキ裝置ヲ爲スヘシ

第九十三條　新ニ裝置スル車軸ノ徑ハ造船規程第三百十九條乃至第三百二十二條ノ規定ニ依ルヘシ

第九十四條　最大喫水線以下及其ノ近傍ノ孔ニハ容易ニ開閉シ得ヘキ瓣又ハ嘴子ヲ備フヘシ

第三節　汽罐檢査

第九十五條　定期檢査及特別檢査ニ於テ檢査スヘキ要部ハ左ノ如シ

胴板、鏡板、火壺、燃燒室、汽兜、加熱器、支柱、支梁、焰管、各接合部、汽罐臺、驗汽器、瓣及嘴子

第九十六條　檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ機關包被ノ全部若ハ幾分ヲ取離シ又ハ汽罐ヲ移動スヘシ

小汽罐、加熱器、汽兜ニシテ狹隘ノ爲メ檢査スルコト能ハサルトキハ支柱焰管等ヲ適宜取除キ又人孔狹小ニシテ內部ヲ檢査スルコト能ハサルトキハ該孔ヲ改造スヘシ

第九十七條　汽罐各部ノ强力ハ造船規程第三百四十六條乃至第三百五十八條ニ依リ之ヲ算定シ檢査官吏ニ於テ汽罐ノ現狀ニ依リ必要ト認ムルトキハ二割以內最大汽壓ヲ減スルコトヲ得

第九十八條　汽壓制限ハ檢査官吏ニ於テ汽機及汽罐ノ現狀ニ依リ其ノ强力ノ最モ弱キモノヲ標準トシテ之ヲ定ム

第九十九條　人孔及泥孔ハ相當ノ緣環ヲ備フヘシ

第百條　汽罐ニハ硝子驗水器二箇以上、驗水嘴子三箇以上及驗汽器一箇以上ヲ備ヘ又兩口汽罐ニハ之ヲ其ノ兩面ニ備フヘシ

第百一條　放水瓣若ハ放水嘴子ハ罐體ニ取附クルモノヽ外船體外板ニモ亦之ヲ取附クヘシ

第百二條　鍛合シタル鋼板ハ伸張ヲ受クル場所ニ使用スヘカラス但シ此ノ規程施行以前ヨリ使用シタルモノハ此ノ限ニアラス

第百三條　鍛合シタル鋼製支柱ハ使用スヘカラス

第百四條　驗汽器ハ檢査每ニ驗壓原器ニ照ラシ其ノ適否ヲ檢査スヘシ

第百五條　特別檢査ニ於テハ新ニ使用スル汽罐ハ造船規程第三百五十九條ニ依リ既ニ使用シタル

汽罐ハ每平方吋ノ最大汽壓九十磅以上ナルトキハ之ニ四十五ヲ加ヘタルモノ、九十磅未滿ナルトキハ其ノ一倍半ノ水壓試驗ヲ執行スヘシ

定期檢査又ハ臨時檢査ニ於テモ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ前項ニ依リ汽罐ノ水壓試驗ヲ執行スヘシ

第百六條　汽罐ニハ徑二吋以上ノ安全瓣二箇以上ヲ備フヘシ但シ火床ノ容積十四平方呎ヲ超エサルモノニハ安全瓣一箇ヲ備フルモ妨ナシ

第百七條　安全瓣ノ發條ハ充分ノ旋回數ヲ有シ其ノ縮小ハ汽壓制限ニ對シ少クモ瓣徑ノ四分ノ一ナラシムヘシ但シ第百十二條ニ掲クル汽壓ノ昇騰ニシテ汽壓制限ノ十分ノ一ヲ超過セサルトキハ此ノ限ニアラス

第百八條　安全瓣ニハ汽機室ヨリ開閉シ得ル揚瓣裝置ヲ備ヘ且瓣ノ昇降距離ハ瓣徑ノ四分ノ一ヨリ少ナカルヘカラス

安全瓣ハ其ノ銲ニ接續スヘシ

第百九條　安全瓣ニハ封鎖スヘキ瓣ノ面積ヨリ少ナカラサル排汽管及適宜ノ排水管ヲ備フヘシ

第百十條　安全瓣ハ特別檢査及定期檢査ニ於テハ之ヲ開放シ瓣及發條等ヲ檢査スヘシ

第百十一條　封鎖スヘキ安全瓣ノ面積ハ第五號表ノ割合ヨリ少ナカルヘカラス

安全瓣一箇ノ面積第五號表ノ割合以上ナルトキハ一箇ヲ封鎖シ若シ其ノ割合ニ滿タサルトキハ二箇以上ヲ封鎖スヘシ

汽壓制限ヲ減少シタル爲メ安全瓣ノ面積第五號表ノ割合ニ滿タサルトキハ第百十二條ニ掲クル汽壓ノ昇騰汽壓制限ヨリ其ノ十分ノ一ヲ超過セサルトキニ限リ其ノ安全瓣ヲ改造スルニ及ハス

第百十二條　發條安全瓣ノ適否ハ汽力ヲ以テ定ムヘシ若シ給水瓣及窒汽瓣ヲ閉チ少ナクモ二十分間充分ニ焚火シ安全瓣ヨリ蒸氣溢出スルモ汽壓ノ昇騰尙ホ汽壓制限ノ十分ノ一ヲ超過スルトキハ瓣若ハ發條ヲ改造スヘシ

第百十三條　加熱器ニハ別ニ安全瓣ヲ備フヘシ

第百十四條　汽罐各部ニ屬スル汽管及水管ハ罐板ト接合スル部ニ於テ瓣若ハ嘴子ヲ備フヘシ

第百十五條　正汽管ニ於テ伸縮ノ餘裕ナキトキハ膨脹接合其ノ他ノ裝置ヲ爲スヘシ

第百十六條　銅製汽管ハ造船規程第三百七十六條ニ依リ其ノ强力ヲ算定スヘシ

第百十七條　正汽管及給水管ハ之ヲ新製シタルトキ及特別檢査其ノ他檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ汽壓制限二倍ノ水壓試驗ヲ執行スヘシ

第百十八條　屬具ハ第六號表ニ依リ之ヲ備フヘシ

附則

第百十九條　此ノ規程ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

第百二十條　明治二十九年遞信省訓令第二號西洋形船舶檢査手續ハ此ノ規程施行ノ日ヨリ廢止ス

第一號表

汽船錨錨鎖及大索表

噸數	錨數 大錨	錨數 中錨	錨數 小錨	錨數	錨重 大錨 單重	錨重 大錨 合重	錨重 中錨 單重	錨重 中錨 合重	錨重 小錨 單重	錨重 小錨 合重	大錨鎖 長徑	大錨鎖 長徑	中錨鎖 長徑	中錨鎖 長徑	挽索 長	挽索 周	麻索 長	麻索 周	鋼索 長	鋼索 周	大索 長各九十尋	大索 周
五以上二五〇以上	二	一	一	五	四〇瓩	八〇瓩	四〇瓩	八〇瓩	四〇瓩	八〇瓩	一二吋	一/一六吋	一〇吋	一/一六吋	一五尋	一/二吋	一五尋	一/二吋	一五尋	一吋	一五尋	一吋
二五〇以上五〇〇以上	二	一	一	四	六〇瓩	一二〇	六〇瓩	一二〇	六〇瓩	一二〇	一四	一/一六吋	一二	一/一六吋	一六	一/二吋	一六	一/二吋	一六	一吋	一六	一吋
五〇〇以上一〇〇〇以上	二	一	一	六	八〇瓩	一六〇	八〇瓩	一六〇	八〇瓩	一六〇	一六	一/一六吋	一四	一/一六吋	一八	一/二吋	一八	一/二吋	一八	一吋	一八	一吋
一〇〇〇以上一八〇〇以上	二	一	一	八	一〇〇瓩	二〇〇	一〇〇瓩	二〇〇	一〇〇瓩	二〇〇	一八	一/一六吋	一六	一/一六吋	二一	一/二吋	二一	一/二吋	二一	一吋	二一	一吋
一八〇〇以上	二	一	一	一二	一二〇瓩	二四〇	一二〇瓩	二四〇	一二〇瓩	二四〇	二一	一/一六吋	一八	一/一六吋	二四	一/二吋	二四	一/二吋	二四	一吋	二四	一吋

三二五以上	六一五〇以上	三	一	一	七七八	一四九六	九四四	一〇八〇	二二四	一一二	一六五	一五/一六	四五	一〇/一六	二 一/四	七〇	七	—	五	—
三六二以上	六八四〇以上	三	一	一	八二三	一六三四	一〇〇八	二〇一六	二五二	一一二	一六五	一	四五	一二/一六	二 三/四	七五	七 一/二	—	五 一/二	—
四〇〇以上	七四九〇以上	三	一	一	九二四	二六七二	一二四八	二三三六	三八〇	一四〇	一六五	一 一/一六	六〇	一二/一六	二 三/四	七五	七 一/二	—	五 一/二	—
四三八以上	八六七〇以上	三	一	一	一一二〇	三二九二	一四〇〇	三九九六	四二〇	一九六	一九五	一 二/一六	六〇	一三/一六	二 三/四	七五	八	—	六	—
四九〇以上	九七六〇以上	三	二	二	一二四四	三八三六	一六八〇	四七八八	四四八	二二四	一九五	一 三/一六	六〇	一三/一六	三	七五	八 一/二	—	六 一/二	—
五三八以上	一〇七九〇以上	三	一	一	一五二二	四三三二	一八七六	五五七六	五五二	二八〇	二一〇	一 四/一六	六〇	一三/一六	三	七五	八 一/二	—	六 一/二	四
六〇〇以上	一一七四〇以上	三	一	一	一七〇八	四八七二	二一二八	六〇七六	五八八	二八〇	二一〇	一 五/一六	六〇	一四/一六	三 一/四	九〇	九	—	七	五
六七五以上	一二三六〇以上	三	一	一	一八七六	五三四八	二三二四	六六六四	六一六	三〇八	二一〇	一 六/一六	六〇	一四/一六	三 一/四	九〇	九	—	七	五
七五〇以上	一三六五〇以上	三	一	一	二〇一六	五七四〇	二五二〇	七一六八	七三八	三六四	二二〇	一 七/一六	六〇	一五/一六	三 一/二	九〇	九 一/二	—	七 一/二	五 一/二
九〇〇以上	一五一二〇以上	三	一	一	二三九二	六七二〇	二九四〇	八四〇〇	八二二	三九二	二二〇	一 八/一六	七五	一五/一六	三 一/二	九〇	一〇	三 一/四	八	五 一/二
一〇五〇以上	一六七四〇以上	三	一	一	二六三三	七五〇四	三三七六	九三八〇	八九六	四四八	二四〇	一 九/一六	七五	一	三 三/四	九〇	一〇	三 一/四	八	六
一二〇〇以上	一八二六〇以上	三	二	二	二八九六	八一四八	三五九六	一〇一六四	九五二	四七六	二四〇	一 一〇/一六	七五	一	三 三/四	九〇	一〇	三 一/四	八 一/二	六
一三五〇以上	一九七八〇以上	三	二	二	三二〇八	八八四八	三八六四	一一〇八〇	九八〇	五〇四	二四〇	一 一一/一六	七五	一 一/一六	四	九〇	一一	三 一/二	九	七
一五〇〇以上	二一三八〇以上	三	一	二	三三六〇	九九七六	四二〇〇	一一九九六	一〇六四	五三二	二四〇	一 一二/一六	七五	一 二/一六	四	九〇	一一	三 一/二	九	七 一/二
一八〇〇以上	二四三二〇以上	三	一	一	三五八四	一〇三二〇	四四八〇	一二七六八	一一七六	五八八	二四〇	一 一三/一六	七五	一 三/一六	四 一/四	九〇	一二	四	九 一/二	七 一/二
二一〇〇以上	二七一四〇以上	三	二	一	三六〇八	一〇八六四	四七六〇	一三五八〇	一二〇四	六一六	二四〇	一 一四/一六	七五	一 三/一六	四 一/四	一〇〇	一二	四	九 一/二	八
二四〇〇以上	三〇〇二〇以上	三	二	一	四〇八八	一一六四八	五〇九六	一四五六〇	一二六〇	六一六	二七〇	一 一五/一六	九〇	一 三/一六	四 一/四	一〇〇	一三	四	一〇	八 一/二
二七〇〇以上	三三八二〇以上	三	二	二	四二九六	一一二二四	五三二〇	一五一四八	一三八八	六四四	二七〇	二	九〇	一 三/一六	四 一/二	一二〇	一三	四	一〇	八 一/二

三〇〇〇以上	三七四五〇以上	三	一	一	四四八〇	一二七六八	五六〇〇	一五九六〇	一三四四	六七二	二七〇	二 一/一六	九〇	一 五/一六	四 一/二	一二〇	一三	四 一/二	一〇	九
三五〇〇以上	三九六〇〇以上	四	一	一	四六四八	一七八九二	五七九六	二二三四四	一四二八	七一八	二七〇	二 二/一六	九〇	一 五/一六	四 一/二	一二〇	一三	四 一/二	一一	九
四〇〇〇以上	四三六〇〇以上	四	一	一	四八一六	一八五三六	六〇二〇	二三一五六	一五六八	七八四	二七〇	二 三/一六	九〇	一 四/一六	四 三/四	一三〇	一四	四 三/四	一二	一〇
四五〇〇以上	四七四〇〇以上	四	一	一	五〇四〇	一九四〇四	六三〇〇	二四二四八	一七〇八	八四〇	二七〇	二 四/一六	九〇	一 四/一六	四 三/四	一三〇	一四	五	一二	一〇
五〇〇〇以上	五二〇〇〇以上	四	一	一	五二〇八	二〇〇四八	六四九六	二五〇六〇	一八七六	九五二	二七〇	二 五/一六	九〇	一 五/一六	五	一三〇	一五	五 一/四	一三	一〇
五五〇〇以上	五五〇〇〇以上	四	一	一	五四八八	二一〇五六	六八六〇	二六三二〇	二二二八	一〇六四	三〇〇	二 六/一六	一二〇	一 五/一六	五	一三〇	一五	五 一/二	一四	一一
六〇〇〇以上	五九〇〇〇以上	四	一	一	五八二四	二二一七六	七二八〇	二七七二〇	二四六四	一一七六	三〇〇	二 七/一六	一二〇	一 五/一六	五	一四〇	一五	五 三/四	一四	一一
六五〇〇以上七〇〇〇未滿	六二〇〇〇以上七〇〇〇〇未滿	四	一	一	六一六〇	二三五二〇	七七〇〇	二九四〇〇	二八〇〇	一三四四	三〇〇	二 八/一六	一二〇	一 六/一六	五 一/四	一四〇	一六	六	一五	一二

備考

一　本表中數ト稱スルハ重甲板船若ハ輕甲板船ニ於テハ船艙ノ中央ニ於テ龍骨ノ上面ヨリ重甲板梁若ハ輕甲板梁ノ上面迄ノ深ト幅ノ二分ノ一トノ和ニ龍骨上面ノ中心ヨリ重甲板若ハ輕甲板ノ梁上側板ニ至ル正肋材ノ船體中央ニ於ケル長ヲ加ヘ之ニ船ノ長ヲ乘シタルモノヲ謂ヒ又覆甲板若ハ貫通スル遮陽甲板ヲ設クル場合ニ於テハ前記ノ數ニ其ノ八分ノ一ヲ加ヘタルモノヲ謂ヒ又一部ノ覆甲板、船尾樓、船首樓、船橋樓若ハ船尾高甲板ヲ備フル船舶ニ於テハ重甲板船若ハ輕甲板船ニ要スル數ニ其ノ數ノ八分ノ一ト一部ノ覆甲板、船尾樓、船首樓、船橋樓若ハ船尾高甲板ノ合長ノ船ノ長ニ於ケル割合ヲ乘シタル數ヲ加ヘタルモノヲ謂フ

二　長、幅及深ノ本位ハ造船規程第四條ニ依リ又長及幅ノ測リ方ハ同第三條ニ依ルヘシ

第二號表

帆船錨鎖及大索表

噸數	錨數			錨量（錨鉧ヲ除ク）				大錨鎖		中錨			挽索			大索	
				大錨		中錨	小錨			鎖		鋼索	麻索		鋼索	長各九十尋	
數	大	中	小	單量	合量	單量	單量	長	徑	長	徑	周	長	周	周	周	周

五〇以上 一九〇〇以上	二	一	一	三九二磅	七八四磅	八四磅	五六磅	一二〇尋	三/一六吋	四五尋	七/一六吋	—吋	七五尋	五吋	—吋	三吋	—吋
七五以上 二五〇〇以上	二	一	一	四七六	九五二	一四〇	五六	一二〇		四五	九/一六	—	七五	五 一/二	—	三	—
一〇〇以上 三一〇〇以上	二	一	一	五六〇	一一二〇	一六八	八四	一三五	五/一六	四五	九/一六	—	七五	五 一/二	—	三	—
一二五以上 三六五〇以上	二	一	一	六四四	一二八八	一六八	八四	一六五	五/一六	四五	九/一六	—	七五	六	—	三 一/二	—
一五〇以上 四二〇〇以上	二	一	一	七二八	一四五六	二二四	一一二	一六五	五/一六	四五	九/一六	二	七五	六 一/二	—	四	—
一七五以上 四七〇〇以上	二	一	一	八一二	一六二四	二五二	一一二	一六五	一	四五	九/一六	二	七五	六 一/二	—	四	—
二〇〇以上 五一五〇以上	三	一	一	九二四	二一六三	二八〇	一四〇	一六五	一 一/一六	四五	一一/一六	二 一/四	七五	七	—	四	—
二五〇以上 六〇〇〇以上	三	一	一	一一二〇	三一九二	四二〇	一九六	一九五	一 三/一六	四五	一一/一六	二 一/四	七五	七 一/二	—	五	—
三〇〇以上 六八〇〇以上	三	一	一	一三四四	三八三六	四四八	二二四	一九五	一 五/一六	六〇	一三/一六	二 三/四	七五	八	—	五 一/二	—
三五〇以上 七五五〇以上	三	一	一	一五一二	四三一二	五三二	二八〇	二一〇	一 五/一六	六〇	一三/一六	二 三/四	七五	八	—	五 一/二	—
四〇〇以上 八二五〇以上	三	一	一	一七〇八	四八七二	五八八	二八〇	二一〇	一 七/一六	六〇	一三/一六	二 三/四	七五	八 一/二	—	六	—
四五〇以上 八九〇〇以上	三	一	一	一八七六	五三四八	六一六	三〇八	二四〇	一 七/一六	六〇	一五/一六	二 三/四	七五	九	—	六 一/二	—
五〇〇以上 九六〇〇以上	三	一	一	二〇一六	五七四〇	七二八	三六四	二四〇	一 九/一六	六〇	一五/一六	三	七五	九 一/二	—	七	—
六〇〇以上 一〇八〇〇以上	三	一	一	二三五二	六七二〇	八一二	三九二	二四〇	一 九/一六	六〇	一五/一六	三	九〇	一〇	三 一/四	七	四
七〇〇以上 一二〇〇〇以上	三	一	一	二六三二	七五〇四	八九六	四四八	二七〇	一 一一/一六	六〇	一五/一六	三 一/四	九〇	一〇	三 一/四	八	五
八〇〇以上 一三二〇〇以上	三	一	一	二八五六	八一四八	九五二	四七六	二七〇	一 一一/一六	七五	一五/一六	三 一/四	九〇	一〇	三 一/四	八	五

九〇〇以上 一四四〇〇以上	三	一	一	三一〇八	八八四八	九八〇	五〇四	二七〇	一 一三/一六	七五	一五/一六	三 一/二	九〇	一〇 一/二	三 一/四	九	五 一/二
一〇〇〇以上 一五五〇〇以上	三	一	一	三三六〇	九五七六	一〇六四	五三二	二七〇	一 一三/一六	七五	一五/一六	三 一/二	九〇	一〇 一/二	三 一/四	九	五 一/二
一二〇〇以上 一七六〇〇以上	三	一	一	三五八四	一〇二二〇	一一七六	五八八	二七〇	一 一五/一六	七五	一	三 三/四	九〇	一一	三 一/二	九 一/二	六
一四〇〇以上 一九六〇〇以上	三	一	一	三八〇八	一〇八六四	一二〇四	六一六	二七〇	一 一五/一六	七五	一	三 三/四	九〇	一一	三 一/二	一〇	六
一六〇〇以上 二一六〇〇以上	三	一	一	四〇八八	一一六四八	一二六〇	六一六	二七〇	一 一五/一六	七五	一 一/一六	四	九〇	一一	三 一/二	一〇 一/二	六 一/二
一八〇〇以上 二三四〇〇以上	三	一	一	四二五六	一二一二四	一二八八	六四四	二七〇	二	七五	一 一/一六	四	九〇	一二	四	一一	七
二〇〇〇以上 二五一〇〇以下	三	一	一	四四八〇	一二七六八	一三四四	六七二	二七〇	二 一/一六	一〇〇	一 三/一六	四 一/四	九〇	一二	四	一一	七
二五〇〇以上 二九四〇〇以上	三	一	一	四七〇四	一三四一二	一五一二	七五六	三〇〇	二 三/一六	一二〇	一 三/一六	四 一/四	九〇	一三	四 一/二	一二	八
三〇〇〇以上 三三四〇〇以上	三	一	一	五〇四〇	一四三六四	一七〇八	八四〇	三〇〇	二 五/一六	一二〇	一 三/一六	四 一/二	九〇	一三	四 一/二	一二	八
三五〇〇以上四〇〇〇未滿 三七六〇〇以上四〇八〇〇未滿	四	一	一	五三七六	二〇七二〇	一九〇四	九五二	三〇〇	二 九/一六	一二〇	一 五/一六	四 三/四	一二〇	一四	四 三/四	一三	九

備考　本表中數ノ意義、長幅及深ノ本位、長及幅ノ測リ方ハ第一號表ニ同シ

第三號表

端艇表

上甲板下噸數	艇數	總端艇容積(立方尺)	救命艇容積(立方尺)	上甲板下噸數	艇數	總端艇容積(立方尺)	救命艇容積(立方尺)	上甲板下噸數	艇數	總端艇容積(立方尺)	救命艇容積(立方尺)
六〇〇〇、以上	一二	四〇〇〇	一五〇〇	二七五〇、以上	六	二一〇〇	九五〇	四〇〇、以上	二	四〇〇	二五〇
五七五〇、以上	一〇	三七〇〇	一五〇〇	二五〇〇、以上	六	二〇五〇	九〇〇	三〇〇、以上	二	三五〇	二二〇

救命浮環	救命帶	機燈	航燈	錨燈	泊燈	紅燈	黑球	圓錐	火飾	探照管	發砲號角	號鐘	國旗	信號旗	信號燈	信號笛	船名錨	時計
二四	二	二	二組	二	二	二	三	二二	二二	二二	一	一	二	一組	一組	一	一	二
二三	二	二	二組	二	二	二	三	二二	二二	二二	一	一	二	一組	一組	一	一	二
二二	二	二	二組	二	二	二	二	大	大	大	一	一	二	一組	一組	一	一	二
			一組		一						一	一	一	二N.C.或	二N.C.或			一
		一	一組	一	一	二	二						一	一組	一組	一	一	一
		一	一組										一	二N.C.或	二N.C.或			一

備考 上近海航路船ト雖モ船ノ長百五十尺以下ト雖モ船ノ二箇ヲ備フヘキハ以下ト

船舶種類／艤具名稱	遠洋航船 汽船	遠洋航船 帆船	近海航船 汽船	近海航船 帆船	沿海航船 汽船	沿海航船 汽船	平水航船 汽船
救命浮環	四	二	三	二	二	二	二
救命帶	二	二	二	二	二	二	二
機燈	二	二	二	二	二	二	二
航燈	二組	二組	二組	二組	二組	二組	二組
錨燈	二	二	二	二	二	二	二
泊燈	二	二	二	二	二	二	二
紅燈	二	二	二	二	二	二	二
黑球	三	三	二	二	二	二	二
圓錐	二二	二二	大	大	大	大	大
火飾	二二	二二	大	大	大	大	大
探照管	二二	二二	大	大	大	大	大
發砲號角	一	一	一	一	一	一	一
號鐘	一	一	一	一	一	一	一
國旗	二	二	二	二	二	二	二
信號旗	一組	一組	一組	二N.C.或	一組	二N.C.或	一組
信號燈	一	一	一	一	一	一	一
信號笛	一	一	一	一	一	一	一
船名錨	一	一	一	一	一	一	一
時計	二	二	二	一	一	一	一

備考 ルト號キ砲ハ砲員及十二發以上ノ艤ヲ備フ

第四號表

船體部屬具表

船舶種類／艤具名稱	遠洋航船 汽船	遠洋航船 帆船	近海航船 汽船	近海航船 帆船	沿海航船 汽船	沿海航船 汽船	平水航船 汽船	備考
救命浮環	四	二	三	二	二	二	二	
救命帶	二五〇〇以上	一〇	二五〇〇	一五〇〇	二二五〇以上	大	二〇〇〇	八五〇〇
機燈	二五〇〇以上	一〇	二五〇〇	一五〇〇	二二五〇以上	大	一七五〇〇	七八〇〇
航燈	四七五〇以上	一〇	二五〇〇	一五〇〇	一五〇〇以上	大	一七〇〇	七五〇〇
錨燈	五〇〇〇以上	一〇	二五〇〇	一五〇〇	一七五〇以上	大	一八〇〇	七八〇〇
泊燈	五二五〇以上	一〇	二五〇〇	一五〇〇	二〇〇〇以上	大	一七五〇	七八〇〇
紅燈	四五〇〇以上	八	二五〇〇	一五〇〇	一五〇〇以上	大	一二五〇	七一〇
黑球	四三五〇以上	八	二五〇〇	一五〇〇	一〇〇〇以上	四	一二〇〇	七〇〇
圓錐	四〇〇〇以上	八	二六〇〇	一五〇〇	九〇〇以上	四	一〇〇〇	四五〇
火飾	三五〇〇以上	八	二五〇〇	一〇〇〇	八〇〇以上	四	九〇〇	四九〇
探照管	三四〇〇以上	八	二六〇〇	一〇〇〇	七〇〇以上	四	八〇〇	三五〇
發砲號角	三二五〇以上	八	二五〇〇	一〇〇〇	六〇〇以上	三	七〇〇	三〇〇
號鐘	三〇〇〇以上	八	二四〇〇	一〇〇〇	五〇〇以上	三	六〇〇	二八〇

備考 信號ト號砲ハ砲員及十二發以上ノ艤ヲ備フ

機具名稱	船舶種類 遠洋航船	近海航船	沿海航船	平水航船
羅針盤	三	三	三	二
時辰儀	一	一	一	一
六分儀	一	一	一	一
手用測程具	一	一	一	一
砂漏計	二	二	二	一
測程機械	一	一	一	一
手用測鉛	二	二	二	二
深海測鉛	一	一	一	一
測深機械	一	一	一	一
晴雨計	一	一	一	一
寒暖計	一	一	一	一
雙眼鏡	一	一	一	一
航海日誌	一	一	一	一
航海暦	一	一	一	一
航路標識便覽	一	一	一	一
消防用手桶	二	八	六	四	四	二
斧	二	二	一	一		

機具名稱	遠洋航船	近海航船	沿海航船	平水航船
羅針盤	近海航船以上ニ在テハ一箇ハ天象岬角ヲ測リ得ヘキ器具ノ備付ヲ要ス			
時辰儀	登簿噸數五百噸未滿ノ近海航船ハ必シモ備フルヲ要セス			
六分儀	同			
手用測程具				
砂漏計	二箇ナルトキハ十四秒ノモノト二十八秒ノモノトヲ備フルヲ要ス			
測程機械				
手用測鉛				
深海測鉛				
測深機械	登簿噸數五百噸以上ノ旅客船ニ限ル			
晴雨計				
寒暖計				
雙眼鏡	海水ヲ測ルニ適當ノモノナルヲ要ス			
航海日誌				
航海暦				
航路標識便覽				
消防用手桶				
斧				

第五號表

安全瓣表

汽壓 磅	機械ノ使用ニ適スル一付平方吋ニ付キ面積	機械ノ使用ニ適スル全平方吋ニ付キ面積	汽壓 磅	機械ノ使用ニ適スル一付平方吋ニ付キ面積	機械ノ使用ニ適スル全平方吋ニ付キ面積
15	1.250		108		.304
16	1.209		109		.302
17	1.171		110		.300
18	1.136		111		.297
19	1.102		112		.295
20	1.071		113		.292
21	1.041		114		.290
22	1.013		115		.288
23	.986		116		.286
24	.961		117		.284
25	.937		118		.281
26	.914		119		.279
27	.892		120		.277
28	.872		121		.275
29	.852		122		.273
30	.833		123		.271
31	.815		124		.269
32	.797		125		.267
33	.781		126		.265
34	.765		127		.264
35	.750		128		.262
36	.735		129		.260
37	.721		130		.258
38	.707		131		.256
39	.694		132		.255
40	.681		133		.253
41	.669		134		.251
42	.657		135		.250
43	.646		136		.248
44	.635		137		.246
45	.625		138		.245
46	.614		139		.243
47	.604		140		.241
48	.595		141		.240
49	.585		142		.238
50	.576		143		.237
51	.568		144		.235
52	.559		145		.234
53	.551		146		.232
54	.543		147		.231
55	.535		148		.230
56	.528		149		.228
57	.520		150		.227
58	.513		151		.225
59	.506		152		.224
60	.500		153		.223
61	.493		154		.221
62	.487		155		.220
63	.480		156		.219
64	.474		157		.218
65	.468		158		.216
66	.462		159		.215
67	.457		160		.214
68	.451		161		.213
69	.446		162		.211
70	.441		163		.210
71	.436		164		.209
72	.431		165		.208
73	.426		166		.207
74	.421		167		.206
75	.416		168		.204
76	.412		169		.203
77	.407		170		.202
78	.403		171		.201
79	.398		172		.200
80	.394		173		.199
81	.390		174		.198
82	.386		175		.197
83	.382		176		.196
84	.378		177		.195
85	.375		178		.194
86	.371		179		.193
87	.367		180		.192
88	.364		181		.191
89	.360		182		.190
90	.357		183		.189
91	.353		184		.188
92	.350		185		.187
93	.347		186		.186
94	.344		187		.185
95	.340		188		.184
96	.337		189		.183
97	.334		190		.182
98	.331		191		.181
99	.328		192		.181
100	.326		193		.180
101	.323		194		.179
102	.320		195		.178
103	.317		196		.177
104	.315		197		.176
105	.312		198		.176
106	.309		199		.175
107	.307		200		.174

第六號表

機關部屬具表

機具名稱 船舶種類	遠洋航船	近海航船	沿海航船	平水航船
吸鍔罐瓶	一組	一組		
吸鍔發條	一組	一組	一組	
吸鍔螺釘及母螺	總數ノ四分ノ一	總數ノ四分ノ一	總數ノ四分ノ一	
滑瓣鍔	一箇	一箇		汽機一壓ノ各吸鍔ニ付三聯成汽機ナルトキハ此ノ限ニアラス
接續鍔上下ノ螺釘	各二箇	各二箇	各二箇	
接續鍔上下ノ黄銅	各一組	各一組	各二箇	

主動受鋲釘及埋螺	一組	一組			
接鋲頭釘及埋螺	二組	一組	一組		
曲折軸	一箇				曲折軸ヲ一箇以上有シ而シテ其ノ限ニアラスト雖モ此ハ後相當ノ理由ヲ得ルトキハ曲折軸ヲ使用シ
冷汽管	鋼製ノ手あつい	鋼製ノ手あつい			
冷汽管填塞	鋼製ノ手あつい	鋼製ノ手あつい			木製ナルトキハ填塞ヲ添フ
排氣喞筒弁	一箇	一箇			
排氣喞筒瓣	一組	一組	一組	一組	單瓣裝置ナルトキ
	半組	半組	半組	半組	多瓣裝置ナルトキ
循環喞筒弁	一箇	一箇			
循環喞筒瓣	一組	一組	一組	一組	單瓣裝置ナルトキ
	半組	半組	半組	半組	多瓣裝置ナルトキ
給水喞筒瓣及座	三組	三組	二組	二組	鞍鐵製ナルトキ
	一組	一組	一組	一組	全鋼製ナルトキ
制限瓣及座	一組	一組			
洽水喞筒瓣及座	三組	三組	二組	二組	鞍鐵製ナルトキ
	一組	一組	一組	一組	全鋼製ナルトキ
安全瓣殼條	各壓ニ付一箇	各壓ニ付一箇	一箇		
火床架	鋼製ノ四あつい	鋼製ノ五あつい	鋼製ノ六あつい	四箇	

驗水器硝子	各壓ニ付四箇	各壓ニ付四箇	六箇	三箇	近海航路以上ニ於テハ六箇ヲ減ス
屑管	鋼製ノ手あつい	鋼製ノ手あつい			
管鎖器	一箇	一箇	一箇		
管塞器	十二箇	八箇	四箇	二箇	内半數ハ汽鑵前面ニ於テ直ニ使用シ得ルトキハ
鉗	一箇	一箇			
滑車及鋼	二組	一組			
螺旋切道具	一組	一組			
錐孔器	二箇	一箇	一箇		
鑽砧	一箇	一箇			
揚卸荷力	二箇	一箇	一箇		
鐵板	若干	若干			
鉸鋲	若干	若干			
鋲釘及埋螺	若干	若干	若干	若干	
機關室用小道具	一揃	一揃	一揃	一揃	
臨檢器	二箇	二箇	一箇	一箇	
藥瓶計	二箇	二箇	一箇	一箇	
機關日誌	一冊	一冊	一冊	一冊	木炭船ハ略日誌ヲ用フルモ妨ナシ

○遞信省令第十三號

明治二十六年十一月遞信省令第二十一號登記印紙ヲ以テ納ムヘキ手數料種目第四項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

明治三十年六月十九日　遞信大臣子爵野村靖

一回航認可證書手數料

○大藏省令第九號

保税倉庫法施行細則左ノ通相定ム

明治三十年六月二十三日　大藏大臣伯爵松方正義

保税倉庫法施行細則

第一章　貨物ノ藏置及運搬

第一條　官設保税倉庫ニハ左ノ各項ニ觸レサル物品ハ之ヲ藏置スルコトヲ得

一　無税品

二　巨大ナルモノ及重量ナルモノ

三　損傷腐敗セシモノ又ハ損傷腐敗シ易キモノ

四　發火質、燃燒質又ハ爆發質ノモノ

五　倉庫又ハ他ノ貨物ヲ汚損スヘキモノ

六　動物及植物

七　不潔物

第二條　私設保税倉庫ニ藏置スル貨物ノ種類ハ大藏大臣ノ認可ヲ得タルモノニ限ル

第三條　保税倉庫ニ貨物ヲ藏置セントスル者ハ庫入願書ヲ倉庫所在地ノ税關又ハ税關支署ニ差出シ貨物ノ檢査ヲ經庫入免狀ヲ受クヘシ但回送貨物ナルトキハ第七條ノ回送免狀ヲ添付スヘシ

第四條　藏置貨物ノ全部又ハ一部ヲ引取ラントスル者ハ輸入願書ヲ税關又ハ税關支署ニ差出シ輸入税ヲ納メ輸入免狀ヲ受クヘシ

第五條　藏置貨物ヲ庫移セントスル者ハ庫移願書ヲ税關又ハ税關支署ニ差出シ庫移免狀ヲ受クヘシ但庫移ノ爲メ回送ヲ要スルトキハ此限ニアラス

第六條　藏置貨物ヲ外國ニ積戻サントスル者ハ積戻願書ヲ船積港ノ税關又ハ税關支署ニ差出シ積戻免狀ヲ受クヘシ但回送貨物ナルトキハ第七條ノ回送免狀ヲ添付スヘシ

第七條　保税倉庫ニ庫入又ハ庫移ノ爲メ輸入手數未濟貨物ヲ運搬セントスルトキハ回送願書二通ヲ其發送地ノ税關又ハ税關支署ニ差出シ檢査ヲ經回送免狀ヲ受クヘシ

保税倉庫ニ藏置ノ貨物ヲ外國ニ積戻ス爲メ運搬ヲ要スルトキ亦前項ニ同シ

第八條　税關又ハ税關支署ニ於テ必要アリト認ムルトキハ貨主ヲシテ回送貨物ニ對スル輸入税金ヲ假納セシムヘシ

第九條　回送貨物仕向地ニ到達スルトキハ其回送免狀ニ仕向地ノ税關又ハ税關支署ノ證明ヲ受ケ發送地ノ税關又ハ税關支署ニ差出スヘシ其税金ヲ假納シタルモノハ其際之ヲ拂戻スモノトス

第十條　回送貨物仕向地ニ到達セサルモノアルトキハ其貨物ニ對スル税金ヲ徵收ス但假納金アルトキハ其假納金ヲ以テ税金ニ充ツルモノトス

第十一條　税關又ハ税關支署ニ於テ必要ト認ムルトキハ貨物運搬ノ途中税關官吏ヲシテ之ヲ監督セシムルコトアルヘシ

第十二條　官設保税倉庫藏置ノ貨物引取ノ權利ニ付訴訟アル場合ニ於テ其當事者ヨリ藏置期限ノ延期ヲ請ハントスルトキハ其期限ヲ豫定シ出訴ノ年月日、事由及出訴シタル裁判所ノ名稱等ヲ記シタル藏置期限延期願書ヲ税關又ハ税關支署ニ差出シ認許ヲ受クヘシ但延期豫定期限内ニ訴訟事件終結セサルトキハ更ニ延期ヲ求ムルコトヲ得

第十三條　包裝ノ完全ナラサル貨物ハ改裝シタル上ニ非レハ庫入スルコトヲ得ス

第十四條　庫入シタル貨物ハ稅關官吏ノ指定シタル場所ニ藏置スヘシ稅關官吏ノ許可ヲ受クルニ非レハ其場所ヲ變更スルコトヲ得ス

第十五條　他ノ貨物ヲ傷害若クハ汚損スヘキ虞アル貨物ハ他ノ貨物ト混同シテ藏置スルコトヲ得ス

第十六條　藏置貨物ノ見本ヲ取出サントスル者ハ其品名及數量ヲ記シタル書面ヲ稅關又ハ稅關支署ニ差出シ承認ヲ受クヘシ

官設保稅倉庫ヨリ見本ヲ取出サントスルトキハ前項ノ書面ニ預證券ヲ添フヘシ稅關又ハ稅關支署ハ其取出シタル見本ノ數量及取出ノ年月日ヲ預證券ニ記入シタル上之ヲ還付ス

第二章　預證券

第十七條　官設保稅倉庫ニ貨物ノ庫入ヲ了シタルトキハ稅關又ハ稅關支署長ノ署名捺印シタル預證券ヲ貨主ニ交付ス

預證券ニハ左ノ事項ヲ記載ス

一　貨物ノ品名、記號、番號、箇數、數量

二　陸揚申告及庫入ノ年月日

三　貨主ノ住所氏名

四　倉庫所在地及番號

五　輸入稅額

六　庫敷料

第十八條　預證券ハ每品一通トス但貨主ノ請求ニ依リ分割スルコトアルヘシ

第十九條　預證券讓渡ノ裏書ハ其讓受人ノ氏名及讓渡ノ年月日ヲ記シ讓渡人之ニ署名捺印スヘキモノトス但便宜ニ依リ裏書讓渡人ノ署名捺印ノミヲ以テ讓渡ヲ爲スコトヲ得

第二十條　預證券ニ記載シタル貨物ノ一部ヲ引取リタル者ハ其殘留スル貨物ニ對シ預證券ノ再渡ヲ請フヘシ

第二十一條　預證券盜難ニ罹リ又ハ紛失滅失シタルトキハ其證券ヲ發シタル稅關又ハ稅關支署ニ屆出ヘシ

前項ノ預證券發見ノ場合ニ於テモ亦同シ

第二十二條　預證券盜難ニ罹リ又ハ紛失滅失シタルトキ新證券ノ交付ヲ請ハントスル者ハ再渡願書ニ除權判決書ノ謄本ヲ添ヘ其證券ヲ發シタル稅關又ハ稅關支署ニ差出スヘシ

第二十三條　預證券ノ分割、再渡又ハ書換ヲ請フ者ハ手數料トシテ一通ニ付金三十錢ヲ納ムヘシ

第三章　私設保稅倉庫營業ノ特許及庫主ノ責務

第二十四條　保稅倉庫法ニ依リ保稅倉庫ヲ設ケ輸入手數未濟貨物ヲ保管スルノ業ヲ營マントスル者ハ其倉庫ノ位置、構造、棟數、坪數、藏置スヘキ貨物ノ種類、營業年限ヲ記シタル書面及倉庫竝附近ノ圖面ヲ添ヘ其倉庫ヲ設立セントスル地ノ管轄地方廳ヲ經由シテ大藏大臣ニ出願スヘシ但會社ニ在テハ別ニ契約書又ハ定款ノ謄本ヲ添フヘシ

會社ヲ組織シテ本業ヲ營マントスル者ハ前項書類ノ外合名會社合資會社ニ在テハ其契約書ノ謄本及假定款謄本ヲ添ヘ發起人ヨリ出願スヘシ

第二十五條　私設保稅倉庫營業ノ特許ハ三十箇年以內ニ於テ相當ノ期限ヲ定メ之ヲ與フルモノトス但特許期限ノ延期ヲ出願スル者アルトキハ調査ノ上之ヲ許可スルコトアルヘシ

第二十六條　私設保稅倉庫營業ノ特許ヲ得タル者ハ少クモ開業ノ日ヨリ十日前ニ擔保物ヲ供託シ其供託受領證ノ寫ヲ添ヘ稅關又ハ稅關支署ニ屆出ヘシ

供託物ハ保稅倉庫法ニ依リ庫主ニ屬スル義務ノ解除ニ至ルトキハ其旨ヲ稅關又ハ稅關支署ニ申出テ稅關長又ハ稅關支署長ノ證明ヲ得テ之カ返戻ヲ求ムヘキモノトス

第二十七條　擔保ハ左ノ割合ニ依リ之ヲ徵ス但石油ヲ藏置スル倉庫ハ半額トス

平家建總坪數百坪迄　金二千圓

以上五十坪迄ヲ增ス毎ニ金千圓ヲ加フ

二階建總坪數百坪迄　金三千圓

以上五十坪迄ヲ增ス毎ニ金千五百圓ヲ加フ

第二十八條　私設保稅倉庫坪數ノ增加若クハ構造ノ變更ニ依リ擔保ノ增加ヲ要スルトキハ庫主ハ稅關長又ハ稅關支署長ノ指揮ニ從ヒ其增加額ニ相當スル金錢又ハ國債證券ヲ供託スヘシ

第二十九條　私設保稅倉庫坪數ノ減少若クハ構造ノ變更ニ依リ擔保ニ過剩ヲ生スルトキハ庫主ハ稅關長又ハ稅關支署長ニ申出其減少ヲ求ムルコトヲ得

第三十條　私設保稅倉庫ヲ改築シ又ハ構造ヲ變更シ若クハ之ヲ增設シ又ハ減少セントスルトキハ庫主ハ稅關又ハ稅關支署ニ申出テ認許ヲ受クヘシ

第三十一條　私設保稅倉庫營業ノ特許ヲ得タル者ハ其開業前ニ又倉庫ノ改築、構造變更若クハ增減ノ認許ヲ得タル者ハ工事落成ノトキ稅關又ハ稅關支署ニ申出テ其倉庫ノ檢査ヲ受クヘシ

第三十二條　私設保稅倉庫ノ修繕又ハ造作ノ變更ヲ爲サントスルトキハ庫主ハ稅關又ハ稅關支署ニ申出テ承認ヲ受クヘシ

第三十三條　庫主私設保稅倉庫ノ營業特許期限內ニ營業ヲ廢セントスルトキハ其旨ヲ稅關又ハ稅關支署ニ屆出ヘシ

第三十四條　私設保稅倉庫營業ノ特許消滅ノトキ其業務ヲ引繼カントスル者ハ第二十四條ノ規定ニ準據シ大藏大臣ニ出願スヘシ但此場合ニ於テ其使用スル倉庫ニ異動ナキモノハ圖面ヲ添付スルヲ要セス

第三十五條　私設保稅倉庫藏置ノ認可ヲ得タル貨物ノ種類ヲ變更セントスルトキハ大藏大臣ノ認許ヲ受クヘシ

第三十六條　發火質、燃燒質又ハ爆發質ノ貨物ハ特ニ其貨物藏置ノ爲メ設ケタル倉庫ノ外之ヲ藏置スルコトヲ得ス

第三十七條　私設保稅倉庫又ハ其藏置貨物ニ異狀アリタルトキハ直チニ其旨ヲ稅關又ハ稅關支署ニ申出テ稅關官吏ノ臨檢ヲ受クヘシ

第三十八條　私設保稅倉庫藏置ノ貨物盜難ニ罹リ又ハ紛失滅失シタルトキハ庫主ハ其貨物ニ對スル輸入稅ヲ納ムヘシ

第三十九條　私設保稅倉庫藏置ノ貨物藏置期限ヲ經過シ貨主其貨物ヲ引取ラサルトキハ稅關又ハ稅關支署ハ庫主ヲシテ納稅其他輸入ノ手續ヲ爲サシムヘシ

第四十條　私設保稅倉庫ノ庫主自身ニ業務ヲ擔當スル能ハサルトキハ相當ノ代理者ヲ置キ其業務ヲ擔當セシムヘシ

第四十一條　私設保稅倉庫ノ庫主ハ稅關長又ハ稅關支署長ノ指揮ニ從ヒ貨物檢査上必要ノ場所ヲ設ケ器具機械ヲ具ヘ其他相當ノ設備ヲ爲スヘシ

第四十二條　私設保稅倉庫ノ庫主ハ貨物ノ檢査ヲ受クルトキ檢査上一切ノ利便ヲ與フルノ義務アルモノトス

第四十三條　私設保稅倉庫ニハ二重鎖鑰ヲ設ケ其鑰一箇ハ稅關又ハ稅關支署ノ保管ニ付スヘシ

第四十四條　私設保稅倉庫ノ開閉又ハ貨物ノ出入ヲ爲ストキハ稅關官吏ノ立會ヲ受クヘシ

第四十五條　私設保稅倉庫ノ業務ニ從事スル者ノ氏名ハ其庫主ヨリ稅關又ハ稅關支署ニ屆出ヘシ

其變更アルトキ亦同シ

第四十六條　庫主ノ雇人及其使用スル人夫ニシテ私設保稅倉庫內若クハ其構內ニ出入スル者ニ付テハ庫主ハ相當ノ取締方法ヲ設クヘシ

第四十七條　私設保稅倉庫ノ庫主ハ藏置貨物ニ關スル帳簿ヲ設ケ其出入ヲ明カニスヘシ

第四十八條　私設保稅倉庫ノ庫主ハ稅關又ハ稅關支署ノ要求ニ從ヒ其營業ニ關スル諸般ノ報告書ヲ差出スヘシ

第四章　雜則

第四十九條　保稅倉庫ノ開扉ハ日出ヨリ日沒マテノ間ニ限ルモノトス

第五十條　稅關ノ休日ニ於テ保稅倉庫ノ開扉ヲ要スルトキハ臨時開庫願書ヲ稅關又ハ稅關支署ニ差出シ特許ヲ受クヘシ

第五十一條　稅關ノ休日ニ於テ保稅倉庫ノ開扉ヲ要スルトキハ一時間ニ付金一圓ノ手數料ヲ納ムヘシ

第五十二條　保稅倉庫法第十六條第十七條及第二十七條ノ公告ハ關係ノ稅關又ハ稅關支署ニ掲示スルノ外三日以上官報又ハ新聞紙ヲ以テ公告スヘシ

第五十三條　貨物庫入ノ日ヨリ起算スル期間ハ庫入免狀交付ノ日ヨリ計算ス

第五十四條　貨主其藏置貨物ノ調査ヲ爲サントスルトキハ稅關又ハ稅關支署ニ申出テ承認ヲ受クヘシ

第五十五條　庫內ニ火氣ヲ入ルヽコトヲ得ス燈火ヲ要スルトキハ軍艦用ノ提燈ヲ用ユヘシ

第五十六條　本規則ニ依リ左ノ願書ヲ稅關又ハ稅關支署ニ差出ストキハ其取扱ノ手數料トシテ每件金二十錢ヲ納ムヘシ

一庫入願書
一庫移願書
一積戾願書
一藏置期限延期願書
一回送願書

第五十七條　本規則ニ依ル手數料ハ其金額ニ相當スル登記印紙ヲ願書ニ貼用シテ納付スヘシ

第五十八條　官設保稅倉庫ニ藏置ノ貨物ニ係ル運搬費公告料其他貨物取扱ノ費用ハ貨主ノ負擔トス

前項ノ諸費ニシテ政府ニ辨償スヘキモノハ貨物庫出ノトキ稅關又ハ稅關支署ニ納ムヘシ

第五十九條　官設保稅倉庫ノ藏置貨物取扱ニ從事スル人夫ハ豫メ稅關又ハ稅關支署ノ承認ヲ得タル者ニ限ルヘシ

第六十條　本規則ニ依リ稅關又ハ稅關支署ニ差出スヘキ願書及屆書ハ稅關一定ノ書式ニ依ルヘシ

○文部省令第八號

京都帝國大學ノ理工科大學ハ本年九月十一日ヨリ開設シ土木工學及機械工學ノ二學科ヲ置ク

明治三十年六月二十三日　　文部大臣侯爵蜂須賀茂韶

○遞信省令第十四號

明治二十九年五月遞信省令第五號電氣事業取締規則左ノ通改正ス

明治三十年六月二十三日　　遞信大臣子爵野村靖

電氣事業取締規則

第一章　總則

第一條　此ノ規則中電氣事業ト稱スルハ電燈、電氣鐵道及其ノ他ノ電力事業ヲ謂フ但シ私設鐵道條例ニ據ル電氣鐵道及船舶內ノ電燈及電力事業ハ之ヲ除ク

第二條　此ノ規則中電線ト稱スルハ電氣傳送ニ用フル金屬線ヲ謂フ

第三條　此ノ規則中電路ト稱スルハ發電機、電線其ノ他ノ器具、大地等電流ノ通過スル一全路ヲ謂フ

第四條　此ノ規則中線路ト稱スルハ家屋外ニ施設セル電線及其ノ支持物ヲ謂フ

第五條　此ノ規則中引込線ト稱スルハ幹線ヨリ分岐シ需用者構外ニ於ケル支持物ヲ經由セス其ノ需用者ニ達スル屋外電線ヲ謂フ

第六條　此ノ規則中低壓ト稱スルハ直流法ニアリテハ六百「ヴォルト」交流法ニアリテハ三百實效「ヴォルト」ヲ超過セサル電壓ヲ謂フ

高壓ト稱スルハ低壓ノ制限ヲ超過シ直流法ニアリテハ三千五百「ヴォルト」交流法ニアリテハ三千五百實效「ヴォルト」ヲ超過セサル電壓ヲ謂フ

特別高壓ト稱スルハ高壓ノ制限ヲ超過セル電壓ヲ謂フ

第七條　電氣事業ヲ爲サムトスル者ハ營業用タルト自家用タルトヲ問ハス其ノ事業ノ種類ニ依リ第三十三條若ハ第八十一條ニ掲クル書類ヲ添ヘ遞信大臣ニ願出許可ヲ受クヘシ

此ノ規則第三十七條ニ掲クル場所以外ニ施設スルモノ及一時限リノ演藝興行用ニ供スルモノニシテ之ニ使用スル電氣ノ電壓直流法ニアリテハ五百「ヴォルト」交流法ニアリテハ二百五十實效「ヴォルト」以下ニシテ其ノ電氣力二千「ワット」ヲ超過セサルモノハ前項規定ノ限ニ在ラス但シ工事施行前此ノ規則第三十四條ニ掲クル工事設計明細書ヲ添ヘ遞信大臣ニ屆出ヘシ之ヲ變更スル場合亦同シ

第八條　特別高壓電氣ノ使用ハ特種ノ保安裝置ヲ爲スモノニ限リ遞信大臣其ノ土地ノ狀況ニ依リ許可スルモノトス

第九條　事業者事業ノ許可ヲ受ケタル後第三十三條第二項乃至第四項若ハ第八十一條第二項乃至第四項ノ事項ヲ變更セムトスルトキハ遞信大臣ノ認可ヲ受クヘシ其ノ工事施行認可以前ニ於テ第三十三條第五項若ハ第八十一條第五項ノ事項ヲ變更セムトスル場合亦同シ

第十條　事業者ハ事業ノ許可ヲ得タル日ヨリ六箇月以內ニ第三十四條及第三十五條又ハ第八十二條及第八十四條ノ區別ニ從ヒ工事施行ノ認可ヲ遞信大臣又ハ地方長官ニ出願スヘシ

前項ニ據リ工事施行ノ認可ヲ受ケタルモノハ其ノ日ヨリ六箇月以內ニ工事ニ著手スヘシ其ノ增設又ハ變更ノ認可ヲ受ケタル場合亦同シ

第十一條　遞信大臣ハ臨時吏員ヲ派遣シ電氣工事施行中ノ工事又ハ事業開始後業務ノ實況ヲ監査セシメ其ノ施設他ニ障害ヲ及ホシ若ハ危險ノ虞アリト認ムルトキハ改修又ハ撤去若ハ使用ノ停止ヲ命スルコトアルヘシ但シ監査ニ係ル試驗費用ハ事業者ノ負擔トス

第十二條　遞信大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テ事業者ニ命シ電氣用器具及物品ノ見本ヲ差出シ其ノ試驗ヲ受ケシムルコトアルヘシ若試驗ノ成績不完全ナリト認ムルトキハ改修又ハ使用ノ停止ヲ命スルコトアルヘシ但シ其ノ試驗ニ係ル費用ハ事業者ノ負擔トス

第十三條　遞信大臣ハ地方長官（東京府ハ警視總監以下之ニ倣フ）ヲシテ第十一條ノ監査又ハ第十二條ノ試驗ヲ爲サシムルコトアルヘシ若地方長官ニ於テ危險急迫ナリト認ムルトキハ改修又ハ撤去若ハ使用ノ停止ヲ命スルコトヲ得

第十四條　事業者其ノ施設スル工事落成シタルトキハ其ノ工事施行ノ認可ヲ受ケタル區別ニ從ヒ遞信大臣又ハ地方長官ニ屆出ヘシ

遞信大臣又ハ地方長官ハ前項ノ屆出ニ依リ吏員ヲ派遣シ其ノ落成工事ヲ檢査セシメ完全ナリト認ムルトキハ使用認可證ヲ下付スヘシ其ノ證ヲ受ケサルモノハ使用スルコトヲ得ス但シ遞信大臣又ハ地方長官ニ於テ特ニ檢査ノ必要ナシト認ムルモノハ直ニ使用認可證ヲ下付スルヲトアルヘシ

第十五條　事業者ハ學識經驗アル主任技術者ヲ置キ工事施行前其ノ履歴書ヲ添ヘ遞信大臣ニ屆出ヘシ爾後之ヲ變更シタルトキハ三日以内ニ其ノ履歴書ヲ添ヘ屆出ヘシ但シ遞信大臣ニ於テ不適當ナリト認ムルトキハ其ノ變更ヲ命スルコトアルヘシ

第十六條　事業者其ノ事業ノ一部若ハ全部ヲ賣買又ハ讓渡セムトスルトキハ當事者雙方逓署ノ上遞信大臣ニ願出許可ヲ受クヘシ

前項ニ據リ許可ヲ受ケタル事業ノ引渡ヲ爲シタルトキハ三日以内ニ當事者雙方逓署ノ上遞信大臣ニ屆出ヘシ

第十七條　左ノ事項ハ事業者三日以内ニ地方長官ニ屆出ヘシ

一　事業ノ開始及廢止

二　會社又ハ事務所名稱ノ變更

三　會社又ハ事務所ノ位置及其ノ變更

四　事業者又ハ主任技術者ノ改氏名

五　取締役、業務擔當者其ノ他事業管理者ノ氏名若ハ其ノ變更又ハ改氏名

六　送電ノ停止及廢止但シ其ノ理由ヲ記スヘシ

第十八條　事業者ハ其ノ事業ヨリ災害其ノ他ノ故障ヲ生シタルトキハ其ノ時日、場所、原因及狀況等ヲ具シ地方長官ニ屆出ヘシ

第十九條　事業者ハ送電中ノ架空ノ電燈線、電力線又ハ電氣鐵道用電線ノ近傍ニ出火アルトキハ直ニ現場ニ技術者又ハ工夫ヲ派遣シ危險豫防ノ手續ヲ施シ其ノ旨出張ノ警察官ニ屆出シムヘシ

其ノ出張員ハ該官ノ許可ヲ得ルニアラサレハ退場スルコトヲ得ス

出火ノ場所ニ派遣ノ技術者又ハ工夫ハ晝間ハ標旗夜間ハ標燈ヲ携帶スヘシ

第二十條　事業者ハ送電中ノ架空ノ電燈線、電力線又ハ電氣鐵道用電線ノ近傍ニ出火アルトキハ直ニ其ノ區域内ノ電流ヲ遮斷スヘシ

前項ニ據リ送電ヲ止メタル區域内電線ノ各要所ニ晝間ハ標旗夜間ハ標燈ヲ掲クヘシ

第二十一條　前二條ノ標旗及標燈ノ制式ハ別ニ之ヲ定ム

第二十二條　地方長官ハ出火其ノ他非常ノ場合ニ際シ危險豫防ノ手續ヲ爲サシムルノ必要アリト認ムルトキハ常ニ線路ノ各要所ニ技術者又ハ工夫ノ散宿ヲ命スルコトアルヘシ

散宿所ニハ屋外衆人ノ睹易キ所ニ其ノ標札ヲ掲クヘシ

第二十三條　事業者第十條ニ規定スル期限内ニ工事施行認可ノ出願ヲ爲サス又ハ工事ニ著手セス又ハ落成期限ヲ過クルモ尚ホ落成セス若ハ使用認可證ヲ受ケタル日ヨリ六箇月以内ニ線路ヲ使用セサルトキハ遞信大臣又ハ地方長官ニ於テ事業ノ許可又ハ工事施行ノ認可ノ全部又ハ一部ヲ取消スコトアルヘシ但シ天災其ノ他正當ノ理由アリト認ムルトキハ相當ノ延期ヲ與フルコトアルヘシ

第二十四條　前條ニ據リ遞信大臣又ハ地方長官ニ於テ事業ノ許可若ハ工事施行ノ認可ヲ取消シタルトキ又ハ事業者廢業ノトキニ於テハ地方長官ニ於テ期限ヲ指定シ線路ノ撤去ヲ命スヘシ若事業者之ヲ怠ルトキハ地方長官ニ於テ之ヲ執行シ事業者ヲシテ其ノ費用ヲ辨償セシムヘシ

第二十五條　送電ヲ廢止シタル線路ハ地方長官ニ於テ期限ヲ指定シ之カ撤去ヲ命スルコトアルヘシ若事業者之ヲ怠ルトキハ前條ノ例ニ據リ處分ス

第二十六條　此ノ規則ニ據リ遞信大臣ニ差出ス書類ハ總テ所轄地方廳（東京府ハ警視廳）ヲ經由スヘシ

第二十七條　遞信大臣又ハ地方長官ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テ此ノ規則第四十七條第六十九條第八十九條第九十條第九十二條第九十三條及第百四條ノ記錄ヲ差出サシムルコトアルヘシ

第二十八條　此ノ規則中第三十八條第七十五條第七十八條第七十九條第八十條及第九十五條第一項ノ規定ハ自家用電氣事業ニ準用セス

第二十九條　此ノ規則中第三十六條第四十條第五十五條第六十三條第六十四條第六十五條第六十七條第六十八條及第六十九條ノ規定ハ發電所、配電所及變壓所內ニ適用セス

第三十條　自家用ノ爲施設スル電氣事業ハ此ノ規則第三十三條及第三十四條若ハ第八十一條及第八十二條ノ願書ヲ同時ニ提出スルコトヲ得

第三十一條　事業者此ノ規則ノ條項ニ違背シ又ハ此ノ規則ニ據リ發スル命令ヲ遵守セサルトキハ遞信大臣ハ電氣ノ使用ヲ停止シ又ハ事業ノ許可ヲ取消スコトアルヘシ

第三十二條　遞信大臣ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テ此ノ規則規定以外ノ施設ヲ命スルコトアルヘシ

第二章　電燈及電力

第一節　出願及報告

第三十三條　此ノ規則第七條ニ據リ電燈又ハ電力事業ノ許可ヲ得ムトスル者ハ其ノ願書ニ左ノ事項ヲ具備シタル書類ヲ添附スヘシ

一　會社又ハ事務所ノ名稱

二　事業ノ目的（自家用ニアリテハ使用區域）

三　供給區域（自家用ニアリテハ使用區域）

四　發電所、變壓所及配電所ノ位置竝其ノ位置ヨリ供給區域（自家用ニアリテハ使用區域）ニ達スル線路ノ經過地名及其ノ略圖（縮尺凡二萬分ノ一）

五　工事設計（原動力ノ種類及其ノ馬力數、電氣方式、電氣馬力數又ハ「ワット」數、線路ノ種類ヲ記入スルヲ要ス）

原動力ニ水力ヲ使用スルモノハ水利使用許可書類若ハ承諾書又ハ其ノ謄本ヲ添附スヘシ

第三十四條　電燈又ハ電力事業ノ許可ヲ得タル者ハ工事施行前左ノ事項ヲ具備シタル書類ヲ遞信大臣ニ差出シ工事施行ノ認可ヲ受クヘシ其ノ事項ヲ變更スル場合亦同シ

一　工事設計明細書（發電所、變壓所及配電所內機械器具ノ裝置法、發電機ノ種類、箇數及電氣馬力數、又ハ「ワット」數、變壓器ノ種類、電氣方式、配電法、線路ノ種類及其ノ構造法、保安裝置法ヲ明細ニ記入スルヲ要ス）

二　落成期限（工事ヲ數部ニ區分シ各部ノ落成毎ニ第十四條ノ檢査ヲ受ケムトスルモノハ其ノ各部ノ落成期限）

工事設計明細書ニハ原動機ノ種類、個數及其ノ馬力數ヲ記載セル書類ヲ添附スヘシ

更シタルトキハ其ノ都度遞信大臣ニ屆出ヘシ

第三十五條　線路ヲ新設延長若ハ變更セムトスルトキハ其ノ都度工事施行前左ノ事項ヲ具備シタル書類ヲ地方長官ニ差出シ工事施行ノ認可ヲ受クヘシ其ノ電柱、埋線試驗口ノ位置、埋線ノ深サ及落成期限ヲ變更セムトスル場合亦同シ但シ引込線、共同引込線及使用者構內ニ在ルモノハ認可ヲ受クルヲ要セス

一　線路敷地使用許可書類若ハ地主ノ承諾書又ハ其ノ謄本

二　線路實測圖面（縮尺二千分ノ一）（發電所、變壓所及配電所ノ位置、電柱、埋線試驗口及線路ノ位置竝其ノ近傍ノ町村名、電柱ノ番號、道路ヘ出幅、其ノ最近地ノ番地、道路ノ幅員、埋線ノ深サ、電信線、電話線、其ノ他電氣信號線等ノ位置及鐵道ト交叉スル所アレハ其ノ位置等ヲモ明瞭ナル凡例ヲ掲ケ記入スルヲ要ス）

三　落成期限（工事ヲ數部ニ區分シ各部ノ落成毎ニ第十四條ノ檢査ヲ受ケムトスルモノハ其ノ各部ノ落成期限）

第三十六條　電燈線又ハ電力線ヲ增設シ若ハ撤去シタルトキハ三日以內ニ地方長官ニ屆出ヘシ但シ引込線、共同引込線及使用者構內ニ在ルモノハ此ノ限ニ在ラス

第三十七條　劇場、寄席、紡績工場又ハ火藥、石油其ノ他爆發燃燒シ易キ危險ノ物品ヲ製造シ若ハ貯藏スル場所內ニ電氣ヲ供給セムトスルトキハ事業者及需用者連署ノ上擔當技術者ノ署名シタル工事方法書ヲ地方長官ニ差出シ認可ヲ受クヘシ但シ一時限リ劇場內ニ於テ演藝興行用ニ供スル爲二千「ワット」ヲ超過セサル電氣ヲ供給セムトスルトキハ本條ノ認可ヲ受クルヲ要セス其ノ都度地方長官ニ屆出ヘシ

前項ニ據リ地方長官ノ認可ヲ得テ施行シタル工事落成ノ後ハ三箇月毎ニ一回主任技術者ノ試驗成蹟書ヲ地方長官ニ差出スヘシ

第三十八條　引込線、共同引込線ヲ新設、增設又ハ變更撤去シタルトキハ左ノ事項ヲ記シ毎月一回取纒メ地方長官ニ屆出ヘシ但シ引込線、共同引込線ニ移動ナキモ左ノ事項ニ變更ヲ生シタルトキ亦同シ

一　需用ノ場所

二　電燈ノ種類（白熱燈、弧狀燈ノ別）及其ノ箇數

三　電動機ノ種類箇數及電氣馬力數又ハ「ワット」數

第二節　工事

第三十九條　電路ハ全部大地ヨリ充分絶緣スヘシ但シ他ニ障害ヲ及ホスノ虞ナシト認ムル場合ハ逓信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ規定ニ據ラサルコトヲ得

第四十條　電線ハ使用電流ノ爲攝氏二十度以上ノ溫度ヲ增スコトナク且絶緣物ニ變化ヲ顯ハサルモノタルヘシ

第四十一條　各電線ニハ完全ナル安全器ヲ備ヘ電流ノ爲攝氏四十度以上ノ溫度ヲ增サレムヘカラス

第四十二條　各電路ニハ必要ナル場所ニ避雷ノ裝置ヲ爲スヘシ

第四十三條　高壓線路ニハ各要所ニ開閉器ヲ裝置シ火急ノ場合ニ於テ送電ヲ停止スルニ便ナラシムヘシ

第四十四條　電路ニハ必ス漏電ヲ檢スルノ裝置ヲ爲スヘシ但シ逓信大臣ニ於テ電路ト大地トヲ接續スルコトヲ認可シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第四十五條　各高壓電路ニハ發電所ニ於テ銳敏ナル自働遮斷法ヲ設クヘシ

第四十六條　架空電線ハ總テ絶緣物ヲ以テ被覆シ外物ニ觸ルルモ容易ニ損傷セサル樣外裝シタルモノタルヘシ

三百「ヴォルト」以上ノ低壓ニ使用スル電線ノ被覆ハ適當ナル絶緣物ヲ以テシ其ノ絶緣力ハ二十四時間浸水ノ後更ニ鹽水ニ浸シ一分時間充電ノ後一百「ヴォルト」以上ノ電壓ヲ以テ試驗シ攝氏十五度ノ溫度ニ於テ一里五百「オーム」以上ノモノタルヘシ

高壓ニ使用スル電線ノ被覆ハ護謨又ハ之ニ相當スル善良ナル絶緣物ヲ以テシ其ノ厚サ三厘五毛以上ニシテ其ノ絶緣力ハ二十四時間浸水ノ後更ニ鹽水ニ浸シ一分時間充電ノ後一百「ヴォルト」以上ノ電壓ヲ以テ試驗シ攝氏十五度ノ溫度ニ於テ一里四十萬「オーム」以上ノモノタルヘシ

八家ヲ離隔シ交通稀少ニシテ危險ノ虞ナシト認ムル場所ニ於ケル架空電線ハ逓信大臣ノ認可ヲ得テ前各項ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第四十七條　屋外架空高壓電線ノ大地トノ絶緣力ハ一百「ヴォルト」以上ノ電壓ヲ以テ試驗シ一里平均十萬「オーム」ヲ下ルヘカラス但シ土地ノ狀況ニ依リ危險ノ虞ナシト認ムル場合ハ逓信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ヲ低減スルコトヲ得

前項ノ絶緣力ハ毎月二回之ヲ試驗シ其ノ成蹟ヲ記錄シ置クヘシ

第四十八條　屋外ニ架設スル架空電線ノ切斷面積ハ直徑六厘五毛ノ圓形ノ積ヨリ小ナルヘカラス

第四十九條　道路ニ架設スル架空電線ハ道路ノ片側ニアラサレハ其ノ架設ヲ許サス若電氣鐵道用架空電線又ハ他ノ電燈、電力用架空電線ノ架設シアル道路ニ架設スルトキハ之ト同側ニ架設シ若道路ノ片側ニ電信線、電話線其ノ他電氣信號線ノ架設シアルトキハ他ノ片側ニ架設スヘシ但シ工事上止ムヲ得サル場所ハ逓信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第五十條　架空電線ハ道路ヲ橫斷スル所ニ於テハ地表ヲ距ル二十尺以上其ノ他ノ場所ニ於テハ

十六尺以上タルヘシ又造營物ニ沿ヒ架設スルトキハ四尺以上造營物ノ上ヲ架渉スルトキハ六尺以上離隔セシムヘシ但シ危險ノ虞ナシト認ムル場所ハ地方長官ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第五十一條　弧狀電燈用ノ架空電線ハ往復線ヲ竝行ニ架設スヘシ但シ他ニ障害ヲ及ホスノ虞ナシト認ムル場合ハ逓信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第五十二條　他人ニ屬スル架空ノ電信線、電話線又ハ電氣信號線ト竝行交叉若ハ接近シテ架空電線ヲ架設スルトキハ左ノ距離ヲ保タシムヘシ但シ電信線、電話線其ノ他電氣信號線管理者ノ承諾ヲ得タルトキ及引込線、共同引込線ニシテ工事上止ムヲ得サルモノニ限リ本條規定ノ距離ニ據ラスシテ架設スルコトヲ得ヘシト雖二尺以內ニ接近セシムヘカラス

一　電信線又ハ電氣信號線ト竝行シテ架設スルトキ及往復線竝架ノ直流法電燈線ト電話線ト竝行シテ架設スルトキハ六尺以上

二　交流法電燈線、單線架設ノ直流法電燈線又ハ電力線ニシテ電話線ト竝行シテ架設スルトキハ十二尺以上

三　電信線、電話線其ノ他電氣信號線ト交叉又ハ接近シテ架設スルトキハ三尺以上

第五十三條　他人ニ屬スル架空ノ電燈線、電力線又ハ電氣鐵道用電線ト交叉シ若ハ之ニ接近シテ架空電線ヲ架設スルトキハ三尺以上離隔スヘシ

但シ工事上已ムヲ得サル場所ニシテ地方長官ノ認可ヲ得タルモノ又ハ同一ノ電柱ニ架渉スルモノハ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第五十四條　電信線、電話線又ハ其ノ他ノ電氣信號線ト其ノ上部ニ於テ交叉シ若ハ六尺以內ノ距離ニ接近シテ架空電線ヲ架設スルトキハ其ノ前日マテニ關係管理者ニ通知シ立會ヲ請フヘシ

第五十五條　弧狀電燈ハ炭素粉ノ墜落スルコトナキ樣豫防ノ裝置ヲ爲スヘシ

屋外ノ弧狀電燈ハ人ノ容易ニ觸レサル樣取附クヘシ

第五十六條　架空電線ノ分岐ハ其ノ電線ノ支持點ニ於テ之ヲ爲スヘシ但シ土地ノ狀況ニ依リ地方長官ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第五十七條　引込線ヨリ分岐シ道路ヲ横斷セシテ五個以內ノ需用者ニ共同引込線ヲ施設スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ家屋ニ接近シタル部分ニハ特ニ第四十六條ニ規定スル高壓用絕緣電線ヲ用フヘシ

第五十八條　架空電線以外ノ電線ヲ他ノ金屬體ト交叉シ若ハ之ニ接近シテ施設スルトキハ其ノ電線又ハ之ヲ納メ若ハ保護スル爲用フル金屬體ヨリ他ノ金屬體ニ放電ヲ起ササル樣豫防方法ヲ設クヘシ

第五十九條　埋線試驗口ハ成ルヘク瓦斯又ハ水ノ浸入スルコトナキ樣築造スヘシ若瓦斯ノ浸入スルコトアルモ電氣作用ノ爲爆發セサル樣豫防方法ヲ設クヘシ

第六十條　高壓電線ト低壓電線トヲ同一ノ管若ハ樋內ニ納ムルコトヲ許サス

第六十一條　架空電線以外ノ高壓電線ヲ人畜ニ危害ヲ及ホスノ虞アル場所ニ施設スルトキハ完全ナル絕緣方法ヲ施シ之ヲ堅牢ナル管若ハ樋等ニ納ムヘシ

第六十二條　電線ヲ納ムル暗渠管若ハ樋等ハ堅牢ニシテ荷車其ノ他重大ナル重量ノ壓力ニ耐ヘ且容易ニ瓦斯又ハ水ノ浸入セサル樣築造スヘシ

第六十三條　電線ヲ納メ若ハ之ヲ鎧裝スル爲用フル金屬體ハ充分大地ト電氣的接續ヲ爲スヘシ但シ電燈球取附用器具其ノ他之ニ類スル短小ナルモノハ此ノ限ニ在ラス

第六十四條　開閉器、安全器、抵抗器及其ノ他導體ニ接スル器具ハ耐火質ノモノタルヘシ否ラサレハ耐火質ノ物體ニ取附クヘシ

第六十五條　屋内ニ施設スル電線ハ總テ被覆シタルモノヲ使用シ時々點檢シ得ヘキ所ニシテ常ニ人ノ容易ニ觸レサル樣取附クヘシ若點檢シ難キ所ニ取附クルトキハ第六十六條ニ規定スル高等絶縁電線ヲ使用スヘシ

第六十六條　前條ノ高等絶縁電線ハ護謨又ハ之ニ相當スル善良ナル絶縁物ヲ以テ被覆シ其ノ絶縁力ハ二十四時間浸水ノ後更ニ鹽水ニ浸シ一分時間充電ノ後一百「ヴォルト」以上ノモノタルヘシ

驗シ撫氏十五度ノ溫度ニ於テ一里一百「メグオーム」以上ノモノタルヘシ

第六十七條　屋内ニ施設スル電線ハ碍子ヲ使用シテ之ヲ取附クヘシ常ニ乾燥セル場所ニシテ三百「ヴォルト」以下ノ電壓ニ使用スル電線ニ限リ蠟附木製「グリート」ヲ使用スルモ妨ケナシ但シ第六十六條ニ規定スル高等絶縁電線ト同等以上ノモノヲ使用スル場合ニハ此ノ限ニ在ラス

第六十八條　電線ノ天井、壁及床等ヲ通過スル箇所又ハ屋内ニ於テ電信線、電話線、電氣信號線、水管、瓦斯管其ノ他金屬體ニ接近スルカ若ハ相互ニ交叉スル所ニ於テハ之ヲ碍管内ニ納メ又ハ特別ノ裝置ヲ爲スヘシ

第六十九條　屋内電線ノ絶縁力ハ機械、器具及附屬物ヲ合セ漏洩電流ヲシテ最大供給電流ノ五千分ノ一ヲ超過セシムヘカラス

前項ノ絶縁力ハ毎年一回以上之ヲ試驗シ其ノ成績ヲ記錄シ置クヘシ

第七十條　電柱ニハ其ノ事業者名竝電柱ノ番號ヲ記スヘシ

高壓電線ヲ支持スル腕木ハ其ノ全部ヲ赤色ニ塗ルヘシ

第三節　變壓

第七十一條　變壓所ハ事業ノ爲專用スル場所ニ設置スヘシ

變壓器ハ當業者ノ外容易ニ之ニ觸ルルコト能ハサル場所ニ設置スヘシ

石造、煉化造、土藏造及塗家等ノ外部ニ限リ第七十三條ノ例ニ據リ變壓器ヲ取附クルコトヲ得

第七十二條　變壓器ノ内外ヲ問ハス低壓電線ト高壓電線ト相互ノ接觸ヨリ生スル危險ヲ豫防スル爲適當ノ方法ヲ設クヘシ

第七十三條　電柱上ニ設置スル變壓器ハ耐火耐水質ノ函内ニ納メ地上十六尺以上ノ所ニ取附クヘシ

第四節　供給

第七十四條　需用者ノ家屋内ニ供給スル電氣ノ電壓ハ直流法ニアリテハ五百「ヴォルト」交流法ニアリテハ二百五十實效「ヴォルト」以下タルヘシ特ニ此ノ制限以上ノ電氣供給ヲ要スルトキハ事業者需用者ト連署ノ上工事方法書ヲ遞信大臣ニ差出シ認可ヲ受クヘシ

第七十五條　需用者ノ需メニ應スル電氣供給時間中ハ事業者其ノ契約セル電氣ヲ充分ニ供給シ正當ノ理由ナクシテ送電ヲ停止スルコトヲ得ス

第七十六條　電路ニ送電スルトキハ其ノ電路ヲ檢査シ安全ト認ムルニアラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第七十七條　架空ノ高壓電線ハ一線條ニ付五萬「ワット」以上其ノ他ノ場合ニ於テハ二十萬「ワット」以上ヲ送電スルコトヲ得ス但シ危險ノ虞ナシト認ムル場合ハ遞信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第七十八條　電燈幹線中各部分ノ電壓ハ常ニ其ノ百分ノ三以上ノ變動ヲ起サス且變動ノ爲光力ニ不定ヲ顯ハササル樣維持スヘシ

第七十九條　需用者家屋内ノ線路ニ於テ障害アルコトヲ發見シタルトキハ障害ノ復舊スルマテ送電ヲ停止スヘシ此ノ場合ニ於テハ豫告ノ遑ナキトキノ外豫メ其ノ旨需用者ニ通知スヘシ

第八十條　修繕其ノ他ノ原因ニ因リ幹線中或ル部分ヘ一時間以上送電ヲ停止スル必要アルトキ

ハ其ノ原因火急ニ起リタル場合ノ外豫メ關係需用者ニ停止ノ旨ヲ通知スヘシ

第三章　電氣鐵道

第一節　出願及報告

第八十一條　此ノ規則第七條ニ據リ電氣鐵道事業ノ爲電氣使用ノ許可ヲ得ムトスル者ハ其ノ願書ニ左ノ事項ヲ具備シタル書類ヲ添附スヘシ

一　會社又ハ事務所ノ名稱

二　事業ノ目的

三　發電所、變壓所及配電所ノ位置竝其ノ位置ヨリ軌道ニ達スル線路ノ經過地名及其ノ略圖（縮尺凡二萬分ノ一）

四　軌道略圖（縮尺凡二千分ノ一）軌道ノ位置近傍ノ町村名、他ノ鐵道ト交叉スル所アレハ其ノ位置（單線式電氣鐵道ニアリテハ地下埋沒ノ金屬線、金屬管其ノ他金屬體ノ位置ヲモ）等ヲ凡例ヲ掲ケ記入スルヲ要ス

五　工事設計（原動力ノ種類及其ノ馬力數、電氣方式、電氣馬力數又ハ「ワット」數、電氣鐵道方式、線路ノ種類ヲ記入スルヲ要ス）

六　軌道敷設特許狀及命令書又ハ其ノ謄本

原動力ニ水力ヲ使用スルモノハ水利使用許可書類若ハ承諾書又ハ其ノ謄本ヲ添附スヘシ

第八十二條　電氣鐵道事業ノ爲電氣使用ノ許可ヲ得タルモノハ工事施行前左ノ事項ヲ具備シタル書類ヲ遞信大臣ニ差出シ工事施行ノ認可ヲ受クヘシ其ノ事項ヲ變更スル場合亦同シ

一　工事設計明細書（發電所、變壓所及配電所內機械器具ノ裝置法、發電機ノ種類、箇數及電氣馬力數又ハ「ワット」數、電車內機械器具ノ裝置法、變壓器ノ種類、電氣方式、配電法、電氣鐵道方式、軌道ノ構造法、軌鐵ノ種類及重量（單線式電氣鐵道ニアリテハ軌鐵ノ接續法ヲモ）線路ノ種類及構造法、保安裝置法ヲ明細ニ記入スルヲ要ス）

二　軌道實測圖面（縮尺二千分ノ一）軌道ノ位置、近傍ノ町村名、軌道及道路ノ幅員、電信線、電話線、其ノ他電氣信號線ノ位置、他ノ鐵道ト交叉スル所アレハ其ノ位置（單線式電氣鐵道ニアリテハ發電機ノ一極ヲ接地シタル點ノ位置、地下埋設ノ金屬線、金屬管其ノ他金屬體ノ位置ヲモ）等ヲ凡例ヲ掲ケ記入スルヲ要ス

三　落成期限（工事ヲ數部ニ區分シ各部ノ落成毎ニ第十四條ノ檢査ヲ受ケムトスルモノハ其ノ各部ノ落成期限）

工事設計明細書ニハ原動機ノ種類、個數及其ノ馬力數ヲ記載セル書類ヲ添附スヘシ其ノ事項ヲ變更シタルトキハ其ノ都度遞信大臣ニ屆出ヘシ

第八十三條　左ノ事項ハ事業者三日以內ニ地方長官ニ屆出ヘシ

一　幹線又ハ絕緣歸線ノ增設又ハ撤去

二　車輛數及其ノ增減

第八十四條　此ノ規則第三十五條ノ規定ハ電氣鐵道ニモ亦之ヲ適用ス

第二節　工事

第八十五條　遞信大臣ハ土地ノ狀況ニ依リ必要ト認ムルトキハ歸線ノ一部トシテ大地ヲ使用スルコトヲ許可セサルコトアルヘシ

第八十六條　架空電車線ノ太サハ直徑二分五厘以上ニシテ極メテ强硬ナル線條ヲ用フヘシ但シ危險ノ虞ナシト認ムル場合ハ遞信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第八十七條　歸線ハ軌道ノ中間若ハ軌道ノ外側一尺以內ニ敷設スル部分及軌鐵ヲ除ク外ハ總テ大地ヨリ絕緣スヘシ但シ他ニ障害ヲ及ホスノ虞ナシト認ムル場所ハ遞信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第八十八條　絕緣セサル歸線ヲ使用スル場合ニ於テ地下ニ埋設シタル金屬體アルトキハ左ノ各項ニ據リ施設ヲ爲スヘシ但シ金屬體所有者ノ承諾ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

一　歸線ハ地下埋設ノ金屬體ヨリ成ルヘク離隔シ其ノ距離六尺以上タルヘシ但シ工事上止ムヲ得サルトキハ六尺以內ニ近クルコトヲ得ルモ此ノ場合ニ於テハ遞信大臣ノ認可ヲ得テ歸線ト金屬體トノ間ニ不導體ノ離隔物ヲ設ケ電流ヲシテ地中六尺以上ヲ通過スルニアラサレハ

兩者間ヲ流通スルコト能ハサラシムヘシ

二　歸線ト其ノ近傍ニ在ル金屬體トノ間ニ電流ノ通スル場合ニ於テ其ノ方向歸線ヨリ金屬體ニ向テ流ルルトキハ兩者間ノ電壓ノ差四「ヴオルト」又金屬體ヨリ歸線ニ向テ流ルルトキハ兩者間ノ電壓ノ差一「ヴオルト」ヲ超過セシムヘカラス

三　軌鐵ハ電氣的完全ナル接續ヲ爲スヘシ

四　軌鐵ノ外一平方寸ノ百分ノ四以上ノ截面積ヲ有スル銅線又ハ之ト同等以上ノ導電力ヲ有スル歸線ヲ用フヘシ

五　軌道ノ中間又ハ軌道ノ外側一尺以内ニ敷設シタル絶縁セサル歸線ハ長サ一百尺以下毎ニ一平方寸ノ百分ノ三以上ノ截面積ヲ有スル銅線又ハ之ト同等以上ノ導電力ヲ有スル他ノ方法ヲ以テ軌鐵ト接續スヘシ

第八十九條　前條ノ場合ニ於テハ歸線ノ絶縁セサル部分ニ起ルヘキ最大電位ノ差及第九十條ニ規定スル接地點ヨリ發電機ニ向テ流ルル電流ハ常ニ之ヲ表示スルノ裝置ヲ爲シ之ヲ毎日記錄シ置クヘシ

第九十條　發電機ノ一極ヲ接地シタル點ノ近傍ニ於テ二箇ノ地板ヲ埋設シ且四「ヴオルト」以下ノ電壓ヲ用ヒテ兩接地點間ニ二「アムペアー」以上ノ電流ヲ發セシムル樣之ヲ施設シ少クトモ毎月一回以上之ヲ試驗シ其ノ成績ヲ記錄シ置クヘシ

前項接地點ハ金屬體ヨリ六尺以上ヲ隔テタル所ニ施設シ又埋設スヘキ地板ノ距離ハ十間以上タルヘシ

本條ニ適合セル接地點ヲ得難キ場合ニハ遞信大臣ノ認可ヲ得テ他ノ方法ヲ用フルコトヲ得

第九十一條　絶縁電線ノ絶縁力ハ其ノ漏洩電流軌道一里ニ對シ一「アムペアー」ノ三十分ノ一ヲ超過セサル樣維持スヘシ若其ノ漏洩電流軌道一里ニ對シ一「アムペアー」ヲ超過シ二十四時間ヲ過

クルモ之ヲ除去スルコト能ハサルトキハ直ニ車輛ノ運轉ヲ停止スヘシ但シ地下ニ埋設シタル絶縁電線ノ絶縁力ハ一里四百萬「オーム」ヲ下ルヘカラス

遞信大臣ハ土地ノ狀況ニ依リ前項ノ制限ヲ輕減スルコトアルヘシ

第九十二條　前條第一項本文ノ漏洩電流ハ毎日一回第一項但書ノ絶縁力ハ毎月一回使用最大電壓ヲ用ヒ之ヲ試驗シ其ノ成績ヲ記錄シ置クヘシ

第九十三條　歸線ト金屬體トノ電氣的接續ヲ爲スノ必要アル場合ニ於テハ金屬體所有者ノ承諾ヲ得タル後遞信大臣ノ認可ヲ受クヘシ其ノ接續ハ最モ善良ニシテ且容易ニ之ヲ點檢シ得ル樣施設シ三箇月毎ニ一回以上之ヲ試驗シ其ノ成績ヲ記錄シ置クヘシ

第九十四條　道路ニ架設スル架空電線ハ電車線ヲ除ク外道路ノ片側ニアラサレハ其ノ架設ヲ許サス若架空ノ電燈線、電力線又ハ他ノ電氣鐵道用電線ノ架設シアル道路ニ架設スルトキハ之ト同側ニ架設シ若道路ノ片側ニ電信線、電話線其ノ他電氣信號線ノ架設シアルトキハ他ノ片側ニ架設スヘシ但シ土地ノ狀況ニ依リ遞信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第九十五條　電車線ハ十町以内ノ區劃ニ分チ非常其ノ他道路ニ故障起リタル場合ニ於テ容易ニ電流ヲ遮斷シ得ル樣施設スヘシ但シ遞信大臣ハ土地ノ狀況ニ依リ本條ノ制限ヲ輕減スルコトアルヘシ

幹線ハ各要所ニ開閉器ヲ裝置シ火急ノ場合ニ於テ送電ヲ停止スルニ便ナラシムヘシ

幹線ニハ發電所ニ於テ鋭敏ナル自動遮斷法ヲ設クヘシ

第九十六條　電信線、電話線其ノ他電氣信號線ヲ架設セル場所ニ架空電線ヲ架設スルトキハ危險ノ虞ナク且障害ヲ與ヘサル樣離隔スヘシ

第九十七條　架空電線ハ電車線ヲ除ク外總テ絶縁物ヲ以テ被覆シ外物ニ觸ルルモ容易ニ損傷セサル樣外裝シタルモノタルヘシ

三百「ヴォルト」以上ノ低壓ニ使用スル電線ノ被覆ハ適當ナル絶縁物ヲ以テシ其ノ絶縁力ハ二十四時間浸水ノ後更ニ鹽水ニ浸シ一分時間充電ノ後一百「ヴォルト」以上ノ電壓ヲ以テ試驗シ攝氏十五度ノ溫度ニ於テ一里一百「オーム」以上ノモノタルヘシ

高壓ニ使用スル電線ノ被覆ハ第四十六條規定ノ制限ニ據ルヘシ

人家ヲ離隔シ交通稀少ニシテ危險ノ虞ナキ場所ニ於ケル架空電線ハ遞信大臣ノ認可ヲ得テ前各項ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第九十八條　架空ノ電車線ニハ其ノ上部三尺以上ノ距離ニ於テ少クトモ二條ノ金屬線ヲ大地ヨリ絶縁架設スルカ若ハ適當ナル方法ヲ設ケ電信線、電話線其ノ他電氣信號線ト電氣的混觸ヲ豫防スルノ裝置ヲ爲スヘシ但シ危險ノ虞ナシト認ムル場合ハ遞信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第九十九條　架空ノ電車線ハ地表ヲ距ル十六尺以上其ノ他ノ架空電線ハ道路ヲ横斷スル所ニ於テハ地表ヲ距ル二十尺以上其ノ他ノ場所ニ於テハ十六尺以上タルヘシ又造營物ニ沿ヒ架設スルトキハ四尺以上造營物ノ上ヲ架渉スルトキハ六尺以上離隔セシムヘシ但シ土地ノ狀況ニ依リ危險ノ虞ナシト認ムル場所ハ地方長官ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第百條　此ノ規則中第四十條第四十一條第四十二條第四十四條第五十二條本文及第三項第五十三條第五十四條第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第六十四條第七十條第七十一條第一項及第二項第七十二條及第七十三條ノ規定ハ電氣鐵道ニモ亦之ヲ適用ス

第三節　機械及運轉

第百一條　電車線ニ使用スル電氣ハ直流法ニシテ其ノ電壓ハ六百「ヴォルト」以下タルヘシ但シ六百「ヴォルト」以上ノ電壓又ハ交流法ノ電氣ヲ使用セムトスルトキハ遞信大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第百二條　電車ニハ總テ避雷ノ裝置ヲ爲スヘシ

第百三條　地方長官ハ必要ト認ムル場合ニ於テ事業者ニ命シ電車ニ避難器、速度制限器、特種ノ緩急器等ヲ裝置セシムルコトアルヘシ

第百四條　毎日運轉スル車輛數及其ノ使用スル最大ノ電流及電壓ハ之ヲ記錄シ置クヘシ

第百五條　絶縁セサル歸線ヲ使用スルトキハ其ノ歸線ハ發電機ノ消極ニ接續スヘシ但シ土地ノ狀況ニ依リ遞信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第四章　罰則

第百六條　此ノ規則第七條第一項ノ許可若ハ第九條ノ認可又ハ第三十四條若ハ第八十二條ノ認可ヲ受ケス又ハ第七條第二項ノ屆出ヲ爲サスシテ工事ニ著手シ又ハ第十四條第二項ノ規定ニ違反シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金又ハ十二日以上二十五日以下ノ禁錮ニ處ス

第百七條　此ノ規則第十五條第十九條第二十條第三十五條第三十七條第五十七條第七十條第七十四條第七十五條第七十七條第七十九條第八十條第九十三條前段及第百一條ノ規定ニ違反シ又ハ第十七條第十八條第三十六條第三十八條及第八十三條ノ屆出ヲ爲サス又ハ第二十七條ノ記錄ヲ差出サス若ハ第四十七條第六十九條第八十九條第九十條第九十二條第九十三條及第百四條ノ記錄ヲ爲ササル者ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料又ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處ス

第百八條　第百六條第百七條ノ罰則ハ商事會社ニアリテハ其ノ所爲ヲ爲シタル業務擔當ノ任アル社員取締役若ハ使用人ニ之ヲ適用ス

第五章　附則

第百九條　此ノ規則ハ明治三十年七月十日ヨリ實施ス

第百十條　既設ノ電氣事業ニシテ此ノ規則第四十六條第二項及第三項第四十九條第五十二條本文及第三項第五十七條第六十五條第八十八條第二項第九十四條第九十七條第二項第三項及第九十

八條ノ規定ニ適合セサルモノハ遞信大臣ノ認可ヲ受ケタル事項ニ限リ其ノ指定スル期限内之カ施設若ハ改造ヲ猶豫スルコトアルヘシ

前項ノ猶豫ヲ受ケムトスル者ハ此ノ規則施行ノ日ヨリ一箇月以内ニ詳細ノ理由ヲ具シ遞信大臣ニ願出ヘシ

○農商務省令第八號

明治三十年法律第十號蠶種檢査法施行細則左ノ通相定ム

明治三十年六月二十四日　農商務大臣伯爵大隈重信

蠶種檢査法施行細則

第一條　蠶種製造者ハ毎年二月十五日迄ニ雌形第一號ニ據リ其ノ年ノ原種掃立蛾數及蠶種製造豫算額ヲ地方廳ニ屆出ツヘシ

第二條　蠶種製造者ハ左ノ第一號ノ事項ヲ蠶種製造前ニ第二號ノ事項ヲ檢査前ニ其ノ壹紙ニ明記スヘシ

一　表面ニ春夏秋蠶ノ別及其ノ名稱
　表面又ハ裏面ニ製造者ノ住所氏名
二　製造年月日

第三條　蠶種製造者原種ヲ製造セントスルトキハ一區ニ一母蛾ヲシテ産卵セシメ母蛾ト其ノ産卵區トニ同一ノ符號ヲ附スヘシ

第四條　蠶種製造者夏秋蠶ヨリ産生シタル繭ヲ以テ蠶種ヲ製造セントスルトキハ其ノ年ノ初期ニ於テ掃立タル原種ヨリ繼續飼育シタルモノニ限ル

但初期掃立タル原種ノ掃殼ハ産卵後ノ檢査ヲ經ルマテ之ヲ保存スヘシ

第五條　蠶種檢査法第五條ニ據リ檢査ヲ受クヘキ蠶種ハ左ノ順序ニ據リ其ノ檢査ヲ行フ

一　收繭後ニ於テハ繭及其ノ原種ノ掃殼
二　産卵後ニ於テハ蠶種及其ノ製造ニ供用シタル出殼繭
三　原種ニ在リテハ前二號ノ外尚其ノ製造ニ供用シタル母蛾

第六條　前條第一號第二號ノ檢査ハ蠶種製造者ニ就キ之ヲ行ヒ同條第三號及蠶種檢査法第八條第二項ノ檢査ハ蠶種檢査所ニ於テ之ヲ行フ

第七條　蠶種製造者ハ第五條第一號ノ檢査ヲ受クヘキ以前ニ於テ蠶種檢査法第三條ニ該當スル繭ヲ除去シ其枡量ト種繭ノ枡量トヲ各別ニ量定シ置クヘシ

但名稱ノ異リタル繭ヲ混同スヘカラス

第八條　前條ニ據リ撰別シタル種繭ニシテ尚不完全ト認メタルトキハ蠶種檢査員ハ再ヒ其ノ撰別ヲ命スルコトヲ得

第九條　蠶種檢査員第五條第一號ノ檢査ヲ行ヒ蠶種檢査法第三條第四條ニ違背セスト認メタルトキハ雌形第二號ノ種繭證明書ヲ付與スヘシ

檢査ヲ經タル掃殼ニハ其ノ壹紙ノ裏面ニ自己ノ檢印ヲ押捺スヘシ

第十條　蠶種檢査員第五條第二號ノ檢査ヲ行ヒ蠶種製造額出殼繭及種繭證明書ヲ照合シテ正當ト認メタルトキハ其ノ蠶種壹紙ノ裏面ニ原種ニ在リテハ雌形第三號ノ原種用ノ印ヲ、製絲用種ニ在リテハ雌形第四號ノ製絲用種檢査合格證印ヲ押捺スヘシ

第十一條　蠶種製造者一枚ノ製絲用蠶種ヲ截斷シテ賣渡シ若クハ讓渡サントスルトキハ檢査前ニ於テ豫メ壹紙ノ裏面ニ截斷スヘキ線ヲ區劃シ置クヘシ

前項ノ蠶種ニハ壹紙ノ裏面毎區ニ檢査合格證印ヲ押捺ス

第十二條　第五條第三號ノ檢査ハ左ノ方法ニ據リ之ヲ行フ